

510
85

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始



510
85

本館本
P199-204
33.1.9

虛舟蘭野道明著

老子解義



東京明治書院

大正
13.9 9
内交

老子解義

凡例

一

老子は周代大徳の隠君子なり、然れども其の生榮は何王の世なりしか、未だ詳かならず、司馬遷の史記に據れば、老子ハ楚ノ苦縣厲郷曲仁里ノ人ナリ、姓ハ李氏、名ハ耳、字ハ伯陽、諡シテ聃トイフ、周ノ守藏室ノ史ナリ、孔子周ニ適キ、將ニ禮ヲ老子ニ問ハントス、老子曰ハク、(中略)吾之ヲ聞ク、良賈ハ深ク藏メテ、虚シキガ若ク、君子ハ盛徳アリテ容貌愚ナルガ若シ、子ノ驕氣ト多欲ト、態色ト淫志トヲ去レ、是レ皆子ノ身ニ益ナシ、吾ガ子ニ告グル所以ハ是ノ若キノミト、孔子去リテ弟子ニ謂ツテ曰ハク、鳥ハ吾其ノ能ク飛ブコトヲ知リ、魚ハ吾其ノ能ク游グコトヲ知リ、獸ハ吾其ノ能ク走ルコトヲ知ル、走ル者ハ以テ

罔ヲ爲スベク、游グ者ハ以テ綸ヲ爲スベク、飛ブ者ハ以テ燿ヲ爲スベシ。龍ニ至リテハ吾其ノ風雲ニ乗ジテ而シテ天ニ上ルヲ知ルコト能ハズ。吾今日老子ヲ見ルニ、其レ猶ホ龍ノ如キカト。老子道德ヲ修メ、其ノ學自ラ隠レテ名ナキヲ以テ務ト爲ス。周ニ居ルコト久ク之ス。周ノ衰フルヲ見テ、迺チ遂ニ去リテ關ニ至ル。關ノ令尹喜曰ハク、子將ニ隱レントス。彊ヒテ我ガ爲メニ書ヲ著ハセト。是ニ於テ迺チ書上下篇ヲ著ハシ、道德ノ意ヲ言フコト、五千餘言ニシテ去ル、其ノ終ハル所ヲ知ルモノ莫シといひ、次に、或曰ハク、老萊子モ亦楚人ナリ、書十五篇ヲ著ハシ、道家ノ用ヲ言フ、孔子ト時ヲ同ジクスト云フ。蓋シ老子百有六十餘歳、或ハ言フ二百餘歳ナリト、其ノ道ヲ修メテ而シテ壽ヲ養フヲ以テナリといひ、次に周の太史儋の事を掲げて、或曰ハク、儋ハ即チ老子ナリト、或ハ曰ハク、非ナリト、世其ノ然ルヤ否ヤヲ知ル莫シ、老子ハ隱君子ナリ(中略)世ノ老子ヲ學ブ者ハ、則チ儒學ヲ細ケ、儒學モ亦老子ヲ細ク、道不同、不相爲謀トハ豈是ヲ謂フカといひて、竟に其の孰れか是にして、孰れか非なるか

を断定せず。但末文に「李耳ハ無爲自化、清靜自正」の二句を以て結びたれば、遷の意は蓋シ李耳を以て老子と爲す者に似たり。老子は固より「自ラ隠レテ名ナキヲ以テ務ト爲ス」といひ、其ノ終ハル所ヲ知ル者ナシといへば、當時すでに其の人を詳に知ること能はず、況や數百年後に生れたる太史遷に於てをや。之を要するに其の人の事歴の詳かならざるは、乃ち隱君子の超然高舉以て其の眞を保全せし所以にして、寧ろ其の人品の最も貴ぶべき證と爲すべき也。若し夫れ史記に據りて孔子が禮を問ひしを事實とすれば、老子は孔子と時を同うして、其の先輩たるが如し。然れども此事たるも、老を尊び孔を抑ふる者の假託に係り、所謂孔子は吾が師の弟子といふに過ぎざるは、猶ほ浮屠氏の孔子を謂つて儒道菩薩と爲すが如く然り、固より信を取るに足らず。蓋し五千言の文を熟讀して夷考すれば、老子は春秋以前の人にあらずして、必ず孔子より後に出で、孟子よりも甚だ先ならざること、は先儒すでに之を辨ずること詳かなれば、今復贅せず。

當時周室極めて式微にして、諸侯僭肆、互に土地を争ひ、攻伐を事とし、君臣相戕^{さな}ひ、父子相虐し、舉世滔滔として、水火塗炭の中に陥れり。老子以爲へらく、今や天下の衰亂極まれり、愈治めんとすれば愈亂る、治むるなきの安きに若かず、區區たる仁賢の力、何ぞ能く狂瀾を既倒に廻すことを得ん、勞して功なきは之を措くに若かずと。故に清淨無爲を以て道と爲し、退虚守靜を以て教と爲し、以て太古の至治に復し、民と相休息せんことを欲して、此書を著はす、而して其の歸を要するに、大旨儒家の説と其の揆を一にす、其の言に曰はく、聖人處無爲之事、行不言之教と、又曰はく、富貴而驕、自遺其咎、功遂身退、天之道と、又曰はく、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸と、又曰はく、我有三寶、持而保之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢、爲天下先と、是れ皆修齊治平の良箴にして、醇乎たる君子の言といふべし。然れども其の措辭深遠玄妙にして、譬喩に託するもの多し。故に反復熟讀せざれば、容易に其の旨を

窺ひ識り難きものあり、且つ其の立言、矯世憤俗の餘に出づるを以て、崖異人を駭すの辭も亦少からず、これ孔聖の言と殊なる所なり。學者辭を以て其の義を害することなく、善く其の旨を神領意解し、以て之を用ふれば、亦以て修身治國の道に益するに足る、是を以て宓子賤は之を得、堂を下らずして、單父の民化し、汲黯は之を得、關を出でずして、東海の政成り、曹參は之を得、齊國以て安く、漢文は之を得、刑措くの治を致す。古今驗を此書に獲る者甚だ多し。若し夫れ善く其の意を領解すること能はざる者は、則ち或は邪徑に入るを免れず、乃ち莊列の如きは、其の虚無玄妙の説を學びて、放誕に流るる者なり、申韓の如きは、其の聖人不仁の語を用ひて、刑名に陥る者なり、河上淮南の如きは、其の長生久視の言を信じて、神仙に溺るる者なり、其の清靜寡欲を學ぶ者は、漢晉以後の道家となり、其の不言無爲に因る者は、六朝時代の清言家となり、或は以て兵家、縱横家の祖と爲し、或は以て周孔に附し、或は引きて、浮屠に託し、甚だしきに至りては、之を我が神道に傳會する者あるに至る。之を

要するに老子の言は猶ほ大海の浩蕩として涯涘なきが如く、恍惚として端倪すべからざる者あり、凡そ極大の物は、固より一端を以て概見するを得ざれば、古來の學者能く其の全眞を得る者幾んど希なるは、亦宜なり。清の順治十三年、世祖章皇帝の撰びし御註道德經二卷あり、前に御製の序あり、簡明日録に其の大意を摘みて曰はく、老子ハ虛無寂滅ノ道ニモアラズ、亦權謀術數ノ學ニモアラズ、故ニ註中ニ闡明スル所ノ者ハ、皆人事ノ常經ナリ、蓋シ睿鑒宏通ニシテ、萬有ヲ包涵セリ、在ルニ隨ツテ以テ理ヲ觀ルベク、即チ在ルニ隨ツテ以テ善ヲ擇ブベシ、淵懷ノ契スル所、固ヨリ文句ニ拘牽スル者ノ能ク窺フ所ニアラザル也」と。これ洵に持平の論にして、實に我が心を獲たるものなり。予の此講亦此意に本づき、必ずしも諸家の舊說を蹈襲せず、主として書中の類語竝に他の羣經諸子の說を參勘し、博引旁證以て老子の神髓を發揮せんことを期せり。

三

老子の書は初め上下二篇に分ちて章を分たず、漢の河上公は之に注して八十一章に分ち、章毎に名を命ぜり、成帝の時、嚴遵は七十二章に分ち、以て陰陽奇偶の數に象れり、南北朝以後、上篇の首章は道の字を以て起りたるを以て道經といひ、下篇の首章は徳の字を以て起りたるを以て徳經といひ、合せて道德經と稱す。

古來此書を注解するもの甚だ多く、列莊二子は多く其の語を引用して其の旨を演繹し、韓非は喻老、解老の二篇を著し、漢書藝文志には鄭・傅・徐・劉四家の說を録し、淮南子にも老子の衍義と見るべきもの少からず、降りて六朝に至りて此書盛んに世に行はれ、士大夫皆立理を放論して、之を清談と謂ひ、禮法を輕蔑し、縱酒昏酣之を放達と謂ひ、世務を勤むるを以て俗流と爲すに至れり。唐に至りて老子を追號して太上立元皇帝と爲し、此書を進めて上經と爲し、試科に列し、立宗親みづから此書に注し、天下に詔して家毎に之を藏せしむ。是れ蓋し唐の姓李なるを以て、老子に大聖祖の尊號を加へ、崇元館を置きて厚く

之を尊崇せしなり。宋に至りて道德經博士を置き、此書を講ずる者頗る多く、蘇轍・林希逸等之が注を作る。爾來金元明清を経て今日に至るまで、此書を研究する者益盛んにして、今や東洋哲學の大宗として學者必ず之を讀まざる者なきに至れり。

左に學者の參考に資すべき注解書を開列す。

- 老子注二卷 漢河上公撰
- 道德指歸論六卷 嚴遵撰
- 老子道德經注二卷 魏王弼注
- 老子道德經注二卷 宋蘇轍注
- 老子虞齋口義二卷 林希逸撰
- 道德真經注四卷 元吳澄撰
- 老子翼三卷考異一卷 明焦竑撰
- 老子通二卷 沈一貫撰

- 老子通義二卷 朱得之撰
- 老子集解二卷 薛惠撰
- 老子義解二卷 僧德清撰
- 老子章義二卷 清姚鼐撰
- 道德經攷異二卷 畢沅撰
- 老子說略二卷 張爾岐撰
- 道德經注二卷 徐大椿撰

- 老子特解二卷 太宰純撰
- 老子經國字解三卷 金蘭齋撰
- 老子國字解六卷 海保皋鶴撰
- 老子正訓問義二卷 戶崎明允撰
- 老子解二卷 重野葆光撰

老子輻注二卷	葛西質撰
老子古解一卷	大竹鸞撰
老子釋解二卷	皆川愿撰
老子摘解二卷	廣瀬建撰
老子全解五卷	太田敦撰

老子解義目次

上篇

道可道章第一	一
天地皆知章第二	八
不尚賢章第三	一九
道沖章第四	二七
天地不仁章第五	三二
谷神不死章第六	三七
天長地久章第七	四〇
上善若水章第八	四五
持而盈之章第九	五一
載營魄章第十	五七
三十輻章第十一	六六

五色章第十二	七
寵辱章第十三	七六
視之不見章第十四	八四
古之善為士章第十五	九〇
致虛極章第十六	九七
太上章第十七	一〇五
大道廢章第十八	一一一
絕聖棄智章第十九	一一六
絕學無憂章第二十	一二一
孔德之容章第二十一	一三二
曲則全章第二十二	一三七
希言自然章第二十三	一四四
跛者不立章第二十四	一四九
有物混成章第二十五	一五二
重為輕根章第二十六	一五八

善行無轍迹章第二十七	一六二
知其雄章第二十八	一七〇
將欲取天下章第二十九	一七七
以道佐人主章第三十	一八二
夫佳兵章第三十一	一八八
道常無名章第三十二	一九四
知人者智章第三十三	二〇〇
大道汎兮章第三十四	二〇五
執大象章第三十五	二〇九
將欲歛之章第三十六	二一二
道常無為章第三十七	二一七
下 篇	
上德不德章第三十八	二二一
昔之得一章第三十九	二三一

反者道之動章第四十 二四〇

上士聞道章第四十一 二四四

✓道生一章第四十二 二五三

天下之至柔章第四十三 二五九

名與身章第四十四 二六四

大成若缺章第四十五 二六九

✓天下有道章第四十六 二七四

不出戶章第四十七 二七八

為學日益章第四十八 二八一

聖人無常心章第四十九 二八五

出生入死章第五十 二九〇

✓道生之章第五十一 二九七

✓天下有始章第五十二 三〇二

使我介然章第五十三 三〇九

善建者不拔章第五十四 三一三

含德之厚章第五十五 三二〇

知者不言章第五十六 三二七

以正治國章第五十七 三三一

其政悶悶章第五十八 三三八

治人事天章第五十九 三四五

治大國章第六十 三五二

大國者下流章第六十一 三五六

✓道者萬物之奧章第六十二 三六一

為無為章第六十三 三六七

其安易持章第六十四 三七三

古之善為道章第六十五 三八一

江海為百谷王章第六十六 三八五

天下皆謂章第六十七 三八九

善為士者章第六十八 三九八

用兵有言章第六十九 四〇一

吾言甚易知章第七十……………四〇六

知不知章第七十一……………四〇九

民不畏威章第七十二……………四一二

勇於敢章第七十三……………四一六

民不畏死章第七十四……………四二一

民之飢章第七十五……………四二六

人之生章第七十六……………四三〇

天之道章第七十七……………四三三

天下柔弱章第七十八……………四三七

和大怨章第七十九……………四四一

小國寡民章第八十……………四四四

信言不美章第八十一……………四四八

目次終

老子解義 上篇

虛舟簡野道明著

道可道章第一 五十九言

【章旨】此章、道の本原を説破して全篇八十一章の綱領と爲す。

道可道、非常道、名可名、非常名。

【譯讀】道とすべきは常の道にあらず。名とすべきは常の名にあらず。

【字義】常 恆久にして易らざる義。

【直解】第一節は老子己の説を立てんが爲めに、先づ儒家の説を破したる也。さて儒家にて道のこれぞ道なりとして擧げ示し、天下衆人の共に由り従ふべき者とするは、恆久にして易ることなき眞の常道にはあらず。

○史記「老子傳」曰、老子修道德、其學以自隱無名、無務、著書上、下篇、言道德意、五千餘言、爲《道》、《德》、《經》、《義》、《論》、《自然》、《天》、《地》、《道》、《可》、《道》、《非》、《常》、《道》、《名》、《可》、《名》、《非》、《常》、《名》。



【直解】すでに第一節に於て述べたるが如く、老子の所謂道とは假の名にて、實は何とも名のつけやうのなき者なり、即ち無名の者なり。この無名の者が冥漠の間の主宰者として自然に存在し、古今に互りて變ることなき眞の常道たる也。抑も天地の未だ開闢せざる以前にあたりて、輕くして清き者は升りて天(陽)となり、濁りて重き者は降りて地(陰)となる。即ち天地もこの道よりして出來たる也。故に無名、天地之始といふ、天地の由りて始まる所といふの謂なり。第六章に玄牝之門、是謂天地根とあると同意なり。すでに天地を生じて天地の名あり、即ち有名は天地なり、天地あれば、森羅萬象其の間に生生化化して息まず、故に有名、萬物之母といふ、母とは生み育つるの謂にて、本といふに同じ。書經(泰)に惟天地萬物之母とあるは、以て相證すべき也。

故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其微。

【譯讀】故に常無以て其の妙を觀んと欲し、常有以て其の微を觀んと欲す。
 【字義】○常無 道をいふ。○觀 心の中によく觀念する義。○妙 も

○第五十二章、
天下有始、以爲
天下母。

○古無妙字、易
妙萬慮而爲言、
王肅本作妙、可
從。
○李約本、微作
微非。

と妙に作る、深くかすかにして測り知られざる義、佛經に不可思議といふが如し。○常有 天地を謂ふ。○微 邊微の微に同じく事物の界目の分るる所を指していふ。

【直解】この二句は學者の工夫を説きたる也。さて前述の如くなるが故に、常無即ち道はもと形體の摸捉すべきもの無けれども、萬古に互りて生じて已むことなき妙理の存することをあるを觀るべく、又常有即ち天地は、もとこの虛無の道に由りて生じたる者にて、以て其の無形が有形となり、有が無より生じて、天地萬物となれば、一一其の界目の分るる所あるを觀るべしと也。第三十八章に天下物生於有、有生於無とあるも、萬物は天地より生じ、天地は虛無の道より生じたるを謂ふ、此二句の意と互に相發明するに足る。

此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門。

【譯讀】此兩つの者同じく出でて而して名を異にす、同じく之を玄と謂ふ。玄之又玄、衆妙の門。

○第十五章、微
妙玄通、深不可
議。

○妙、亦應作眇。
○第六十五章、
玄德深矣、遠矣。

【字義】○玄 幽遠にして測られざる稱。老子の一書、理の極めて妙なる處は、皆玄を以て稱す。玄牝、玄覽、玄通、玄同、玄徳、皆是なり。○門 物の由りて出づる所に喩ふ。第六章の玄牝之門の門も同じ。

【直解】此兩者とは道(無)と天地(有)とを指す。すでに上に述べたるが如く、天地は道より生ずれば、其の本は一體同出なり。ただ無が分れて有となれば、有と無との名を異にするのみ。故に同出而異名といふ。さて其の道より天地の生ずる所以の理は、實に深遠にして思議すべからず。故に同謂之玄なり。玄とは天の色の黒く奥深くして測り知られざるをいふ。玄之又玄とは、其の幽玄の趣の絶對無限なるを賛歎する辭なり。さて其の絶對無限の奥深き所よりして自然に萬物が發生して萬古に互りて息むことなし。即ち日月星辰風雷雲霧山川の大より、以て草木鱗介蟲魚の微に至るまで、各其の形象を賦し、生生化化して變化窮りなき造化の大作用たる。一一玄妙ならざるはなし。故に衆妙之門といふ。門とは衆妙即ち萬物の由りて出づる所に喩へていふ。

【辨正】常無常有の二句は道の本原を總説す。而るに先儒多くは下の欲字

と連ねて常無欲常有欲と讀みて頗る解説を費せり。然れども此一章は道原を説破するを主とし、未だ性情に及ばず。故に従はず。又第三十四章に常無欲可名於小といふ句あれば、こゝも常無欲と連讀すべしとの説もあれども、彼の章の常無欲の三字は衍文(餘れる無用の文字)なれば證とするに足らざる也。

常無欲可有欲と讀みて頗る解説を費せり。然れども此一章は道原を説破するを主とし、未だ性情に及ばず。故に従はず。又第三十四章に常無欲可名於小といふ句あれば、こゝも常無欲と連讀すべしとの説もあれども、彼の章の常無欲の三字は衍文(餘れる無用の文字)なれば證とするに足らざる也。

常無欲可有欲と讀みて頗る解説を費せり。然れども此一章は道原を説破するを主とし、未だ性情に及ばず。故に従はず。又第三十四章に常無欲可名於小といふ句あれば、こゝも常無欲と連讀すべしとの説もあれども、彼の章の常無欲の三字は衍文(餘れる無用の文字)なれば證とするに足らざる也。

○河上公、以此爲養身章。
○沈一貫曰、第二章、發揮有無相生之義。

○劉瓛本、皆知善之爲善上、亦有天下二字。

天地皆知章第一 八十八言

【章旨】此章前章に道の本原は虚無にして自然なることを明かにせしを承けて、聖人は無爲自然の道に法りて民を治むることを説く。

天下皆知美之爲美、斯惡已。皆知善之爲善、斯不善已。

【譯讀】天下皆美の美たることを知らば、斯れ惡のみ、皆善の善たることを知らば、斯れ不善のみ。

【字義】○惡 醜きなり。

【直解】天下の人が皆美しくしき物を見て、美しくしと爲すやうになりては、後にはそれが惡き物となるのみ。又善き事も善と見ゆるやうになりては、後には疵が出で來て不善となるのみ。例へば仁義の如きも、古の聖人が之を用ひて善く天下を治めたれば、こを善なり美なりと思ふべけれども、漢の王莽は之を假りて己の詐謀を濟し、天下を奪はんとせり。又茲に貴重すべき書畫古玩あれば、やがて其の賈物を鬻ぎて衆人を欺く者の

出づるは、必至の勢なり。されば衆人の見て美とし善とする所の事物は、場合によりては忽ちに、醜惡不善となること此の如し。之を要するに天下の人皆其の美たるを知れば、則ち爭奪の風起り、天下の人皆其の善たるを知れば、則ち倣倣して技巧を事とし、淳樸の風日に散す。若し夫れ絶對の眞美眞善に至りては、人に知られざるこそ貴けれ。

さて儒家にては美・惡・善・不善などの觀念を判然と區別して教ふれども、老子は一段大處高處より達觀して、すべて之を混同す。夫れ事物の美・惡・善・不善は相對より觀るときは、互に相異れりと雖も、絶對より觀れば、かかる區別あるものに非ず。唯衆人は己の情に適する者を以て美と爲し善と爲し、情に逆ふ者を以て醜惡となし、不善と爲すのみ。故に人の情相異るときは、隨つて其の美・惡・善・不善の觀念も相異なるに至る。例へば胡臭は衆人の忌み嫌ふ病なれども、北狄は却りて美人の一資格として之を愛好する者ありといふ。又莊子論齊物に毛嬙麗姫、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛云云とあり。毛嬙麗姫は天下の人人之を見れば、皆驚く程の美人なりとして愛好すれども、魚鳥は却りて之を恐怖し、魚は之を見て

深く淵の底に逃げ潜み、鳥は之を見て高く大空に飛び去るとなりされば前にも述べたるが如く物の美・悪・善・不善は各其の觀る所によりて異なる者なれば、決して一定不變の者にあらず、されば道の本體より觀るときは、混同して美・悪の區別あらざるなり。然るに衆人は皆美の美たるを知りて、美の眞の美にあらざるを知らず、善の善たるを知りて、善の眞の善にあらざるを知らざるは、愚なりと謂ふべき也。之を要するに美・悪・善・不善は相對なり、至美至善は絶對なり、絶對は即ち老子の所謂虚無自然の常道なり、相對は常道にあらざる也。按ずるに王陽明が善なく惡なきを以て至善と爲し、憂なく樂なきを以て至樂と爲すの説は、蓋し此理に本づくならんか。

故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨。

【譯讀】故に有無相生じ、難易相成り、長短相形はれ、高下相傾け、音聲相和し、前後相隨ふ。

○顯歎無故字、
○傳奕本無下、
易下短下、下下、
聲下後下、並有、
之字、非、
○形、王弼本作、
較、非、古、無、較、字、
本文以形與傾、
爲韻、不應、用、較、
又明矣。

【直解】此六句は喩を引きて前の二句の意を明かにする也。すでに上に述べたるが如く、美・悪・善・不善は、相對によりて名づけたるものなれば、一定不變の稱にはあらず、獨り之のみにあらず、萬事萬物皆然らざるはなし。例へば人が金錢を蓄へたるは有なり、之を費せば無となる、これ有より無を生ずるなり。一錢の蓄なきは無なり、働きて金錢を得たるは有なり、これ無より有を生ずるなり。又草木の葉が秋に至りて黃落するは無なり、春に及びて再び萌芽の發生するは有なり、これを有無相生といふ。難は六ヶ敷事、易はたやすき事をいふ、難しといひ、易しといふも亦比較上の名にて一定不變の者にあらず、誰も山に登ることは難く、山を下るとは易しといふと雖も、山にも色色あり、富士山に登るの難きに比ぶれば、筑波山に登るは易しといふべし、すべて如何なる難き事も、勉めて怠らざれば、遂には易となり、易き事も、輕んじて怠るときは、忽ちに難となる、これを難易相成といふ。鶴の脛の長きによりて、鳧の脛の短きが見え、鳧の脛の短きによりて、鶴の脛の長きが見ゆるが如き、これを長短相形といふ。高き岸の土石が地震などの爲めに、川の中へ崩れ込むは、これ下

78 10 9.20
33 20
6.60
33 30
9.90

きより高きを傾くる也、其の崩れ込みたる土石を浚へて再びもとの岸に積み上げるは、これ高きより下きを傾くる也、傾とは向ふに在る物を此方へ移し取る義なり、金石・絲竹・匏土・草木の八音、宮商角徵羽の五聲には、夫夫其の調子に大小清濁高低などの區別あり、それを善き加減に調和するを音聲相和といふ、又前に立ちて行く人あるによりて、後に附いて行く人もある也、進む時に前に在りし者は、退く時には必ず後に居る、これを前後相隨といふ、此の如くすでに形にあらはれたる事物には、美惡・善不善・長短・難易などの別は絶えず相因り相對して生ずるものにて、美といひ善といふ相手には、必ず惡醜不善のあることは、到底免るべからざる自然の理なり、然るに衆人は此理を悟らず、我が善とする所は、どこまでも善なりと思ひ、我が惡とする所は、どこまでも惡なりと思ひ、善惡是非の我見に執著して相下らず、紛紛として爭亂の息むことなきは、誠に歎すべき事ならずや。

是以聖人處無爲之事、行不言之教。

○順歎、聖人下、有治字。

【譯讀】是を以て聖人は無爲の事に處り、不言の教を行ふ。

【字義】○聖人 智慧深く、虛無自然の大道に通じて之を身に行ふ人をいふ。○無爲 木偶の如く手を束ねて何事をも爲さざるには非ず、又人が思ひ立てば、何時にても同意するにも非ず、凡そ事は始むべき時節あり、其の時に我より始めざれば、必ず人が始むる也、人の始めたる上に之に従ふ、是れを無爲といふ。

【直解】さて聖人は、智慧明かにして、能く道の本體たる、虛無自然の理に通ずるが故に、衆人の如く善惡是非の見に執著して、此事は必ず此の如くせざるべからずといふが如き干渉がましき事を爲さず、一切自然の趨勢に任せて政を爲す也。これを處無爲之事といふ、無爲とは爲すことなしといふ場合に居て事を爲すをいふ、木偶の如く手を束ねて何事をも爲すことなしといふ義にはあらず、政を爲すに、すべて天理に従ひ、無我無心にして自己流を出さざるをいふ、論語公衛靈に無爲而治者、其舜與とあるも、其の意は稍異なれども、歸するところは同一なり、又口にて此事は必ず此の如くすべし、此事は必ず此の如く爲すべからずと、一一やか

○第三章、爲無爲則無不治。○第四十三章、不言之教、無爲之益、天下希及之。

ましく言ひ聞かせても、民は無智なる者なるが故に、却りて之を喜ばざる者なり、それよりは自然の理勢に任せて、無爲の事を行ひ、自ら身を以て模範と爲して民を率ゐる時は、民は各其の業に安んじ樂み、世は太平に治まるを得る也。これを行、不言之教、といふ之を要するに玄妙の理の極致は、絶對無言に在り、到底言語の説き盡す所にあらず、すでに言語に發すれば第二義に墮す、されば論語貨にも孔子が予欲無言とのたまひし時、子貢は夫子若し言ひたまふところなければ小子どもは何を據とし、て夫子の道を述べ修めんといひたるに對して、孔子が天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉とのたまひ、釋迦が吾四十九年住世、未曾說一字と申されしも、亦此意に外ならず、更に近き例を擧ぐれば、今日學校の先生が講壇に立ちて、辯論流るるが如く、喋喋として古今東西の倫理説を講じ、千言萬語を費すとも、自ら躬行實踐するところなくんば、生徒は其の教に従はざるのみか、却りて之を輕蔑するに至る、之に反して昔の寺小屋の如き、不完全なる學舎にても、其の師たる人の人格が高ければ、たとひ其の辯舌は訥澁なりとも、生徒は自然に其の徳に感化せられて身を

修め家を齊へ、立派なる人物となることを得る也、亦以て不言之教の妙を知るべき也。

萬物作焉而不辭、生而不有、爲而不恃、功成而不居、夫唯不居、是以不去。

○萬物作焉而不辭、傳奕本作萬物作而不爲、始古始辭聲同、以此致異、今姑從王弼本、陸希聲及太平御覽引皆無焉字、○兩不居、傳奕本作不處、河上公本不作弗、非。

【譯讀】萬物作りて而して辭せず、生じて而して有せず、爲して而して恃まず、功成りて而して居らず、夫れ唯居らず、是を以て去らず。

【字義】○作 動きて生せんと欲するなり、第十六章の萬物竝作、吾以觀其復の作に同じ。○生 形の漸く著るる義。○不有 己の有と爲さざる義。

【直解】以下造化即ち主宰者が無爲自然の道を述べ、聖人は之に則りて前に述べたる無爲の事に處り、不言之教を行ふ所以を明かにす、さて天地間の萬物が、將に生動せんとするや、主宰者は一一之に形を賦し、日月星辰の天に羅列し、山岳河海の地に流峙するより、柳は綠に、花は紅に、魚は躍り、鳶は飛ぶに至るまで、森羅萬象雜然として生生化化するを見れば、

誠に其の煩に堪へざるもの如くなれども、主宰者は少しも之を厭ひて辭退することなく、萬物の自然に發生するに任せ置きて、故らに自ら手を出して助長することを爲さず、かくて萬物が發生したる上は、これを己の所有とすることもなく、空氣・日光・雨露などの惠を施して之を長養したるなれども、其の功を恃みて高ぶることもなく、愈其の發育の功を成就しても、之を己が功として其の位に居ることを爲さず、故に何時までも主宰者として仰ぎ尊ばるる也、主宰者の萬物を生生化、化化する所以の道、斯の如し、故に聖人は之に則りて無爲の事に處り、不言の教を行ひたまふ、されば天下の萬民が並び起りて事を思ひ作つに當り、萬民より推し戴きて依頼せらるれば、據なく辭退せずして政を爲せども、何事も自然の理勢に従ひて之を治め、敢て之を勸めもせざれば、又止めもせず、一切干涉することなく、萬民の爲すが儘に任せ置き、やがて其の事が出來あがりても、それを我が物とすることなく、己が才徳のすぐれたるを誇りて恃むことを爲さず、愈其の功が全く成就しても、少しも其の功の上に居らず、これ全く萬民の功なりとして、己は始より與り知らざる

者の如くす、此の如く無爲の政を行ひて、天下の太平を致しても、一向己の功に誇らず、自ら謙讓して退くが故に、却りて令聞令望が一身に集りて去ることなく、永く萬民の仰ぎ慕ふ所となる也、論語伯泰に巍巍乎舜禹之有天下也、而不與焉とあるも、其の意は稍異なれども、其の歸するところは同一なり、末の夫唯不居、是以不去の二句は此章の要旨たる無爲の徳の機能を述べたる也、功を人に讓るは一寸損のやうなれども、實は然らず、すでに前にも述べたるが如く、世間の事物は相對によりて生じ、偏なる事なければ、成功あれば必ず失敗あり、前に譽あれば後に必ず毀あり、故に功を我が物にして傲慢の鼻を高くすれば、動もすれば世人の反感を招き、後難の出で來りて、其の位を保つこと能はざるに至る。然るに功成り名遂げて早く其の場を立ち退く時は、後難の出で來る心配もなく、其の身も全く名譽も後世にまで残る也、畢竟聖人は功を人に歸して自ら其の功に居らざるが故に、其の功が何時までも身を去らざる理なり、是れ即ち眞美・眞善にして老子教の最も貴ぶところ也、されば第二十四章に自伐者無功、自伐者不長とあるも、亦これを謂ひたる也、昔漢の高

祖が天下を平定して洛陽の南宮に置酒せし時、吾が天下を得たる所以、項羽の天下を失ひし所以を説きて、籌策ゴトカリを帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾張子房に如かず、國家を鎮め百姓を撫で、餽餉ヲカを給し、糧道を絶たざるは、吾蕭何に如かず、百萬の衆を連れて戦へば、必ず勝ち、攻むれば必ず取るは、吾韓信に如かず、此三人の者は皆人傑なり、吾能く之を用ふ、これ吾天下を取りし所以なり、項羽は一の范增あるも、而も用ふること能はず、これ其の天下を失ひし所以なりと、曰ひたれば、羣臣之を聞きて皆心から悦服したりき、かくして天下は三人の天下とならずして、長へに高祖の天下となれり、高祖の如きは能く夫唯不居、是以不去の旨を實踐せし者といふべき也。

○河上公、以此爲安民章。
○沈一貫曰、論治貴無爲。

○使民心不亂、河上公、王弼並無民字、今從傳奕本。

不尙賢章第三 六十七言

【章旨】 此章前章の旨を承けて、聖人無爲の治を施し、民をして無知無欲ならしむれば、天下は善く治まるに至る所以を説く。

不尙賢、使民不爭、不貴難得之貨、使民不爲盜、不見可欲、使民心不亂。

【譯讀】 賢を尙ばざれば、民をして争はざらしむ、得難きの貨を貴ばざれば、民をして盜を爲さざらしむ、欲すべきを見さざれば、民の心をして亂れざらしむ。

【字義】 ○尙 上に通ず、上として之を尊ぶなり、尙賢は尊賢の義なり。 ○不貴難得之貨 中庸の賤貨に同じ、難得之貨とは容易に得難き金銀珠玉の類なり。

【直解】 賢とはもと徳のすぐれたる人をいふ、されば易上に履信思乎順、又以尙賢也、是以自天祐之、吉无不利也とあり、荀子制王にも君人者欲立功

名、則莫若尙賢使能矣とあり、賢を尙ぶことは儒家の最も重んずるところなるに、老子は不尙賢使民不爭といふ、其の説くところ全く相背馳するが如くなるも、其の實は然らず、老子の所謂賢とは當時俗間にて稱して賢とするところの人を斥す、即ち慧黠にして巧に世間を詐きて立身出世を計る徒をいふ、儒家にていふ眞の賢者とは、名は同じきも其の實質は甚だ異りぞ知るべし、第十九章に絶聖棄智、民利百倍とある聖も、堯舜周孔などの眞の聖人とは異り、さて今日謂ふところの賢者は皆慧黠姦偽の人なり、上に在る者若し此等の人を尊び用ひて政を爲す時は、下民は皆之を見習ひて、機智日に開け、風俗日に漓く、姦詐の心漸く萌して、争奪の禍漸く生じ、訟獄益繁くなりて紛亂已む時なからんとす、老子深く之を憂ふ、故に曰はく、不尙賢使民不爭と、禍亂を未だ萌さざるに防ぐの意、最も親切なりといふべし、莊子地天に至徳之世、不尙賢不使能とあるも、亦此意に本づきたる也、又上たる者、容易に得難き金銀珠玉の類を貴重する時は、孟子滕文公が上ノ好ム所ハ下必ズ焉ヨリ甚ダシといひしが如く、下民も亦競うて之を得たしと羨み思ふ心の切なるによりて、無理

なる借金をしても之を購ふに至り、借金は益多くなり、窮すれば濫するで、遂には盜を爲すに至る、誠に懼るべき事ならずや、されば第十二章に難得之貨、令人行妨、また第六十四章に不貴難得之貨とあるも、皆此意を反復して戒めたる也、それ故に不貴難得之貨、使民不爲盜といへる也、莊子地天に藏金於山、藏珠於淵とあるも、蓋し老子の此言を祖述せし也、又物の欲すべき者は極めて多し、金碧の樓閣、錦繡の衣裳、山海の珍味、輕車肥馬より金剛石の指環、白金の時計に至るまで、虚榮に憧憬るる淺丈夫、若くは妾婦の徒の欲望する者は、數限りもなし、人の上たる者、豪奢飽くことを知らず、此種の贅澤物を欲望するの意を表示すれば、下民は皆それを見習ひ、何とかして己も之を得んと欲し、百方工夫をめぐらし、其の心を亂し煩すに至る、實に上たる者は、下民の標準なり、統計表によるに近時、萬引、拘摸の年年に増加し、特に妙齡の婦女が恐ろしき萬引の罪を犯すは、多くは皆己が虚榮心を満足せしめんが爲めなりと聞く、其の然る所以の主たる原因は、無識なる在上者が、或は數百萬金を投じて壯麗なる邸宅を構へたり、或は一夕の宴會に數千圓を浪費するなど、盛んに奢

侈の弊風を増長せしめ、揚揚として、其の欲すべきものを下民に見せびらかすに由る也。さればかの勤儉質素の美風を獎勵したまふ。戊申詔書の御趣旨の十分に民間に徹底すること能はざる所以も決して偶然にあらず。故に聖人の政を爲すや、務めて奢侈を去りて質朴に就かしめ、下民に欲すべきものを見せびらかさざるやうにすれば、下民も亦無知無欲となりて、自然に歆羨の念も起らず、民の心をして亂れざらしむるを得る也。論語顔に季康子が盗を患へて孔子に問ひたるに、孔子對へて苟子、不欲、雖賞之不竊とのたまひしも、亦此意に外ならず、之を要するに民の争はざるは、之を禁ずるにあらざる也。我の似て非なる所の賢人を尙ばざるに由る也。民の盗を爲さざるは、之を威すにあらざる也。我の異物即ち難得之貨を貴ばざるに由る也。書經旅に不作無益、害有益、功乃成、不貴異物、賤用物、民乃足とあるも、亦此義をいふ。嗚呼、これ實に千古爲政者の箴訓なり、豈猛省せざるべけんや。

是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨。

○傳奕本、治下有也字、李道純

無之治二字、
○強、傳奕本作、
○強、古相通、
○第六十五章、
古之善爲道者、
非以明民將以、
愚之、民之難治、
以其智多。

【譯讀】是を以て聖人の治は、其の心を虚にして其の腹を實にし其の志を弱くして其の骨を強くす。

【字義】○其 四つの其の字は民を指す。○虚其心 民をして無欲ならしむるをいふ。○弱其志 民をして無知ならしむるをいふ。

【直解】前節に述べたるが如く民を治むる法は、士農工商各其の職分に安んじて種種の欲望を起さしめざるやうにするを善とす。この故に聖人の國家を治めたまふや、天下の萬民をして其の心を虚くして少しも欲望を起さしむることなく、即ち無念無想にして私欲の爲めに心を勞せしめず、かくて下腹には純一の元氣を充實せしめ、又其の志はつとめて柔弱にして人と競ひ争ふことなく、己が虚榮心を満足せしめんが爲めに、私知を弄びて、種種の事を企て興すなどの考もなく、かくて筋骨は飽くまでも強壯ならしめ、男は耕し女は織りて、一筋に己が生業を勉めて、聊の餘念もなからしむるやうにする也。これぞ上古無爲の治にして、太平の極致なる。然るに後世は之に反して民各心あり、己が私欲を逞うせんとして、無理なる才覺を運らし、年中朝から晩まで營營として心を勞

するが爲めに、下腹はへこみて力なく、元氣も漸くに沮喪して短命多く、又其の志はごこまでも強く、己が私知を弄びて、多くの金銭財寶を得んとするが爲めには、己の現在の職業に安んずること能はず、種種の事業に手を出す者、鶻の眞似をする鳥の譬の如く、なれぬ仕事は失敗を招き易く、事は志と違ひて多くは意の如くならず、果は己が財産を蕩盡するのみならず、親戚朋友にまでも迷惑を掛け、遂に煩悶の結果は、神経質となりて、夜も安眠すること能はず、筋骨も次第に瘦せ衰へて窮途に哭するに至る者の世間に少からざるは、誠に憐むべき至ならずや。

常使民無知無欲使夫知者不敢爲也爲無爲則無不

○順歎、民作心、
○傳奕本、不敢
爲下、無也字、
○無不治、傳奕
本、作無不爲矣。

【譯讀】常に民をして無知無欲ならしめ、夫の知者をして敢て爲さざらしむるなり。無爲を爲せば、則ち治まらざるなし。

【字義】●無知無欲 人身は生物なれば、全然知と欲とを無くすること能はず、只自然にして知り、自然にして欲し、私知私欲を用ひざらしむる義

○知者 世の所謂知者を斥す、前の尙賢の賢に同じ。

【直解】前述の如く常に天下の萬民をして質朴剛健にして、各其の職業に安んじ、絶えて私知私欲を用ふることなからしめば、天下は至極無事太平となるべし。されば假令其の間に姦偽を事とする小知者ありて、機智小巧を弄び、民を誘ひて種種の企を爲さんとするも、誰も相手にせざれば、遂に其の小知者をして敢て手を下して作爲すること能はざらしむ。之を要するに人主垂拱して無爲の治を爲し、彼の慧黠姦偽の似非賢者を尊ばず、得難きの貨を貴ばず、欲すべき贅澤物を見せびらかさず、つとめて民をして無知無欲ならしめば、民も亦自然にそれに感化せられて、天下は必ず治まらずといふことなき也。第五十七章に我無爲而民自化（中略）我無欲而民自樸とあるも亦此意をいふ也。

【辨正】先儒此章を解きて、老子の養生説と爲す者あり、勿論老子の所謂眞の大道は、何事の上にも離るべからざる者なれば、固より養生説と爲して觀るも、通せざるにあらずと雖も、すでに章旨にて述べたるが如く、老子の理想的政治觀と爲して觀るを穩當とす。蓋し老子、時勢民俗の日に

非なるを憤り、天下の民を躋せて太古無爲の至治に復歸せしめんと欲せし也。

○河上公、以此爲無原章。

○說文解字、皿部、虛、器虛也、引本書、作虛、虛訓、虛、與盈、正相對、諸本作沖者、假字也。
○或不盈、傳奕本、作又不滿、非淮南子引作又不盈也。

道沖章第四 四十二言

【章旨】 此章、道の本體の微妙にして測られざるを述ぶ。

道沖而用之、或不盈、淵乎似萬物之宗。

【譯讀】 道は沖にして而して之を用ふ、或は盈たず、淵乎として萬物の宗に似たり。

【字義】 ●沖 沖に作るも同じ、虚シムナなり、もと虚に作る、皿の中の虚なる會意文字。 ○用之 無の道を用ふる也。 ○淵乎 深き貌、所謂玄之又玄なり、王弼本、乎を兮に作る。 ○似 確カリツと斷言せざる也、道は聲もなく形もなく虚無玄妙にして測るべからざるものを強ひて説明するが故なり、上の句の或の字、下の似或存の似、或も象帝之先の象も皆同也、老子の一書、好みて此種の疑辭を用ふるは是が爲め也。 ●宗 宗主として尊ぶ也、宗家は多くの分家が總本家として尊び集るによりて、萬物の本元オホの義とす、莊子の所謂大宗師なり。

【直解】此一節は道の本體を説く。さて道の本體は形もなく、聲もなく、全く虚無なるもの也。然れどもこれを萬物に施し用ふる時は、古今に互りて窮ることなく、盡ることなく、天地の間に遍く行き渡らざるなし。即ち日月の運行する所以、四時の循環する所以、山岳の峙ち、河海の流るる、動植の生育繁茂する、皆此道に資らざるはなし。但其の形象なく、虚無なるが故に、或は十分に天地間に盈ちて居るとは思はれざるが如くなれども、萬物すべて此道より出づること此の如し。實に道の本體の幽深にして測られざるは、萬事萬物の總本家即ち根本たるに似たりと。第四十五章の大盈若冲、其用不窮と并せ考ふべき也。

挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、湛乎似若存。

○紛、願、敬、作、忿、龍、興、碑、本、亦、作、忿。
○湛乎、傳、奕、本、乎、作、分、王、弼、本、亦、作、分。
○似若存、傳、奕、本、作、似、或、存。

【譯讀】其の銳を挫き、其の紛を解き、其の光を和げ、其の塵に同うし、湛乎として存するが若くなるに似たり。

【字義】○其 其銳其紛其光の三の其の字は己を斥し其塵の其は人を斥す。翼註に邵弁註の上ノ二ノ其字ハ己ヲ以テ言ヒ、下ノ二ノ其字ハ人ヲ

孫

以テ言フとあるを引用せしは非なり。挫其銳とは果銳勇決の念を挫きて之を去りて圭角なき義、解其紛とは絲の紊れたるが如き紛紜とまつはる思慮を解きて之を棄てて繫累なき義、紛は史記孫臏傳の解、雜亂紛糾の紛に同じ、和其光とは聰明の光を混和韜藏カクスマして之をきらめかさざる義、莊子物齊の葆光カクスマに同じ、同其塵は世俗の塵埃に混同して居る義、塵とは佛經に五濁惡世とあるが如く、世俗の汚濁醜陋の事の多きに喩ふ。○湛乎 深く静かなる貌、前節の淵乎に同じ。

【直解】第二節は道の妙用を説く。さて前節に述べたるが如く、虚無自然の大道をわが身に體して之を行ふに當りては、先づ己の心の鋭く氣強きを挫きて之を去るやうにする、すべて鋒刃の類の餘りに銳きは、兎角折れ易きが如く、人も勇往果敢の氣の鋭くして利を見て妄進し止ること知らざる者は、動もすれば挫け敗るるの患あり。故に自ら其の銳氣を挫き折りて、圭角の露ヲはれざるやうにする也。第八章に揣而銳之不可長保とあると并せ考ふべき也。又衆人は私欲多く利害得失を計較するの念が心に縈ハツリ起ること、宛も絲の紊れもつるが如くなるを常

とすれども、此道を心に得たる人は、かかる心に縈る煩悶を解きて棄つるが故に、心は常に淨玻璃の如く一點の曇もなく、極めて清淨無垢となる也。又心に道德があれば、自然に其の徳の光が外にあらはるるものなれども、餘りに其の光をきらめかす時は、或は衆人に目ざされて、重役などに任用せられて、生涯己の身を束縛することとなり、或は衆人に妬まれて危害を加へらるることもあり、身を全うする所以にあらす、さればつとめて徳の光をやはらげ、深く韜ツミ藏カして外にかがやかし顯はさざるやうにすべしとなり。第五十八章にも、光而不耀とあり、己の才徳の光をきらめかし示すことは、老子の最も忌み嫌ふ所なりとす。又世の中は塵世俗塵などといふ熟語のあるが如く、甚だ汚濁にして醜きものなり。されども道を得たる人は、己のみ獨り潔白なりとして、之を厭ひて見棄てることなく、平氣にして己も其の仲間なかまに混同して、少しも目立たぬやうに爲して居るなり。佛經に所謂不垢不淨なり、世の俗塵と混同して居るとは、諺に朱に交れば赤くなるといふが如く、全くそれと同化して一つになるの謂にはあらず、世俗の間に在りても、己獨りは立派に其

の道を持守して寸時も失ふことなきは、誠に深く靜かにして、長ながへに道のそこに存在するが如くに見ゆる也。

吾不知誰之子、象帝之先。

○誰之子、陳碧虛、司馬本、無之字。

【譯讀】吾誰の子たるを知らず、帝の先に象たり。

【字義】○象 似なり。○帝 天即ち主宰者をいふ。

【直解】さて道の體用の廣大にして窮りなく、玄妙不可思議なること前述の如し、抑も此道たる誰が子たるかを知らず、即ち何に由りて生じたるかを測り知ること能はず、其の幽深玄遠なることは、帝即ち主宰者よりも最も先に存在せる者に似たりと也。元來道と帝とは同一體の者なるに帝以前に道が存在せるが如く聞えて、稍語病あるが如くなれども、道は何等の物よりも生せられず、絶對に天地萬物の本原たることを言はんとしてかくは、甚言せし也。莊子大宗師に、夫道自本自根、未有天地、自古以固存、神鬼神帝、生天生地、在太極之先、而不爲高、在六極之下、而不爲深、云云とあるは、亦此旨を敷衍せし也。

ワタケル

○河上公以此爲虛用章。
○沈曰此章論虛亦上章之義。

天地不仁章第五 四十五言

【章旨】 此章聖人無心にして能く虚無自然の道を體して民を化すること
を説く。

天地不仁以萬物爲芻狗。聖人不仁以百姓爲芻狗。

【譯讀】 天地仁とせず萬物を以て芻狗と爲す。聖人仁とせず百姓を以て芻狗と爲す。

【字義】 ○天地 天地の形を以て言はず、天地の天地たる本體即ち理を斥していふ。 ○仁 意識的に仁愛を行ふをいふ。不仁とは仁あれども己の有とせず、忘れて棄つる如くする義。 ○芻狗 藁にて作りし狗にて祭祀に陳設する具、祭祀了ればもはや用なくして棄つる也。莊子運天に夫芻狗之未陳也、盛以篋衍、巾以文繡、尸祝齋戒以將之、及其已陳也、行者踐其首脊、蘇者取而爨之而已とあるは是れなり、ここは棄てて己の有とせざるに喩ふ。王注に草と狗との二物とするは非なり。

○第三十八章、上徳不徳。

蘇轍曰、天地無私而聽萬物之自然、故萬物自生自死、死非吾虐之、生非吾仁之也、譬如結芻以爲狗、設之于祭祀、盡飾以奉之、夫豈愛之時適然也、既事而棄之、行者踐之、夫豈惡之亦適然也、聖人之于民、亦然、特無以害之、則民全其性、死生得喪、吾無與焉、雖未嘗仁之、而仁亦大矣。

【直解】 萬物は皆天地生育の恩恵に頼りて生命を保つものなれども、天地

はもと無心なれば、萬物の自然に生生化化するに任せ置きて、少しもそれを以て仁となさず、全く己の生育の功を忘れたるが如くなるは、これぞ眞の至仁といふべきなる。莊子齊物に大仁不仁とあるも、亦此意をいふ。右の如く天地が萬物に對する有様を譬ふれば、猶ほ芻狗が祭祀中には美しくしく飾り立て、鄭重に取扱はるれども、祭祀が了れば、路傍に棄てられ、行人には其の首や脊を踐まれ、草刈には炊事の燃料に供せらるるが如く、用ありて造りたれども、用が濟めば棄てて之を有せず、全く忘れたるが如くにして、少しも心に止めざるなり。聖人は無心にして天地に則り、無爲の道を體して民を治むるが故に、民の自ら爲すが儘に任せ置きて、故らに仁恵を施さざれども、其の間に自然に眞の大仁が行はれて、民は知らず識らず安穩に至治の恩澤に沐浴することを得るなり。此の如く至治の世となりても、聖人はそれを以て己の功なりとは思はず、矢張芻狗の如く棄てて己の有とすることなき也。孟子心盡にも王者之民皞皞如也とあり、其の意は王者の政は、天地の如く故らに仁愛を施して民を

悦ばしめんとすることなれども、民は自ら井を鑿ちて飲み、田を耕して食ひ、安穩に其の生を遂ぐることを得、かくして別に天子の御恩の有り難きをも覺らず、自然に心が廣くゆつたりとして居るをいふ、此一節の意と略相同じ。

天地之間、其猶橐籥乎。虛而不屈、動而愈出。

○李約、無平字。
○屈、傳奕本、作誦、古字相通。

【譯讀】天地の間は、其れ猶ほ橐籥のごとき乎。虚にして而して屈せず、動き而して愈出づ。

【字義】○天地之間 天地間に存在して萬物を生生化化する所以の理を斥していふ。○橐籥 鍛冶屋の用ふる鞴フイなり、橐は皮にて造りたる鞴の外の積なり、籥は竹にて造りたる鞴の管にて橐を鼓して風を致す所以なり。○屈 竭ルツクなり。

【直解】此一節は、前の天地不仁の句を承け、比喻を設けて無爲無心の效を申説テトクす。さて天地間に存在して萬物を生生化化する造化自然の妙用を譬ふれば、猶ほ橐籥の如き也。今夫れ橐籥の物たる、其の中が空虚

にして本來無一物なるが故に、何程風を出すとも、更に竭くることなく、之を鼓動すれば鼓動する程、愈益、風を生じ、火を熾まんならしめ、銅鐵を鎔かし、多くの器械を製することを得る也。若し其の中に物ありて、風が其の物よりして生ずるならば、其の物の消耗するに随ひて、風も漸く竭きて無くなるべけれど、其の中の全く虚無なるが故に、何時まで経ることも、風の竭くる患なき也。其の中の虚無は、以て道の無爲無心に喩ふべく、天地は猶ほ一大橐籥の如き也。道の無爲無心なるや、故ら仁惠を施すに心なしと雖も、四時行はれ、百物生じ、花も咲き、實も結びて、恆久に窮ることなし。聖人亦之に法り、無爲無心にして、民を治むるが故に、民は知らず識らず、太平の恩澤に沐浴し、至治の化が永く行はるるを得る也。

多言數窮、不如守中。

○第三十七章、道常無爲、而無不爲、侯王若能守、萬物將自化。○多言、傳奕本、作言多。

【譯讀】多言は數窮す。中を守るに如かず。

【字義】○數 音サク、屢なり、一再にして止まざる也。○窮 つまりて困む義。○中 沖に通ず、虚無恬淡の道なり。

○世説〔言語〕要言不煩。
○第五十六章、知者不言、言者不知。

【直解】此一節は、人事に就きて一章の主意を結ぶ、さて多言は無爲の反なり、人喋喋として言葉多き者は、其の言葉の中には理に中らざる失言が出で來りて、他人の感情を害し、思はざる禍を招き、屢窮迫することある也。一旦口より出でたる言は、所謂駟も舌に及ばず、如何に悔ゆとも及び難し、實に慎むべきは言葉なりとす。若し初より沈黙を守り、是非を混同して、心に分別を生ずることなければ、決して窮迫するが如き患なき也。蓋し道の本體はもと虚無なる者なれば、人も亦虚無の大道を守りて安りに言葉を多く出すことなく、安らかに身を全うするに如かざる也。易の困卦の辭に有言不信とあるを孔子が解釋して有言不信、尙口乃窮也とのたまへり、多言數窮の句は、蓋し此に本づくならんか。

○河上公、以此爲成象章。

○天地之根、河上公、王弼竝無之字。

○第十五章、曠谷其若谷。
○第四十一章、上德若谷。

谷神不死章第六 二十六言

【章旨】前章の虚而不屈、動而愈出の句意を承けて道の本體は虚無にして、神靈之を用ひて勞することなきの意を説く。

谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地之根。綿綿若存、用之不動。

【譯讀】谷神死せず、是を玄牝と謂ふ。玄牝の門、是を天地の根と謂ふ。綿綿として存するが若く、之を用ひて勤めず。

【字義】○谷神 谷は其の中の洞然として空虚なる者なり、故に道の本體の虚無なるに喩ふ、其の虚無の道が、萬物を生育する妙用の測るべからざるをほめて神といふ、されば谷神の二字は道の本體の虚無にして神靈なるを強ひて形容していへる也。○不死 盡くることなき義、凡そ實形實體あるものは、生もあれば、死もあり、虚なるものは、生もなく、死もなきこと、佛經に不生不滅といへるが如し。○玄牝 玄は深遠にして

測るべからざる意、牝は陰物、虚静にして能く物を生ず、故に假りて道の虚にして、萬物を生ずるに喩ふ。○門 由りて出づる所の義、第一章の衆妙之門の門に同じ。○綿綿 細長くして絶えざる貌。○若存 若は疑辭、道は虚無にして、形象の摸捉すべきものなければ、疑辭を用ひて断定せざる也。○不動 勤は勞るる也。第五十二章の終身不動、また楚辭遊に、惟天地之無窮兮、哀人生之長勤とある、勤に同じ。

【直解】道の本體は虚無にして、形象なけれども、常に天地萬物を生生して已むことなく、其の妙用は實に神妙にして、測るべからず、強ひて是を名づけて谷神といふ、さて其の谷神は何處より生じたりといふことなれば、永久に互りて死するといふこともなき也。この虚にして形なき谷神(即ち道)が萬物を生生して盡くることなきを以て、假に名づけて玄牝といふ、即ち獸の雌の虚にして子を生む妙機の幽玄にして測られざるに喩へていふ也。玄牝の門とは、第一章の衆妙之門と同じく、萬物皆由りて出づる所をいふ也。天地も其の門よりして出づれば、是を天地之根といふ、根とは由りて生ずる所以の義なり、第一章の無名、天地之始、有名、萬

○第二十五章、
有物混成、先天地生(中略)可以為天下母、字之曰道。
○第五十二章、
天下有始、以爲天下母。
○第六十一章、
天下之交、天下之牝。

○第二十一章、
道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、卽是谷神之謂。

物之母とあると并せ考ふべし、母といひ、牝といふは、皆萬物の由りて生ずる義に喩へたる也、すでに玄牝は天地の根となり、天地陰陽萬物皆是より出づ、かくして一旦之を生じたる後と雖も、一物亡ぶれば、又一物を生じ、春去れば夏來り、寒來れば暑往き、年年歳歳循環して休止することなきは、猶ほ虚中なる橐籥が風を生じて盡くることなきが如く、其の妙用の古今に互りて、細く長く續きて絶ゆることなきを以て觀れば、目にこそ見えね、恍惚として道即ち主宰者ありて、其の間に存在するが如きに似たり、而して其の道たるも、虚無なるが故に、終日之を用ひても、少しも疲勞することなく、時時刻刻未來永劫、萬物を生じて盡くる期なき也、即ち前章の虚而不屈、動而愈出の義なり、次の章の天長地久の句も亦此章の義に本づきて出でたる也。

○河上公、以此爲「韶光章」。

○彭祖釋文曰、黃茂材、天地下有之、字程大昌、無者字。○碑本無且字。

天長地久章第七 四十九言

【章旨】此章前章の意を承けて、天地は無心にして私なき故に、能く長久なり、聖人之に法りて亦私なき故に、能く其の身を全うする所以を説く。

天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生。

【譯讀】天は長く地は久し。天地の能く長く且つ久き所以の者は、其の自ら生ぜざるを以てなり。故に能く長生す。

【字義】○天長地久 長と久とは互文にて天地長久といふに同じ、この天地も形體を以て言ふにあらず、理即ち主宰を以て言ふなり、只理即ち主宰はもと形象なく、説明し難ければ、誰の目にも長久なりと認むる天地を借りて言へる也。○不自生 無心にして自ら其の形を生ずることなき也、即ち前章の谷神をいふ。○長生 萬古不滅なり、即ち前章の不死の義。

○袁了凡曰、萬物有榮枯、天地無存亡、故曰「天長地久」。○第十六章、天乃道、道乃久。

○非以其無私、耶、傳奕本、非作「不」。河上公、無非「耶」二字。

【直解】凡そ天地間の萬物は、皆相對的理法に支配せらるるが故に、生あれば必ず死あり、榮ゆるあれば必ず枯るるあり、盛んなる者は必ず衰ふる時ありて、何物も能く長く久しきに互りて存續する者なし、然るに唯天地即ち主宰者のみは、絶對にして、かかる相對的理法に支配せらるることなくして、能く長く久しきに存續することを得る所以は、無心にして私なく、能く萬物を生ずれども、己自身を生ずるといふことなきを以て也。この故に能く古今に互りて長へに存續することを得る也、即ち前章に谷神不死とあるも亦此意をいふ也。

是以聖人、後其身、而身先、外其身、而身存、非以其無私耶、故能成其私。

【譯讀】是を以て聖人は、其の身を後にして而して身先だち、其の身を外にして而して身存す。其の私なきを以てに非ず耶。故に能く其の私を成す。
【字義】○外 猶ほ遺忘ルルといふが如し、捨てて關はぬ也。○私 無私の私は、公私の私なり、私欲多くして我儘勝手をする義、其私の私は、自己

の身を言ふ、公私の私とは異り。

【直解】是を以て聖人は右に述べたる天地自然の理に法りて私心なく我欲なく功ありても自ら誇り自ら有することなく利ありても推して人に譲り、すべて己の身を後廻にし、人と争ひて先だたんとすることなけれども、却つて己の身が人に先だつやうになる也。其の故如何となれば、衆人皆其の徳を慕ひて之に歸服し、共に推し戴きて官長若くは天子とすれば也。又聖人は私心なければ、己の身あることを忘れ、少しも我儘勝手たごまの振舞を爲さず、旨き物や暖き衣あれば、推して人に與へ、己は粗衣粗食に甘んじ、別に長生せんとする欲望もなければ、無暗に滋養物などを攝取し、厚く己の身を奉養することを爲さざれども、却つて其の身を長く保存することを得る也。其の故は他なし、餘りに長生せんと欲して日夜己の心を勞し、身を大切にすること度に過ぐる時は、それが爲めに却つて病を得ることあれども、之に反して常に無爲無心にして淡泊の生活を爲し、古人が安歩以當車、晚食以當肉、安らかに散歩するは車に乗る樂にも當り、時間が晩れて空腹となりし時に食へば、菜食も肉食の如く

○第六十六章、以其不爭、故天下莫能與之爭。

美しとの意、戰國策の齊策に出づ、顔蠅が齊の宣王に教へたる語なりといひしが如き清貧の境遇に満足する者は、却つて身體が強壯となるのみならず、衆人も其の徳に感じて之を愛護し、長く此世に生存せんことを望めば也。何を以て其の然るかといへば、全く其の私心なく、人に先だたんとせず、我儘勝手を爲さず、己の身を捨てて關はぬやうにすれば也。それ只私心なし、故に能く己の身を成就し、却つて人に先だちて長く存するを得る所以なり。第六十六章に欲先民、必以身後之、また第六十七章に不敢爲天下先、故能成器、長とあると并せ考ふべし。又論語雍に夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人とあるも、其の意略相同じき也。後漢の馮異、人と爲り謙退にして伐らず、諸將功を論ずる時、異常に獨り樹下に屏く、軍中號して大樹將軍と爲す、邯鄲を破るに及び、乃ち諸將を部分し、各配隸する所あり、軍士皆言ふ願はくは大樹將軍に屬せんと後漢書馮異傳、異の如きは能く此章の意を實踐せし者といふべき也。沈一貫曰く、天地ノ長久ナル所以ノ者ハ、其ノ自ラ生ゼザルヲ以テ也、自ラ生ゼザル者ハ、欲ナキ也、故ニ之ヲ私ナシト謂フ也、惟欲ナシ、故ニ能ク欲ヲ制ス、惟私ナシ、故ニ

能ク私ヲ成ス、老子ノ所謂私ト欲トハ、凡ソ今ノ祿位名壽富貴福澤一切有爲ノ事ハ皆是ナリ、所謂汙染戕賊ノ欲ニハアラザル也」と此說之を得たり。

○河上公、以此爲易性章。
○沈一貫曰、此章、貴不爭。

○處、傳奕本作居。
○衆人下、王弼傳奕並有之字。
○傳奕本、道下有矣字。

上善若水章第八 四十九言

【章旨】第三章に弱其志とあるが如く、老子の道は勇往果敢を惡みて、謙下卑弱を貴ぶ。されば上善の人は、無私にして自然の道に従ひ、物と争はず、故に禍を招くことなきを説く、宜しく前章と并せ考ふべき也。

上善若水。水善利萬物而不争。處衆人所惡。故幾於道。

【譯讀】上善は水の如し。水善く萬物を利して而して争はず。衆人の惡む所に處る。故に道に幾し。

【字義】○上善 大學の至善に同じ、絶對自然の善即ち道をいふなり、善惡相對の善にあらず。上とは最上の義、第三十八章の上徳、上仁、論語貨の上知の上皆同じ。○利 爲めになること也。○不爭 卑に居り、順に流れて、其の功に誇るることなき也。○幾 平聲、近なり。

【直解】此一節は水を借りて道を説く、さて最上至極の善は、宛も水の如し、水の物たる、到る處として在らざるはなく、天地間の萬物、皆其の潤澤を

○第七十八章、天下柔弱莫過於水、而攻堅強者、莫之能勝。

○善仁、傳奕本作善人。政、王弼本作正、非。○尤下、傳奕本有矣字。

蒙りて生育す。若し水なきときは、萬物皆枯死して能く其の生を遂ぐる。こと能はず。水の萬物を利益すること、實に廣大にして限りなしといふべし。凡そ物の情、己に功あれば、必ず其の功に誇る者なり。其の功に誇れば、互に争を生ずるに至る。然るに水はもと無心にして、少しも其の功に誇るることなく、器の方圓に隨ひ、すべて自然の儘に任せ、未だ嘗て逆ひ争ふといふことなき也。又衆人の情、高き位に居るを好み、卑下の地に處るを惡むを常とすれども、水は則ち然らず、固より無情の物なれば、物と争ひ競ふ念もなく、高敞の地を辭して、衆人の惡み嫌ふ所の卑下濕汚の地に處り、恬退にして争はざる徳あること、猶ほ道の萬物を生育して其の功に居らざるに似たり。故に道に近しといふ也。按ずるに上善は無形の道なり、水は猶ほ有形の物なり、全然同一なりと言ふことを得ず、故に幾しといへる也。

居善地、心善淵、與善仁、言善信、政善治、事善能、動善時、夫惟不爭、故無尤。

【譯讀】居は地を善くし、心は淵を善くし、與は仁を善くし、言は信を善くし、政は治を善くし、事は能を善くし、動くことは時を善くす。夫れ惟争はず、故に尤なし。

【字義】○地 寧靜に喩ふ。莊子道に其動也、天其靜也。地とあり、以て證とすべし。先儒多く解して水の如く卑汚の地に居ると爲す、これにても通せざるにあらざれども未だ瑩ならず。○淵 幽深にして測られざるをいふ。詩經邶風燕の其心塞淵の毛傳に淵深也とある是れ也。○時 時の宜しきに合ふ義。孟子に其ノ可ニアタル之ヲ時トイフとある時、中庸の君子之中庸也、君子而時中、の時中皆同じ。

【直解】上善の人は無心にして、水の高きを避けて卑きに就くが如く、少しも物と争ふことなく、富貴貧賤其の居る所の位に素して行ひ、虚榮を慕ひ利欲を望むことなく、其の心の安泰なること、地の寧靜なるが如きことを善くする也。又心は淵の湛然として深く、他人の容易に窺ひ知ることを出来ざるが如きことを善くする也。又人に物を施與するも、恩に被るといふことなく、其の報を求めんとすることもなく、眞の仁を施す

ことを善くする也。若し麥飯で鯉を釣るが如く、人に物を施與して其の報の多からんことを求め、或はそれによりて虚名を博せんとする野心ある者の如きは、眞の仁とはいふべからざる也。又人と約せし言は必ず之を履行し、決して嘘をいはぬ、是を信を善くするといふ也。史記季布に楚人諺曰、得黄金百斤、不如得季布一諾。とあり、季布の如きは、この言善信の旨を實踐躬行せし者と謂ふべき也。而るに輕佻浮薄なる者は、兔角易請合を爲すが故に、この信を善くすること能はざる也。第六十三章にも輕諾、必寡信とあるは是れなり、豈戒めざるべけんや。又政を爲すに於ても自然の道に従ひて、無爲の治を爲すが故に、天下は太平無事に治ることを善くする也。彼の己が功名を顯はし、一時の苟安を求めんが爲めに、無闇に新らしき制度を設けて、民の事に干涉し、六、敷法令などを頻發して、民の自由を束縛し、それが爲めに却つて民の怨を招き、社會の安寧秩序を紊亂する者の如きは、愚劣なる政治家の爲す所にして、共に政事を談ずるの資格なき者なり、此輩多くは淺薄なる西洋人の糟粕をねぶり、意氣揚揚、喋喋として所謂政治學の請賣を爲すと雖も、もと徳望なく識

天下無事但庸人之治
後スノミヤクモ其ノ源ヲ清
セズ何ゾ治マザルヲ憂ヘ
ヤ

見なく、奪ふべからざる氣魄もなく、徒に浮名浮利に憧憬る一種の傀儡たるに過ぎず、吁此輩を用ひて國家の治安を求めんとするは、百年河清を俟つよりも望なし、豈慨歎せざるべけんや。昔陸象先、政を行ふに寬簡を尙び、人に謂つて曰はく、天下ハ本無事、但庸人之ヲ擾スノミ、苟モ其ノ源ヲ清クセバ、何ゾ治マザルヲ憂ヘンヤ。唐書と、誠に千古爲政者の金箴として宜しくこれを紳に書すべき也。又何事を爲すにも、自然の理勢に従ひて之を爲すが故に、其の才能の働を十分に達することを善くする也。又凡そ動きて興作する所は、皆自然の時運に従ひ、其の時の宜しきに合ふを以て、事機を失ふの患なく、動けば必ず其の功を成すことを得、是を時を善くすといふ也。すべて何事も時節が來て動けば、無理がなく、自然に道に合ひて成功するもの也。時の事を爲すに大切なる道理は、聖人易に於いて詳かに説きてあり、時と相俟たざれば何事も成功することなき也。以上述べたる如く、上善の人は居善地、以下の七善を具ふるが故に、徳行事業の卓然として觀るべき者ありと雖も、無私無欲にして、些も己の功德に誇りて人と争ふことを爲さざる也。人と功を争ふ時は、人

に悪まれて禍咎を招き、其の身を危くする恐あれども、夫れ唯人と争はざるが故に、絶えて禍咎の尤を招くことなし、是れ則ち上善たる所以なり。

【辨正】居善地以下の七善を蘇子由、呂吉甫等の諸家は、皆水にかけて水唯争はず、故に此七善を兼ねて説きたれども、稍拘泥穿鑿の嫌あり、故に従はず、只居善地、心善淵との二句は、水に即きて言ひたるなれども、與善仁以下の五句は、件を逐ひて排列せしまでにて、必ずしも水に即きて言ひたるにはあらず。

持而盈之章第九 四十一言

【章旨】此章前章の意を承けて、人の進むことを知りて退くことを知らず、満つることを求めて足ることを知らざるを戒む。

持而盈之、不如其已、揣而銳之、不可長保。

【譯讀】持して而して之を盈つるは、其の已むに如かず、揣めて之を鋭くするは、長く保つ可からず。

【字義】○持而盈之 持は左右に之を支へ持つ義、此句は倒語法にて、盈而持之といふに同じ。○揣而銳之 此句も同じく倒語法にて、銳而揣之といふに同じ。蓋し韻を押む爲めに文字を倒装せしまで也。揣は治なり、其の折れんことを懼れて、節量して之を治むる義。○不如其已と不可長保とは互文なれば、持而盈之、不可長保、不如其已と謂ふの意なり。

【直解】此一節は盈つる者は、必ず覆へり、鋭き者は必ず折るる例を引き、足

○河上公、以此爲運夷章。
○沈一貫曰、此章貴止足。

○持、司馬光作特。
○淮南子引、長保下、有也字。

○第四章、挫其銳。

ることを知りて退き、己の分に安んずべき事を説く。さて今器になみなみと満てたる水を外へ覆さじと、左右の手にて之を支へ持つことは、中骨の折れることにて、遂には其の手が疲れて長持が出来ず、傾け覆すに至る。されば始より一杯に盈たすことを已めて程好き處に止め置くに若かざる也。八分目に入れたる水ならば、決して傾覆する心配はなき也。又刃物などの餘りに鋭利なるは挫折し易きを懼れ、其の切先を治めて之を節量すとも、遂に長持は出来ずして挫折するに至る。されば始より鋭く尖らすことを已むるの愈れるには若かざる也。鋭利ならざる鈍刀は、決して挫折する心配はなき也。右の如くすべて物は盈つれば則ち虧け、鋭ければ則ち折るることを免れざるは、自然の理法なれば、人は此理法に従ひて、常に盈満を戒め、富貴顯榮の地位に登らんと心に競ひて鋭進することなければ、失敗を招く患もなく、後悔することもなく、安全に其の身を保つことを得る也。書經大禹に満招損謙受益時乃天道といひ、易謙卦傳象にも天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙といへるも、亦此意をいふ也。

金玉滿堂、莫之能守、富貴而驕、自遺其咎、功成名遂身退、天之道。

○堂、傳奕本爲
○驕、司馬光作
○橋非。
○功成名遂身
退、天之道、王弼
作、功遂身退、天
之道、傳奕作、成
名、功遂身退、天
之道、李約名作
事、淮南子、道下
有也字。

【譯讀】金玉堂に満つるも、之を能く守ることなし。富貴にして而して驕れば、自ら其の咎を遺す。功成り名遂げて身退くは、天の道なり。

【字義】○遺 災禍を自ら其の身に送る也。○咎 災禍なり。○功成名遂 前節の盈の字に應ず。○身退 前節の其已に應ず。○身退 必ずしも山林に隱匿するを謂ふにはあらず、早く退きて其の功の上に居らざる也。第二章に功成而不居とあるに同じ。

【直解】前節に述べたる如く、盈つる者は必ず覆へり、銳き者は必ず折るるは、天地自然の理法なれば、假令金銀珠玉が堂に満つる程澤山にありても、足りといふことを知らざれば、決して長くそれを保有することは出来ざる也。彼の殷の紂王が暴力に任せて、いやが上にも積み貯へたる鹿臺の財、鉅橋の粟も忽ち武王の爲めに發かれ、散じて跡形もなくなりたるにても知るべき也。實に奢る平家は久しからず、よし幸に其の身一代

○第五十三章
服文采、帶利劍、
厭飲食、資財有
餘、是謂盜奪、非
道哉。

○莊子(山木)功
成者墮、名成者
虧。
○易(豐卦)日中
則昃、月盈則食、
天地盈虛、與時
消息、而況於人
乎。
○陸希聲曰、持
大器而滿盈、雖
懼之不如早止、
居大位而亢極、

は之を保ち守ることを得たりとも、子孫に不心得の者が出来て、之を蕩盡し、其の能く二代目三代目までも長く續きて之を保ち守ることは、甚だ覺束なきこと也。されば、昔の川柳に「賣居と唐様で書く三代目」とは、よくも言ひたりといふべき也。又富貴の者は知らず識らず、驕慢の氣が增長して、豪奢淫佚を逞うし、それが爲めに人には怨まれ、天よりは見棄てられ、遂に滅亡の禍を招くに至る。夏の桀王、殷の紂王、秦の始皇、隋の煬帝は勿論、なほ卑近の例を引けば、江戸時代の淀屋辰五郎、紀文大盡の如き、皆以て鑑戒と爲すべき也。されば易の乾卦の「亢龍有悔」の象傳に「亢龍有悔、盈不可久也」とあり、亢龍とは天上に昇り詰めたる龍にて、人が尊貴を極め、戒慎する所なければ、忽ちに敗亡の悔を招くに至るに喩へたる也。されば人は己の功業を成就し、己の名譽を全く遂げたる上は、何時までも戀戀として、其の功名の地位に居ることなく、早く勇退して安らかに其の餘命を全うするやうにすべし。是れ則ち自然の天道に合ひたる者といふべき也。乃ち前節に盈滿を戒めて早く已め退くに若かざることを説きたる所以也。蓋し天之道の例を姑く四時の運行に就きて觀れ

雖憂之、不如早退。

ば、春は萬物を發生することを司る、すでに草木の萌え出づる功成る時は、自ら退きて夏に讓る。夏は萬物を長養することを司る、すでに長養の功成る時は、自ら退きて秋に讓る。秋は萬物の成熟を司る、すでに成熟の功成る時は、自ら退きて冬に讓る。冬は萬物を收藏するを司る、すでに其の功成る時は、自ら退きて、復春に讓る。これ功成りて身退く也。蔡澤が「四時之序、成功者去」といひしは、則ち是れ也。この功成名遂身退、天之道の句は、實に千古不刊の金言なれども、兎角人情は足ることを知らず、徒に富貴權勢の地位に戀戀するが爲めに、早く勇退して其の終を全うすること能はず。されば古より此の金言の旨を實踐する者の極めて罕なるは、眞に憐むべきの至なり。只功成り名遂げて後、五湖の扁舟に乗じて世を逃れたる越の范蠡や、高祖を佐けて天下を平定せし後、封侯を辭して赤松子といふ仙人に従ひて遊びし漢の張良の如きは、よく此金言の旨に合へる者と謂ふべき也。また徒然草三十八に「竹林院入道左大臣殿(藤原兼實の子公衡)太政大臣にあがりたまはんに、何の滯りかおはせんなれども、めづらしげなし、一上左大臣の異名、職原抄に見ゆにて止みな

んとて出家したまひにけり、洞院左大臣殿實泰此事を甘心したまひて、相國の望おはせざりけり、亢龍の悔ありとかやいふことはべる也、月満ちては虧け、物盛りにしては衰ふ、よろづの事さきのつまりたるは、敗れに近き道なり」とあり、賢哲の止足を知りて終を全うする所以の道、古今東西其の揆を一にすること、實に符節を合するが如き也。

載營魄章第十 七十言

【章旨】 此章、無爲自然の徳、即ち玄徳を説明す。

載營魄抱一能無離乎。專氣致柔能如嬰兒乎。滌除玄覽能無疵乎。愛民治國能無爲乎。天門開闔能爲雌乎。明白四達能無知乎。

【譯讀】 營魄を載せて一を抱き、能く離ること無からん乎。氣を専らにし柔を致して、能く嬰兒の如くならん乎。滌除玄覽して、能く疵なからん乎。民を愛し國を治めて、能く無爲ならん乎。天門開闔して、能く雌と爲らん乎。明白四達して、能く無知ならん乎。

【字義】 ○載營魄 載は乘なり、營は營營として運動して定まらざる義、魄は人の形體をいふ、形體は知覺運動するものなるが故に營魄といふ、魂魄の別は、魂は氣と爲し陽と爲し、名つけて神といひ、魄は骨肉形體と爲

○河上公、以此爲能爲章。
○沈曰、此章論治身之術。
○抱、傅奕本作衰、衰、衰也。
○無離乎、以下六句、河上公竝無乎字、致、淮南子道應訓作至、能如嬰兒乎、至、能如嬰兒乎、王弼無如字。
○爲雌乎、河上公爲作無。

し、陰と爲し、名つけて鬼といふ。王註に「營魄ハ人ノ常居所也」とあり、人の形體は魂即ち心の常の居處なりとの義なり。○抱一 抱は守なり、一は純一の元氣をいふ、元氣は二なし、故に一といふ、人は此一を天より受けて生る、或は性といひ、或は道といふも、其の歸する所は同じ、人能く此一を守れば、和靜の徳を全うするを得るなり。抱一の二字は、第二十二章にも、聖人抱一爲天下式とあり、并せ考ふべし。莊子有在に我守其一以處其和とある、守一は、即ち此抱一と同義なり。○乎 將に斷定せんとして未だ斷定せざるの辭。○專氣 專は專一なり、無知無欲にして元氣の全盛なるをいふ。○致柔 致は極むる義、第十六章の致虚極の致に同じ。○嬰兒 柔弱の理想と爲して喩ふ。○滌除 鏡面の塵垢を拂ひ拭ふが如く、不淨不潔なる慾念を濯ひすすぐ義。○玄覽 冥覽また妙觀に同じ、玄は幽遠なり、覽は觀なり、極めて奥深く自然の理を觀る、佛經の見性に同じ。○天門 心をいふ、人は天の一部分にして、猶ほ分家の本家に於けるが如し、人の心を推せば、則ち天の心を知るを得、則ち人の心は本家の天に入る門の如し、故に喩ふ。莊子運天の天門弗開矣の疏に「天

○第三十九章
天得一以清、地
得一以寧。

門ハ心ヲイフ副墨に「天門ハ猶ホ靈府ト言フガ如シ」とあり。○開闔 門が開きたり閉ぢたりする、心の動靜變化定まらざるに喩ふ。○雌 柔弱にして敢て天下の先とならざる義、雌は先だちて事を爲せども、雌は雄に誘はれて其の後に隨ひ、何事にも下手になりて居る、故に喩ふ。○明白四達 白も明なり、事理を洞見して前後左右遍く通達せざる所なき也、即ち眞知公知を謂ふ。

【直解】此一節は玄徳を守るの工夫を列擧す、さて人の形體は耳目鼻口手足等ありて、常に外物に應じ、知覺運動し、時時刻刻營營として少しも定まらざる者也、人は車の物を載するが如く、かかる形體を乗せ捧げて、純眞無二なる一元氣即ち自然の道を抱き守りて、形體と一即ち道との兩者が能く相離れざるやうに致し、以て和ぎて靜かなる徳を全うするところが出来るか、如何か、例へば形體の一部なる手や足の動くは、即ち營魄の動くなれども、之を動かさしむる者が、常に此一即ち道にして、兩者が何時も相離るることなきやうに致したき者なり、是れ有道者にして、始めて之を能くするを得る也、孟子上告子に學問之道、無他、求其放心而已ま

た宋の程明道が心要在腔子裏といひたるは、此句の意と同じ。又心は無知無欲にして、純眞の元氣を專一に抱き守り、嗜慾の爲めに外に散らし洩すことなく、十分に柔和の道を心に致し極めて、何事も自然の理法に従ひ任せて、物と争ふといふことなきこと、母の懷に抱かれて居る嬰兒即ち赤坊の如くなること、が出来るか、如何か。是れ有道者にして始めて之を能くするを得る也。蓋し嬰兒は、純眞の氣未だ散せず、無我無心にして少しも物と争ひ忤ふことなし。故に借りて極めて無欲にして柔弱なる喩とす。第二十章に我獨泊兮其未兆、若嬰兒、未孩、また第五十五章に含徳之厚、比於赤子とあるも皆同じ。さて道を修めて嬰兒の如くならんことするには、死づ心の中に縈ひつく、所の種種雜多にして汚れたる利欲の念を爽然と洗ひ清めて之を除き去るを要す。かくして心は塵垢を拂ひて、一點の雲もなき明鏡の如くなり、其の明かなる心を以て深く天地自然の道理を達觀し、常に其の自然の道に従ひて事を爲し、少しにても己の妄念の爲めに、瑕疵即ち過失を仕出かして、其の身に禍するが如きことなきやうに致すこと、が出来るか、如何か。是れ有道者にして始めて

○列子〔天瑞〕曰、其在嬰孩、氣專志一、和之至也。

之を能くするを得るなり。又民を愛し國を治むるに、能く無爲の治を布き施すことが出来るか、如何か。是れ有道者にして始めて之を能くするを得る也。彼の凡庸なる政治家の如きは、動もすれば己が功名を博せんとする野心に驅られて、無暗に法律規則などを頻發し、其の甚だしきに至りては、朝令暮改、紛紛擾擾として民をして適從する所を知らざらしむるに至る。是れ決して民を愛する所以にあらずして、民を戕賊するもの也。宋の王安石の新法の如き、以て鑑戒と爲すべき也。さて無爲とは何事も爲さずといふ義にはあらず、所謂爲すことなくして爲すことあるをいふ。即ち何事も自然の道に任せ、民の意向に従つて之を善導するをいふ。第五十七章に我無爲而民自化とあるは、是れなり。論語曰、子曰、因民所利而利之とあるも、其の意略同じ。故に眞に國を治め民を愛するの聖人は、必ず身を以て民を率ゐる。第二章に出でたる聖人處無爲之事、行不言之教の語を實踐したまふ也。論語公衛靈に子曰、無爲而治者、其舜與。夫何爲哉。恭己正南面而已矣とあるは、以て證とすべき也。又天門即ち人の心は、門戸を開いたり閉ぢたりするが如く、動靜變化少しも定まらざる者

なり、されば孟子告子上にも孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與とあり、其の意は、人の心は堅く操りて放さぬときは、此に存在すれども、放ちて捨つる時は、忽ち失せ去り、其の出入は定まれる時なく、其の處るにも、亦定まれる場處もなしとの義なり、かく出入變化の極めて測られざる者なるが故に、開闔といひたる也、然れども能く其の心を操り守りて、彼の雞の雌の柔弱にして、雄鳥の倡へ誘ふに應じて、それに隨ふが如く、敢て天下の先とならず、恬靜無欲にして、物と争ふことなく、何事も餘儀なく爲さざればならざるやうになりて、之を爲すといふことが出来るか、如何か、是れ有道者にして始めて之を能くするを得る也、然るに凡夫の悲しき、無我無心にして此の貴ぶべき雌即ち柔弱の道を守ることに能はず、己が己の自我の心強く、利欲の念熾んにして、彼の雄鳥の如く物と争ひて之に勝たんとするが故に、世間に公事口論の絶ゆる間なきは實に淺ましき極ならずや、第二十八章に、知其雄、守其雌、爲天下谿、爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒とあると并せ考ふべし、又明白四達即ち聰明睿智にして八面玲瓏、天下の事理一として明かに通曉せざるこ

となきは、是れ真知公知なり、然るに事理に通曉する者は、動もすれば、其の能を見はさんとして、彼や此やと、手を出して施爲する者なり、此の如きは私知を弄ぶ者にして、眞の知者の爲す所にはあらざる也、眞の知者は老子が「良賈ハ深ク藏メテ虚シキガ若ク、君子ハ盛德アリテ容貌愚ナルガ若シ」大戴禮言篇と曰ひし如く、聰明の心を深く、韜み藏して利口ぶらず、外見は無知なるが如く見ゆる者なり、これが即ち大知真知ある人の所爲なり、果して能く其の無知の如くなることが出来るか、如何か、是れ有道者にして始めて之を能くするを得る也、按ずるに第二十八章に、知其白、守其黒、爲天下式とある、知其白はこの明白四達をいひ、守其黒はこの能無知乎に當るなり、又第四章の和其光、同其塵も亦其の意は同じき也、之を要するに衰亂の世に處りて利口ぶることは、禍を招く所以にして、明哲身を保つ所以の道にあらず、故に老子は本書中に於て、反復して深く之を戒めたるなり、荀子宥にも孔子曰、聰明聖知、守之以愚、功被天下、守之以讓とあるは、則ち此章の明白四達能無知乎の意と同じきなり。

生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

【譯讀】之を生じ之を畜ひ、生じて而して有せず、爲して而して恃まず、長じて而して宰せず、是を玄德と謂ふ。

【字義】○畜 やしなひそだつる。○生之畜之 兩の之字は萬物を指す。○生而不有 萬物を生成するも其の功を己の有とせざる也。○宰 宰制なり、きりもりする義、不宰とは之が主と爲らざる也、其の成功に居らざるを謂ふ。○玄德 深遠玄妙の徳なり。

【直解】此一節は、前節に列舉したる六つの者を能くすれば其の效驗は此の如くなる、それが玄德であるといふことを述ぶる也。さて聖人は、前節に述べたるが如き、すぐれたる徳あるも、すでに第五章に「天地ハ仁トセズ、萬物ヲ以テ芻狗ト爲ス」とあるに法りて民を治むるが故に、能く萬物を成育し、又之を長養するも、敢て衆人の如くに、それを己の功と爲して自ら有することを爲さず、又其の爲したる功を恃みて誇ることを爲さず。又萬物を長養するも、それを我物として其の成功の上に居らざる

○第五十一章、道生之、徳畜之。

が故に、随つて自ら之が主と爲りて萬物を宰制するといふこともなく、全く其の功をうち忘れたる者の如くなる也。此の如く無心にして深く己の功德を包み至微至妙にして他より窺ひ知るべからざる程なるが故に、これを名づけて玄德とはいふ也。

【辨正】○能無爲乎を王本、能無知乎に作る、それにも通せざるにあらざれども、今は河上本に従ふ。○能爲雌乎の爲を河上本、無に作るは非なり。今は王本に従ふ。○能無知乎を王本、能無爲乎に作る、それにも通せざるにあらざれども、今は河上本に従ふ。俞樾曰はく「唐ノ景龍碑ニ愛民治國能無爲、天門開闔能爲雌、明白四達、能無知ニ作ル、其ノ義竝ニ勝ル、當ニ之ニ從フベシ、愛民治國、能無爲ハ即チ孔子ノ無爲而治、靈公論語衛ノ旨ナリ、明白四達、能無知ハ即チ知、白、守、黑、老子二ノ義ナリ、王弼本ハ誤リテ之ヲ倒ニス」と、此說確として易ふべからざる也。

○河上公、以此爲無用章。
○沈云、此章表無之用。

○當其無、有車之用、畢沅曰、本皆以當其無、斷句案、攻工記、利轉者、以無有爲用也、是應以有字、斷句、下、並同、是說似是。

三十輻章第十一 四十九言

【章旨】道は形なく虚無なる者なり、故に道を稱して無といふ。此章は比喻を引ききて無の妙用を明かにす。

三十輻共一轂。當其無有車之用。埴埴以爲器。當其無有器之用。鑿戶牖以爲室。當其無有室之用。

【譯讀】三十輻一轂を共にす。其の無に當りて車之用あり。埴を埴して以て器を爲る。其の無に當りて器之用あり。戸牖を鑿ちて以て室を爲る。其の無に當りて室之用あり。

【字義】○輻 車の輪の矢なり、一ヶ月の日數に象りて三十本ある也。○轂 「ゴシキ」也、輻の共に集る處なり、中心空虚にして車の軸を容るる者なり、故に輪心ともいふ。○埴 ねやす也、水を加へて土をこねる義。○埴 はに即ち粘土なり、陶器を作るに用ふ。○戸牖 戸は室の入口に在りて、人の出入する半門、即ち片扉にて開閉する戸、牖は壁にあけた

る窗にて、格子をはめて明を通ずるもの、東の方に戸あり、西の方に牖あるは古の制なり。

【直解】此一節は三喻を設けて、虚無の道の用を説く。さて世の中に無ほどよく働く者はなし。例へば三十本の車の輻が、一つの轂を共にして、湊りて居る。其の轂は中が空虚なるなり、其の空虚なる處へ、車の軸を容れて、それにて車が運轉する事が出来る也。即ち車の轂の中の無即ち空虚なる處あるに由りて、車の物を運び、人を載せて行くなどの用を爲すことを得る也。無の用も亦大なりといふべし。又粘土をこね固めて茶碗鉢などの陶器を造るに、其の器中の空虚即ち無なる處あるが爲めに、そこへ飲食物を盛るの用を爲す也。若し陶器にして中空の處なくんば、如何にして物を盛ることを得ん、されば器の器たる用を爲す所以は、其の中の無なる所あるが故なるを知るべき也。又人の住する部屋即ち室の如きも亦然り、四方を塗り籠めては、室の用は爲さぬ也。そこで一部を切り開き、空虚にして、人の出入をする半門即ち戸と爲し、又一部を開き、空虚にして、光明を通ずる格子窓と爲す。是に於て始めて室の室たる用を爲す

○林希逸曰、車器室、皆實有之利也、而其所以爲車爲室爲器、皆虛中之用、以可謂奇筆。

也。されば戸牖の無の處が室の用を爲す所以を知るべき也。

故有之以爲利、無之以爲用。

【譯讀】故に有の以て利たるは、無の以て用を爲せばなり。

【字解】○故 前節の三喻を承けて言ふ。○有 前の車器室の如く、形ある物をすべて稱す。

【直解】第二節は前節の比喩を承けて正論せし也。さて有即ち前に擧げたる車器室などの實體ある物のそれぞれの便利となるは、其の中の無即ち何もなき空虚なる處あるを以て其の用を爲すことを得る也。即ち有といふ實物と、無といふ空虚なる理と、兩者相待たざれば、決して其の用を爲すこと能はざる所以を知るべき也。此章は首章の常無欲以觀其妙とあるを詳かに述べたる也。この外本書中、常無觀妙の理は、度度之を言へり、此章最も明白にして近く譬を取りたる者なり、世人唯有の用あることを知りて、有は無ありての上にて始めて用に立つ者にて、無の功最も大なることを知らず、故に丁寧反復して述べたる也。されば人は何事

○韓非(喻老)空
察者、神明之戸
隔也、耳目端於
聲色、精神端于
外、故中無主。

を爲すにも空虚を以て本とせざるべからず、例へば心はもと虚なる者なり、然るに私欲が起るときは、心は虚なること能はず、私欲の爲めに心は蔽はれ、變じて實となる也。心が欲の爲めに蔽はれて實となる時は、最早心の働は出來ざるやうになる也。是れ次章に五色令人目盲云云の説ある所以なり、宜しく此章と併せ考ふべき也。淮南子精神訓に、夫レ孔竅ハ精神ノ戸牖ナリ、耳目ハ人身中ノ空缺ニシテ聰明ヲ通ズル所以、本虚ナリ、聲色ニ蔽ハレテ其ノ資塞ル、故ニ人能ク聲色ノ累ヲ棄テテ、嗜欲ノ念ヲ去ラバ、則チ心竅洞開シテ、耳目聰明トナリ、天下ノ能事畢ル矣とあるも、亦此意をいへる也。廣瀬建曰く、有無ト云フ事、老子第一ノ要義ニシテ、易ニ陰陽アルガ如シ、是ヲ佛説ニスレバ、地水火風ヲ天地トス、是有ナリ、其ノ上ニ空氣ト云フ者アリテ、之ヲ運用ス、是即チ無ナリ、天地ノ位ヲ得、日月ノ運行、風雷ノ變化、總テ空氣アリテ、其ノ間ニ行ハルル也、空氣ナケレバ、萬物壞ルル也、人ノ息ヲ物ニテ塞ギタルガ如シ、人ハ一日二日食セズトモ、死スル事ナシ、空氣通ゼネバ、忽チ死スル也、故ニ萬物無ニ依リテ生活セザルハナシ、サテ無ヲ離ルト、離レザルトハ、動靜ニ因ル也、靜ナレ

バ離レ難ク、動ケバ離レ易シ、是虚静ヲ貴ブ所以ナリ、先ヅ此大意ヲ知リテ、無ノ妙用、萬物ノ上ニ在ルコトヲ知ルベシ。

○河上公、以此爲檢欲章。

五色章第十二 四十九言

【章旨】此章、物欲を去りて虚無自然の性を存すべきことを説く。
五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵、令人心發狂、難得之貨、令人行妨。

【譯讀】五色は人をして、目盲せしめ、五音は人をして耳聾せしめ、五味は人をして口爽せしめ、馳騁田獵は、人をして心狂を發せしめ、得がたきの貨は、人をして行妨げしむ。

【字義】○五色 青(五行に配すれば木に屬し、東方を主る)黄土に屬し中央、赤(火)南(白)金、西(黑)水、北) ○五音 宮(五行に配すれば土)商(金)角(木)徵(火)羽(水) ○五味 鹹(苦)辛(甘)酸をいふ。 ○爽 たがふと訓す、差忒なり、正味を失ひて別つこと能はざる義。 ○田獵 狩りなり、田は畝に同じ、もと田の爲めに害を除くが爲めに起る。 ○行妨 清廉の操を失ひ、徳行を妨害する。

【直解】此一節は外物の欲の人の心をくらくし、徳行の妨害となることを説く。目には明といふ徳ありて、物の黑白善惡を辨へ知ることを得る也。而して美しくしき青黄赤白黒の五色は人の目を悦ばしむる者なれども、目の欲する儘に任せて、之を節制する所なければ、遂には目が眩み惑はされて、目の本性たる明を失ひて盲人と同じくなるもの也。況や彼の美しくしく艶わんなる女色の如きは、之を愛すること度なき時は、之が爲めに目が眩みて其の本性を失ふのみならず、心まで蕩たごけ盡くるに至ること。古今其の例甚だ多し。戰國策魏に「晉ノ文公、南之威美人の名ヲ得テ三日朝セズ、三日朝ヲ聽カズ、遂ニ南之威ヲ推シテ、之ヲ遠とほザケテ曰ハク、後世必ず色ヲ以テ其ノ國ヲ亡ボス者アラント」美しくしき女色の爲めに目がつぶれ、政に怠りしに、忽ち悔悟して南之威を遠ざけ、つぶれたる目の、三日目にあきたるは、さすがに霸王の器たる文公ならでは出來ざること也。また耳には聰といふ徳ありて、能く宮商角徵羽の五音は勿論、是非善惡の道理をも聞き分くるを得る也。而して面白き音楽を好むことは、列子問湯に「瓠巴楚の人にて琴の名人、鼓琴、鳥舞、魚躍」とあるが如く、名人の奏かづ

る琴には、魚鳥すらも感動して躍り出づといふ、まして人は聲色といふ熟語のある如く、色に次ぎて音楽を好むは、其の天性に出づること、古今東西皆然り。されども耳の欲する儘に任せて、之を節制する所なければ、遂には耳の本性たる聰を失ひて聾つんと同じくなるもの也。五味も亦然り、餘りに美味を好むこと甚だしく、口の欲する儘に任せて、之を節制する所なければ、遂には舌の味を分つ官能を失ひて、何を食ひても旨うまからざるやうになるもの也。以上は人の私欲の最も甚だしき色と音楽と飲食との三者に就きて之を節制すべき所以を説く。大學に、心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味とあるに同じ。さて人の身體の主は心なり、然るに車馬を馳せ驅りて山野に禽獸を逐ひ廻すことは、其の心を樂ましむるのみならず、後漢の華陀といふ名醫が養生の術に五禽の戲を誨へて人體、欲得勞動、穀氣得消、但不可令極耳と曰ひしが如く、程程に之を爲すは、氣體の養となれども、餘りに之に耽溺して、度なき時は、正しき心も紊亂して、物の是非善惡を分つこと能はざる狂人の如くならしむるもの也。又容易に求め得難き金銀珠玉などの貨たからを得んと欲する念が深き

時は第三章に不貴難得之貨使民不爲盜とあるが如く、漸くに其の心が闇みて、不正の行爲を敢てして之を求めんと欲し、遂には盜を爲すに至る、是れ皆人をして廉恥の心を失ひ、徳行の妨害を爲さしむるもの也。

是以聖人爲腹不爲目故去彼取此。

【譯讀】是を以て聖人は腹を爲して目を爲さず。故に彼を去りて此を取る。

【字義】○爲腹 内を務むる也。○目 外を務むる也。五官中の最も重き

者を擧げて他を略せし也。○彼 外物を斥す。○此 虚無の道なり。

【直解】此二節は内性即ち虚無の道を修むべきことを説く、人は外物の欲の爲めに、其の本心を喪ふこと前節に述べたるが如くなるが故に、聖人は腹即ち内部の徳性を治むることを務め、外より物欲を引き入るる所の目を治むることを爲さざる也。單に目といひたるは、欲の最も大いなる者を擧げて、他を略したるにて、實は耳口などを兼ねて言ひたる也。そこで聖人は彼即ち前節に擧げたる五色・五音・五味・財貨・田獵等の外物の欲を棄て去りて、此即ち腹を爲して、玄妙なる虚無の道を取ると也。蓋

し人若し心に虚無の道ありて能く無知無欲なれば、彼の耳目などの外欲に誘はれて、身を誤り禍を招くことは、決してこれ無ければ也。此一章の意は宜しく第三章と并せ讀みて、互に相發明すべき也。

○河上公、以此爲「厭恥章」。○沈曰、此章論保寵持貴之過。

寵辱章第十三 八十七言

【章旨】此章前章の外物の爲めに心を亂すべからざる説を承けて、人は己一身の榮辱を忘れ、富貴利達の爲めに其の心を惑亂することなくして、始めて天下を爲むることを得る所以を説く。

寵辱若驚、貴大患若身。

【譯讀】寵辱驚くが若く、大患を貴ぶこと身の若くす。

【字解】○寵 君に愛せられて我身の榮ゆる義、富貴榮達をいふ、すべて寵とは上の人より寵せらるる也、君の臣を寵し、夫の妾を寵するが如し、人の臣妾たるは貴ぶに足らず、臣妾にして寵を保たんとする心を持すれば、其の未だ得ざれば之を得んことを思へ、既に之を得れば失はんことを思へ、惕然惶然として敢て寧んせず、其の驚くが如きは固より宜なり。○辱 はちをかき義、貧賤屈辱をいふ。○大患 患とは串に従ひ心に従ふ、心に串をさしたるが如く痛く感ずる義、故にうれへと訓ず、災禍を

いふ。大患は榮寵を斥す、蓋し榮あれば枯あり、寵あれば辱あり、榮枯寵辱は決して相離るべき者にあらず、故に榮寵を斥して大患といひたるは、辭を激しくして人を警めたる也、焦弱侯は貴大患若身は倒語法にして貴身若大患と言ふに同じと註したれども非なり。

【直解】衆人は榮寵あれば、心に喜び勇みて驚くが如く、屈辱あれば悲み歎きて驚くが如く、常に外物の爲めに心を惑亂する也、されども世の中の事は、榮あれば必ず枯あり、寵あれば必ず辱あり、有爲轉變は免るべからざるの數也、例へば大臣にでもなれば、位人臣の榮を極むなどといひて、衆人は無上の光榮として之を尊び羨むなれども、道德ある人より觀れば、さて御苦勞千萬の事なり、天下の重任を一身に擔ひて、大事件の起りし毎に、憂慮して夜も寐ねられず、若し一步を誤る時は、生命までも抛たざるべからず、秦の李斯も宰相とならざれば、殺されもせざりしものと、深く氣の毒に思ふ也、實にや榮枯寵辱は互に相倚りて、相離れざること此の如し、されば榮寵は人身の大いなる憂患にして、決して之を貴びて喜ぶべき者にあらず、然るに衆人は其の大患ともいふべき榮寵を貴

○莊子「列禦寇」或聘於莊子、莊子應其使曰、子見夫犧牛乎、衣以文繡、食以芻菽、及其牽而入於大廟、雖欲爲孤犢、其可得乎。

ぶこと、己の身を貴ぶが如くすと也。實を言へば此身も佛書に臭囊とあるが如く、肉身あるが爲めに、種種の難儀苦勞や、妻子親戚などの係累も生ずるものにて、左まで貴ぶに足らざる者なれども、衆人は此臭囊を何よりも大切に思ふが故に、ここは姑く衆人の上に就きて説きたる也。先づ此二句を提げて此章の綱領と爲し、以下其の條目を舉げて之を解く也。

何謂寵辱若驚。寵爲上、辱爲下。得之若驚、失之若驚。是謂寵辱若驚。

○王弼作何謂寵辱若驚。寵爲上、辱爲下。河上公作何謂寵辱辱辱爲下。非、今從陳景元、李道純本訂之。

【譯讀】何をか寵辱驚くが若くすと謂ふ。寵を上と爲し、辱を下となす。之を得れば驚くが若くし、之を失へば驚くが若くす。是を寵辱驚くが若くすと謂ふ。

【字解】○之 二つの之は皆寵を斥す。

【直解】第二節は前節の寵辱若驚の句を説明す、これ其の第一目、さて如何なる、是れを寵辱驚くが如くすといふかと言へば、すでに前節に述べた

るが如く、榮寵と屈辱との二者は、互に相倚り、寵あれば必ず辱あるは、浮世の習なるに、衆人は其の輕きこと浮雲の如き榮寵を貴び重んじて上と爲し、屈辱を忌み嫌ひて下と爲し、榮寵を得れば喜びて狂せんばかりに驚くが如くし、榮寵を失へば驚き悲みて失神せんばかり也。論語賈に鄙夫可與事君也、與哉、其未得之、患得之、既得之、患失之、之とあるも、其の意同じ。かくして未だ嘗て榮寵と屈辱との一體にして兩物にあらざる道理を悟らず、榮寵即ち爵祿權勢などの外物の欲の爲めに、終身其の心を動かし驚かすは、誠に憐むべき淺丈夫ならずや。これを寵辱驚くが如くすといふ也。

何謂貴大患若身。吾所以有大患者、爲吾有身。及吾無身、吾有何患。

○及吾無身、傳奕本、及作苟。○傳奕本、患下有乎字。

【譯讀】何をか大患を貴ぶこと身の若くすと謂ふ。吾が大患ある所以の者は、吾が身ありと爲せばなり、吾が身を無しとするに及びては、吾何の患かあらん。

○第七十五章、民之輕死、以其求生之厚、是以輕死。
○第六章、聖人後其身而身先、外其身而身存、○第四十四章、名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病。

○兩爲天下、傳奕本、下、故有者字。

【字義】○吾 衆人なり。○有身 其の身の奉養を忘るる能はざる義。
○無身 善く其の身の奉養を忘るるをいふ。
【直解】第一節の下句、貴大患若身を説明す、これ其の第二目。さて何をか人の大いなる憂患たる榮寵即ち爵祿權勢などを貴ぶこと己の身を貴ぶが如くするかと言へば、畢竟衆人が其の大患たる榮寵を貴ぶ所以は、吾が此身ありとして、其の衣食住などの奉養を十分に手厚くせんとするが爲め也。若し吾が此身を全くなきものとして、自ら厚く奉養を爲さんとする私心を棄て、心に一切の欲望を忘るるやうになれば、孔子が「蔬食ヲ飯ヒ水ヲ飲ミ、肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トス、樂モ亦其ノ中ニ在リ」論語とのたまひしが如く、道を樂むの心が、肉體の私欲にうち克つが故に、能く惡衣惡食に甘んずるを得、其の身に奉ずること極めて薄く、随つて多くの生活費を要することもなければ、吾何ぞ榮寵の如き憂患たる者を貴びて之を願ひ求むることあらんや。

故貴以身爲天下、則可寄於天下、愛以身爲天下、乃可

以託於天下。

【譯讀】故に身を以てするを貴びて天下を爲めば、則ち天下を寄すべし。身を以てするを愛みて天下を爲めば、乃ち以て天下を託すべし。

【字義】○貴 前の貴とは意やや異り、己の身を尊重して、天下を治むるに此身を以てする事を難んじ憚りて厭に思ふ義。○身 前の身とは異り、前の身は肉欲の奴隷たる形骸を斥す、かかる身は貴ぶに足らず。この身は眞身を斥す、儒にて聖身、佛にて佛身は皆眞身なり。○愛 惜なり。

【直解】此一節は榮寵の爲めに心を動かさざる達人にして、始めて天下の政を委託するに足ることを説く。さて前に述べたるが如く、衆人が榮寵即ち爵祿權勢などを貪りて厚く己の身を奉養せんとするは、大患を其の身に引き受くるに同じく、一寸考ふる時は、其の身を貴び重んずるが如くなれども、其の實は其の身を輕んずるものなり。若しかかる輩を任用して天下の政に參與せしめば、己が欲望を逞うせんが爲めに、種種不

○則可寄於天下、河上公、可下有以字、王弼、則作若寄下、無於字、傳奕本、作則可以託天下矣。○乃可以託於天下、傳奕本、作則可以寄天下矣。奕本、寄託二字、與諸本互異、王弼、乃作若。

正の行爲を敢てし、秕政百出、賄賂公行、官紀忽ち紊亂して、風俗頹壞するは勿論、其の身も亦踵をめぐらさずして敗亡するに至るべし、然るに達人は榮寵の如き外物の欲の爲めに心を動かさるる事なく、不義の富貴を視ること浮雲の如くにす、是れ眞に其の身を貴ぶ者なり、さて其の身を貴び重んじて、天下を治むる事に用ふるさへ、之を難んじ厭ひて何か物足らぬ如く思ふ人ならば、天下の政を委任しても、清廉潔白を旨とし、己の身に奉養せんが爲めに、邪曲を行ふが如き事は絶えてなく、官紀も振肅して決して閑達の生ずる筈なく、安心が出来るなり、又己の身を愛惜して天下を治むるに用ふるさへ、何か物足らぬ如く思ふ人ならば、推して天下の政を寄せ託しても、安心が出来る也と、二句同意義のことを折り返して言ひたるは、其の意味を強めんが爲めなり、論語伯泰に曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也とあると并せ考ふべき也、吳澄が、寧ろ天下ヲ有セザルモ、而カモ輕ロシク其ノ身ヲ用ヒズ、夫レ唯此ノ如シ、乃チ以テ寄託スルニ天下ヲ以テスベキ也、(中略)舜禹、天下ヲ有チテ而シテ與ラズ、唐虞ノ禪ヲ受クベキ所以

ナリ、彼ノ其ノ辱ヲ寵トシ以テ榮ト爲シ、其ノ大患ヲ貴ビ以テ大利ト爲ス者ハ、鄙夫ノミ、何ゾ之ニ付スルニ天下ヲ以テスベケンヤ、而シテ楊朱ガ爲ノニス我ノ學ハ、此ニ原モヅクと註せしは簡にして盡せりと謂ふべし、彼の爵祿權勢に戀戀として、百方焦慮、日夜腐心する、似非政治家たる者、豈猛省せざるべけんや。

○河上公以此
爲贊元章。
○沈曰此章論
道體。

視之不見章第十四 九十五言

【章旨】此章虛無の道は能く古今を統紀す、聖人之人に則りて無爲の政を爲すことを説く。

○視之不見。名曰夷。聽之不聞。名曰希。搏之不得。名曰微。此三者不可致詰。故混而爲一。

【譯讀】之を視れども見えす。名づけて夷と曰ふ。之を聽けども聞えす。名づけて希と曰ふ。之を搏ふれども得ず。名づけて微と曰ふ。此の三の者は、致詰すべからず。故に混じて而して一と爲る。

【字義】○之 道を斥していふ。○夷 平ラカなり、一樣平等にして少しも目立たぬ義。○希 聲の無くなるをいふ。第二十三章の希言自然。第四十一章の大音希聲。論語進の鼓瑟希の希皆同じ。○搏 執なり。○微 至りて細かなる稱。以上夷希微の三字はただ無の換へ字なり。○致詰 致は極なり、詰は問ひ究むる也。判然と問ひ究むる義。○混 同

なり。○一 無なり、玄なり、道なり、主宰なり。

【直解】第一節は道の無形をいふ。さて道はもご色相なきものなるを以て、之を審かに視れども見えす。故に假に名づけて夷といふ。夷とは漠然として平かに、少しも目立たぬをいふ。又道は聲音なきものなるを以て、之を審かに聽けども聞くことを得ず。故に假に名づけて希といふ。希とは無なり、聲の絶えて無きをいふ。又道は形象なきものなるを以て、之を執へんとすれども、執ふること能はず。故に假に名づけて微といふ。微とは至りてかすかにして、とりとめ難きをいふ。以上夷希微の三つの者は、道體を強ひて形容して、三つに分けて言ひたるなれども、其の玄妙にして測るべからざる理に至りては、到底確と問ひ究むること能はざる也。要するに道はもと虚無なる者なれば、此の如く局部局部に分ちて詮議すべき者にあらず。故に混同して皆一即ち無となるのみ、無は又換言すれば玄といふ。首章に玄之又玄、衆妙之門とあるは是れ也。

○其上不皦。其下不昧。繩繩兮不可名。復歸於無物。是謂

○其上不皦、作一者其上之不皦、皦一本從日

○第五十三章、大道甚夷而民好徑。○第三十五章、道之出口、淡乎其無味、視之不足見、聽之不足聞、用之不可既。

無狀之狀、無象之象、是謂惚恍。

作、噉、非、其、下、不、
味、矣、本、下、下、有、
之、字、繩、繩、兮、繩、
本、無、兮、字、
○惚恍、矣、本、作、
勞、芒、

【譯讀】 其の上にして噉かならず。其の下にして味からず。繩繩兮として名づくべからず。無物に復歸す。是を無狀の狀、無象の象と謂ふ。是を惚恍と謂ふ。

【字義】 ○其 道を斥していふ。 ○其上、其下 上下は猶ほ俯仰と曰ふが如し。 ○噉 明なり。 ○味 暗なり。 ○繩繩 連続して絶えざる貌。 詩經、周南、斯、宜爾、子孫、繩繩兮とあるに同じ。 ○狀象 狀とは形ありて目に見、手に取るを得る者をいひ、象とは光、熱、電氣の如く氣ありて感すべき者をいふ。解老に曰く、人ノ意想スル所以ノ者ハ、皆之ヲ象ト謂フと。 ○惚恍 有るが如く無きが如く定め難き義、髣髴タサモといふに同じ。河上公本、忽恍に作る。

【直解】 第二節、道の有るが如く、無きが如きをいふ。さて道は虚無なりといふと雖も、全く存在せずといふにはあらず。勿論古今に互らて實在すれども、形象の言説すべからざるのみ。凡そ物の高く上に在るもの例へば

○第十六章、夫
物芸芸、各歸其
根。

日月星辰若くは山嶽の如きは、明かに見え易く、卑く下に在るもの例へば、溪谷の如きは樹木などに蔽はれて暗くして見え難き者なり。然るに道は六合に彌りて如何なる處にても、徧く満たざることなれども、只其の形象の把握すべきなきが故に、仰いで之を觀れども、明かにこれぞ道なりと認むるを得ず。又俯して何程卑き處に就きて之を察するも、別に暗しといふことも無き也。此の如く道は空間的に上下四方に徧く満ちて居るのみならず、時間的にも無始無終にして繩繩として永久に連續して絶ゆることなく、常に萬物を生生化化して盡くる期なし。其の作用の誠に靈妙にして測り知るべからざるは、何と名づけて形容すべきか。殆ど名狀すべきやうもなし。唯宇宙間に物ありて萬物を生生化化すること、これを主宰するやうに思はるれども、別にこれぞと把握すべきものもなく、つまり何物も無しといふことは復歸する也。これを狀なきの狀、象なきの象といふ。即ち道は無形無象なれども、古今に互りて萬物を生生化化する靈妙なる作用に就きて論ずる時は、形象あるかの如く思はる。故に是を無狀之狀、無象之象といふ也。右の如く道の體たる、實に玄

妙不可思議にして形象が無きかと思へば有るが如く、形象が有るかと思へば無し。つまり有とも無とも何とも言はれぬ也。故に、又是を惚恍といふ。惚は無なり、恍は有なり、即ち有るが如く、無きが如く、髣髴として明かならざるをいふ。第二十一章に道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍、其中有象、恍兮惚、其中有物とあると并せ考ふべき也。

○迎^{ヘテ}之^ヲ不^レ見^ル其^ノ首^ヲ隨^{ヒテ}之^ヲ不^レ見^ル其^ノ後^ヲ執^{リテ}古^ノ之^ノ道^ヲ以^テ御^ス今^ノ之^ノ有^ヲ能^ク知^ル古^ノ始^ヲ是^レ謂^フ道^ノ紀^{ナリ}。

○以御今之有、
奕本以上有可
字。
○能知古始、河
上能作以。

【譯讀】之^ヲ迎^ムへて其^ノ首^ヲを見^ス、之^ヲ隨^ヒて其^ノ後^ヲを見^ス、古^ノの道^ヲを執^リて以^テ今^ノの有^ヲを御^ス。能^ク古^ノ始^ヲを知る。是^レを道^ノ紀^ト謂^フ。

【字義】○執 持するなり。○古之道 萬物の由りて生ずる虚無の大道なり。○御 猶ほ治といふが如し。○今之有 有は形あるもの、即ち萬有をいふ。○古始 道は天地に先だちて生じ、最も古くして萬物の始たる義にて無をいふ、首章に無名、天地之始とあるに同じ。○道紀 紀は法なり、大道の紀綱なり。

【直解】第三節、虚無の道が能く古今を統紀するをいふ。迎之隨之の二句は、前節の惚恍といへるを解する也。さて道は之を迎へて其の首即ち始を見んとすれども見えず、何となれば道は天地に先だちて生じ、始なきものなれば也。又之に隨ひ見送りて其の後即ち終を見んとすれども見えず。何となれば道は第六章に谷神不死とあるが如く、萬古に互りて終なきものなれば也。實に道は此の如く、無始無終にして形象こそ見えね、天地開闢以前より存在して萬物を生生化化し、未來永劫少しも變ることなきもの也。豈玄妙の至ならずや。是を惚恍と謂はずして將何とか言はん。そこで聖人は其の玄妙なる古の道即ち虚無自然の大道を執り守りて、其の身に體し、以て今日の繁雜なる萬有即ち人間を始めとして森森擾擾たる天地間の萬物を治めたまふ。故に民も自ら無爲の化に沐浴して、互に智巧を競ひて相争ふこともなく、世は太平に治まるを得る也。此の如く能く古始の大道、即ち虚無自然の道を知るをば、之を道の紀綱を得たりと謂ふ也。第十章の抱、一また專氣致柔などの目は、皆この道紀の疏解と爲して觀るべき也。

○河上公、以此爲顯德章。
○沈曰、此章言有道氣象。

○爲士者、奕本、士作道、微妙、畢、沉曰、妙亦當作、眇。
○爲之容、奕本、容下有曰字、豫、今本、或作與、古、字通。
○豫兮、猶兮、陸、希聲、並無兮。
○儼兮、其若、客、奕本、作儼若、客、碑本、客作容、非、○渾兮、若、冰、之、將、釋、奕本、作、渾、若、冰、將、釋、奕本、作、渾、兮、同。

古之善爲士章第十五 九十七言

【章旨】此章道を得たる古の善士の玄妙にして測り識るべからず、而して能く物を清くし物を生ずるの功を成すことを説く。

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。夫惟不可識、故強爲之容。豫兮若冬涉川、猶兮若畏四鄰。儼兮其若客、渙兮若冰之將釋、敦兮其若樸、曠兮其若谷、渾兮其若濁。

【譯讀】古の善く士たる者は、微妙玄通にして、深くして識るべからず。夫れ惟識るべからず、故に強ひて之が容を爲す。豫兮として冬川を渉るが若く、猶兮として四鄰を畏るるが若く、儼兮として其れ客の若く、渙兮として氷の將に釋けんとするが若く、敦兮として其れ樸の若く、曠兮として其れ谷の如く、渾兮として其れ濁るが若し。

【字義】○古之善爲士者 冒頭に古とあるは今の然らざるを見はす也、士

は學を爲し身を修めたる人をいふ。○微 顯の反對にて微細なり。○妙 もと眇に作る、微よりも更に小なるをいふ。○玄 深遠にして測られざるをいふ。○通 塞の反對にて何事にも能く通達するをいふ。○豫猶 豫は一に與に作る、象の屬にて歩行すること遲遅たるものなり、猶は犬の屬にて人に先だちて行けども、聞もなく後を顧みて引き返して來る、其の人と相失はんことを畏るる也、よりてためらひて逡巡サリシして進まざるを猶豫といふ、こは其の二字を分ちて用ひたる也。○儼 おごそか、容貌をきちんと整へて居る貌、曲禮の儼若思の鄭註に「儼ハ矜莊ツツシムノ貌」とある是れ也。○渙 物の離れ散るをいふ、易の序卦に渙者離也とある是れなり。○敦 あつしと訓す、厚なり。○樸 あら木なり、山から伐り出したるままにて未だ斲らざる木なり、生得の儘にて飾なきをいふ。一本に朴に作る、同じ。○曠 空なり、其の量の空しく廣きをいふ。○渾 一本混に作る、濁る貌、即ち混同して分別を爲さざる義、第四十九章の爲天下、渾心の渾に同じ。

【直解】第一節、古の有道の善士の才徳を形容す、さて今の所謂士は、己の才

能の人に知られざるを患ひて、つとめて邊幅を修め、外貌を飾り、汲汲として名利を求めんと腐心すれども、古の虚無自然の道を修めて、善く士たる者は、之と異り、其の道徳は如何にも微妙にして奥床しく、其の才識は如何にも玄通にして測るべからず、此の如く道徳才識の微妙玄通なること、至りて深くして到底外より測り識るべからざる者なり。それ唯才徳の至りて深くして測り識るべからざれば、十分に之を言葉に表はして説明することは不可能なれども、強ひて之が形容を爲して其の髣髴たる有様にても見はすより外なし。以下に其の形容の辭を敍す。さて衆人は言を出し、事を行ふに當りて、兔角性急にして躁進する者なれども、古の善士は然らず、何事を爲すにも扣目にして前を瞻後を慮り、容易に言を出したり、手を下したりすることなきは、譬へば冬の日に川を徒渉する者が、其の寒さの厳しきが爲めに、躊躇ひて進み兼ねたるが如きに似たりと、即ち古の善士が躁進を戒め、恬退を悦ぶこと此の如き者ある也。また衆人は何事を爲すにも輕舉妄動する病あれども、古の善士は然らず、事を行ふに當りては、小心翼翼として恐懼戒慎し、容易に之を決

○第十九章、見素抱樸。第二十章、常徳乃足。復歸於樸。第三十七章、無名之樸、亦將不欲。

行せざること、譬へば四方の鄰國に敵を有する者が、其の虚に乗せられんことを畏れて、輕輕しく進み出でざるが如くす也。また衆人は心に縮りがなく、放肆にして惰けたる容貌ある者なるが、古の善士は然らず、其の態度儼然として常に恭敬の心を持つること、譬へば賓客の前に在るが如く、未だ嘗て懈怠の容なき也。論語淵に子曰、出門如見大賓、トあるも、其の意は同じ。また儼恪にして敬ひ慎む時は、免角凝りかたまりて融通の利かざる者なるが、古の善士は然らず、時ありて心が能くうち融け和ぐ所あるは、譬へば堅き氷が春の陽氣に順ひて自ら離散して泮けかからんとするが如き者あり。是れ心に敬を持つれども、常に和融にして固滞ならず、執拗ならず、能く世と推し移り、衆人の好惡に任せて、少しも忤ふ所なきを以て也。また其の心は如何にも手厚く親切にして、生得の本性を失はず、一點の飾もなき質朴なる有様は、譬へば未だ細工を加へざる山出しのままのあら木の如き者ある也。また古の善士は邪知私欲なくして、其の度量は如何にも宏大にして虚しく且つ豁く、能く何物をも包容する所あるは、猶ほ彼の大いなる谷の山から落ちて來る、土石に

ても竹木にても、すべて何物にても擇ばずして之を受け容るるが如き者ある也。また古の善士は、渾分とて物を混同して細かに區別を立つることを爲さず、垢を含み光を藏して、自ら潔白を見はさず、當時の風俗習慣に順ひて、敢て崖異の行を爲さず、愚者と交れば己も亦愚なるが如くにして居る有様は、宛も水の濁れるが如しと也。蓋し水が濁る時は、明かに光が映らず、其の中なる物の區別が判然と見えざれば也。此一句は第四章の和其光、同其塵と同じ意なり。

孰能濁以靜之徐清孰能安以久之徐生保此道者不欲盈夫惟不盈是以能敝不新成。

【譯讀】孰か能く濁りて以て之を靜かにして徐に清くせん。孰か能く安んじて以て之を久うして徐に生せしめん。此道を保つ者は、盈つることを欲せず。夫れ惟だ盈たず、是を以て能く敝れて新に成さず。

【字義】○孰能 庶幾ガフヘネの辭、よびかけて出來難き事を願ふ義。○徐 漸なり、そろそろの義。○濁 昭昭キララとして賢きふりをせざる也。

○孰能濁以靜之徐清、濁以激靜之徐清、陳景元作孰能濁以激靜之徐清、本、作孰能濁以激靜之而徐清、以下有止字、奕之徐清河上本、

新成、河上主彌作、故能蔽不新成、蔽乃蔽之假字、唐景龍碑作、弊亦蔽之假字。

○安 靜かにおちつきて居る義。○保此道者 即ち古之善爲士者を斥す、保は持守なり、此道は虚無の道なり。○生 發生なり。○不欲盈 虚なるを貴ぶなり、第九章に持而盈之、不如其已とあるに同じ。○能

敝 能は耐と通ず、禮記運の故聖人耐、以天下爲一家の鄭註に耐、古能字とあり、漢書傳錯に胡貉之地、積陰之處也、其人密理、其性能寒とあるは、以て證とすべし、敝は弊に同じ、古びたる義。

【直解】さて水の濁りて物の區別の判然と見えざるが如く、世俗と混同して少しも賢ぶらず、靜かに心を落ち著けて居れども、全く濁に染みて仕舞ひたるにあらざれば、漸くに復自然の本性たる清き心に歸ることを得る也。此の如き事は、なかなか困難なる事なるが、誰が之を能くするであらうぞ。また心を安靜にして、永く其の止まるべき所に止まりて居れども、もご枯木死灰の如く、全く活氣を失ひたるにあらざれば、一旦動き、て外物に接する時は、漸くに發生即ち發動して物に應ずる働を爲すことを得る也。荀子勳に能、定然後能、應とあるも同じ。此の如き事は、なかなか困難なる事なるが、誰が之を能くするであらうぞ。古の善士ならでは、

○第九章、持而盈之、不如其已

到底爲すこと能はざる也。以上兩句は濁中に清あり、動中に靜あることを説く。前の孰能は前節の濁の字を承けて問を設け、後の孰能は又靜の字に因りて問を設けたる也。さてこの虛無自然の道を保ち守りて失はざる者は、彼の富貴權勢等一切の事を十分に満たすことを好まず、すべて事を行ふに人の先に立つことを爲さず、萬事扣目にして七八分目位にして止め置く也。それ唯十分に満たすことを好まざればこそ、また虧損するといふこともなきなれ。すでに虧損することなければ、天地開闢以前より今日に至るまで、千年萬年の久しきを経ることも猶ほ一日の如く、少しも變ることなく、其の古びたる儘に存在し、更に新規に拵へ直すことを要せざる也。これ即ち首章に謂ふ所の古今に互りて易らざる常道なれば也。

○河上公、以此爲歸根章。

○致、坊本、或作至、非、守、靜、奕、本、靜、作、靖、通。
○吾、以、觀、其、復、彌、本、無、其、守、河、上、公、以、下、有、是、字。

致虛極章第十六 六十七言

【章旨】 此章、道の本體は虛無恬淡なるものなれば、王者はそれを身に體し、私欲を去り、虛靜を主として、天下を治むべき旨を説く。

致^{スコト}虛^ヤ極^ル、守^レ靜^ヲ篤^シ、萬物^並作^リ、吾^以觀^ル其^復。

【譯讀】 虛を致すこと極まれば、靜を守ること篤し、萬物並び作りて、吾以て其の復を觀る。

【字義】 ○致、虛 致は十分に推し極むる義、第十章の致柔、また大學の致知格物の致皆同じ、開元疏に「致トハ必ズ自ラ來ラシムルコト、春秋ニ致師トアル致ノ如シ」と。虚は實の反對にして心が虚しくして、妄念雜慮なき也、蘇註に「虚ヲ致スコト極マラザレバ、則チ有未ダ亡ビザル也」とあり。
○守、靜 靜は動の反對にして心が安靜にして動き躁ぐことなき也、蘇註に「靜ヲ守ルコト篤カラザレバ、則チ動未ダ亡ビザル也」とあり。
○並 物の動きて生ずる義、第三十七章に萬物將自化、化而欲作の作に同

じ。○復 道の本體たる無に復歸する義第十四章に復歸於無物第二
十八章に復歸於嬰兒また復歸於樸とあるに同じ。

【直解】第一節一章の大意を説く。さて心に私知私欲ある時は、妄念雜慮紛
紛として起り、道の本體たる虚無の理を體得すること能はざる者なり。
さればつとめて其の私知私欲を除き去り、妄念雜慮を一掃し、十分に虚
無を致して其の極度に達すれば、外物の欲の爲めに心を動かさるる患
なし。心すでに虚無を致し極めて、一點の妄念雜慮の起ることなければ、
静寂を守ること篤く固くして、如何なる誘惑にも動かさるることなき
やうに至るを得る也。莊子道天に心虚則静ナレバチカナリとあるも同じ。然るにたとひ虚
無を致すとも、其の極に達せざる間は、尙ほ未だ心の中に幾分の有ある
を免れず、静寂を守るも篤く固きこと能はざれば、尙ほ未だ心の中に幾
分の動あるを免れざる也。さて天地間に有りと有らゆる萬物は、竝に皆
自然の氣を享けて形を成し、古今に互り生生して已まざれども、終には
本の無に復歸せざる者とはなし。例へば春夏に榮ゆる草木も、秋冬に
至れば多くは枯れ萎みて虚無に歸する也。又清の康熙帝が曰ひしが如

○第三章、不見
可欲、使民心不
亂、第四十五章、
清静爲天下正、
第五十七章、我
好静而民自正。

く、實にや天地は一大劇場にして、日月は燈、江海は油、雷霆は鼓板、堯舜は
善玉、王莽、曹操は惡玉に喩へつべし。古今來、無數の聖賢豪傑、忠臣節婦、姦
臣劇賊など、許多の脚色も一場の舞臺が換れば、忽ち消えて本の無に歸
せざるは無き也。かく萬物が悉く皆、無より生じて有となり、再び本の無
に復歸する有様を仔細に觀察すれば、心を虚靈にして、些の私欲をも存
せず、性の本體たる虚無に復すべきを知るに至るべし。さて致虚守静、
物の復するを觀るといふこと、例へば漢の文帝の時、千里の馬を獻する
者あり、帝之を無用の物なりとして受けたまはず、是より物を獻じて上
に媚を求むること止みたり。虎圈の齋夫が辯舌を逞うして帝の意を迎
へ、其の能を觀さんせし、之を賞したまはず、是より上に取り入る者
跡を絶てり。吳王濞、謀反の志ありて、入朝せざるを咎めず、却つて几杖を
賜ひたる故に、謀反自ら止みたり。張武が賄賂を受けしことを咎めず、却
つて金錢を賜ひたれば、百官の賄賂を受くること、自ら止みたり。是等の
事、賞すべくして必ずしも賞せず、罰すべくして必ずしも罰せず、唯虚静
にして人の心を静めたる也。是れ文帝の老子を好みたまひし效驗也。こ

の虚静観復の理は、獨り人君のみに限らず、廣く衆人の上にも日日に行はるる也。例へば茲に醉狂人ありて、我に種種の無禮を加ふることありとも、我より相手にならざれば、自然と大人しくなりて静まる也。若し醉狂人を相手として争論せば、次節に所謂不知常、妄作凶といふもの也。是は凡人と雖も心付くこと也。而るに達人より觀れば、世間滔滔たる有爲の似非賢者は、皆醉狂人の徒なり、我心を動かして相手となるは、愚の至と謂ふべき也。

夫物芸芸各歸其根。歸根曰静。静曰復命。復命曰常。知常曰明。不知常、妄作凶。知常容。容乃公。公乃王。王乃天。天乃道。道乃久。没身不殆。

【譯讀】 夫れ物の芸芸たる各其の根に歸る。根に歸るを静と曰ひ、静を復命と曰ひ、復命を常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。常を知らざれば、妄作して凶なり。常を知らば容る。容るれば乃ち公なり。公なれば乃ち王なり。王なれば乃ち天なり。天なれば乃ち道なり。道なれば乃ち久し。身を没するまゝで殆からず。

○各歸其根、河上王弼、各下有復字。靜曰、弼本作是謂。

【字義】 ○芸芸 草木の茂りて盛んなる貌。物の繁く多きをいふ。 ○歸其根 草木を借りていひたるなれども、廣く萬物が其の本に復歸する義とす。 ○命 性命即ち自然の天性をいふ。樂記に、人生而静、天之性也。感於物而動、性之欲也。好惡無節、於内、知誘於外、不能反躬、天理滅矣とあり。

○常 古今に互りていつも易らざる義。 ○公乃王 書經洪範に、無偏無黨、王道蕩蕩とあると同意。

【直解】 第二節、萬物の動作するより、天と一と爲るに至る順序を説く。さて前節にも述べたるが如く、萬物が並び作ること、芸芸と繁く盛んなれども、必ず各、其の本根の無に歸する者なり。例へば草木の類も、春夏の候は、生氣盛んに動きて、根より幹、幹より枝葉に傳はり、美しくしき花も開き、芸芸として茂く盛んなる勢あれども、秋冬肅殺の氣に遭ふに及びてや、生氣は再び根に復りて、花も謝し、葉も落つるに至る。人生も亦之と同じく、少壯の時代は、血氣最も盛んにして、私欲妄念紛然として起り、其の欲情

○第六章、玄牝之門、是謂天地之根。

の制止し難きこと、春夏の候、草木の芸芸として盛んに茂るが如きものありと雖も、年漸く老い血氣已に衰へ、一旦自然の天理に復する時は、私欲妄念も次第に其の跡を絶つに至り、心が本の虚無に復ること、宛も秋冬の候に及びて、草木の生氣が其の根に歸するが如き也。すでに心が根本の虚無に復る時は、絶えて心に私欲妄念の動きて生ずることなし。もと私欲妄念の爲めに心の動くは、一時の迷なり。樂記に人生而靜天之性也、感於物而動、性之欲也とあるが如く、人の天性はもと靜かなる者なり、すでに私欲が全く盡きて妄念の動くなければ、即ち天性の靜に復りたる也。故に歸根曰靜といふ也。その靜を全うするを天命に復歸すといふ也。命とは中庸に天命之謂性といひ、易卦説にも窮理盡性、以至於命とあるが如く、命と性とはもと同一の者にして、只其の觀方によりて名を異にするのみ。即ち命とは天理流通して萬物を生じ、それに五行の性を與ふるをいひ、性とは萬物が其の天命を享け得たる上よりいふの名なり。故に萬物が皆根本の虚無に歸し、天性の靜を全うすれば、やがてその大本たる天命に復ることを得る也。すでに天命に復ることを得れば、恆久

○第三十七章、
不欲以靜、天下
將自正。

易ることなき常の道を得る也、すでに常の道を知れば、心湛然として靜かに、物欲に誘はれて動くことなき也。以て審かに萬物の變化する理を觀察することを得、故に明といふ。若し常を知らざる時は、外物の爲めに心を動かすが故に、理を見ることが明かならず、其の行ふ所は道に背きて正しきことを得ず、之を妄に動作すといふ。妄に動作する時は、必ず禍凶を招くに至る。荀子論天にも倍道而妄行、則天不能使之吉とあり、倍は背なり、亦妄作して凶を招くの意をいふ也。之に反して能く常の道を知りて靜を守れば、則ち天地萬物の一體たるを知るが故に、人が如何なる事を仕向けても、之を寛容して少しも争ひ拒むことなく、好惡忌克の念全く除き去りて、廣く萬物を包容し、其の胸中綽綽として餘裕ある也。すでに廣く萬物を包容すれば、其の心に物我の隔なく、親疎の別なく、偏黨する所なく、自然に公平無私となる也。すでに公平無私にして萬物を包容すれば、萬物各、其の所を得て、天下皆悦びて此人でなければならぬと、東西南北より歸往するを以て、乃ち王者たるを得る也。王者は天に法りて民を治むる者なれば、すでに王者たるを得ば、天の廣大にして覆はざる

○第二十五章、道大、天大、地大、王亦大。

所なきと同じき也。すでに天の廣大なると同じければ、即ち道を其の身に具へ得たる也。すでに道を其の身に具へ得たる時は、道は天地萬物を生生化化する大本にして、恆久易ることなきものなれば、身を終るまで安泰にして、決して危殆の禍に罹る患なき也。容といひ公といひ王といひ天といひ道といひ久といふが如く、層層疊み掛けて説きたれども、別に深き差別あるにあらず。ただ反復して道の本體たる虚靜の妙用を賛歎したるなり。老莊の文章には此種の筆致多し。

太上章第十七 四十四言

○河上公、以此爲淳風章。○沈曰、此章論至治。

【章旨】 此章は老子世道の日に衰へ、欺偽の日に生ずるを歎き、太上至徳の治を想望する也。

太上下知有之。其次親之。其次畏之。其次侮之。

【譯讀】 太上は下之あることを知るのみ。其の次は之を親み之を譽む。其の次は之を畏る。其の次は之を侮る。

【字義】 ○太上 猶ほ最上と言ふが如し、左傳僖公二に太上以德撫民、其次親親相及、また襄公二に太上有立德、其次有立功、其次有立言とあるは皆同じ。林希逸が太古の世と註せしは非なり。○之 五の之字は皆人君を指していふ。

【直解】 第一節、人君に四等の別あることを説く。さて最上至極の徳を具へたる人君は、すでに第二章に處無爲之事、行不言之教とあるが如く、天下を治むるに無爲の道を以てし、不言の教を以て萬民を善導するが故に、

○其次親之譽之、河上弼並作其次親而譽之、奕本譽上多其次二字。○其次畏之、其次侮之、陳象古作其次畏而侮之、明皇陸希聲並作其次畏之侮之。

其の治め方は自然に任せて、少しも目立ちたる跡なし。されば下民は唯上に人君あること丈を知りて居るのみにて、其の人君が如何なる政を行ひて、己等を治めたまふか、又己等は如何なる人君の恩恵を被りつつあるかを感じ知ることなき也。其の有様は猶ほ天の運行暫くも休むことなく、春夏秋冬の四時、其の序を錯らずして、能く萬物を生育すれども、萬物は天の御蔭に頼りて生育することを知らざるが如し。堯の時、民鼓腹の樂を享けながら、人君の恩恵の難有を知らず、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力何有於我哉。逸士と歌へるが如きは以て證と爲すべき也。最上の徳ある人君は天下を治むるに無爲の化を以てし、民は知らず識らず其の徳化を被り、上に人君の在ることを知るのみなること、前述の如くなれども、其の次等の人君に至りては無爲の道を以て天下を治むること能はず、仁恵を施して萬民を懐けたまふ、故に萬民は其の君に懐き親みて、其の功德を稱賛する也。夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王の如きは是れ也。これ必ずしも不可なりといふにあらざれども、最上の君の渾然として跡なき無爲自然の化には及ばざること遠き也。又更に降りて其の次の人君に至りては、仁恵を以て民を懐くること能はず、刑罰法禁を設けて、民の惡を懲し、威力を以て天下を治む、故に君臣上下の隔、嚴重となりて、民は其の君を畏るるに至る也。五霸の君の如きは是れなり。又更に降りて其の次の人君に至りては、刑罰法禁を以て民を制御すること能はず、徒に權謀術數を以て民を治むるを以て、人君の威力は下に行はれず、民は但に其の君を畏れざるのみならず、却つて之を侮り蔑にし、刑罰を畏れずして法禁を犯し、天下は益、亂るるに至る。春秋戰國時代の君の如きは是れなり。

故信不足焉、有不信。

○故信不足焉、有不信、彌作信不足焉、有不信、焉、陸希聲、作信不足、有不信焉。

【譯讀】 故に信足らざれば、信せざることあり。

【字義】 ○信 上の信は人君の信、下の信は人民の信を斥す。

【直解】 第二節、太上を除きて其次以下の人君と人民との關係に就きて説く、さて最上の人君は不言の教を行ひ、口に出して言はざれども、人民は自然に之を信仰して、無爲の化が行はるれども、其の次等以下二等三等

○次章、大道廢而有仁義。

の人君に至りては、人君の誠信足らず、己の徳を以て民を化すること能はず、故に民を懐けんが爲めに故らに仁惠を施し、或は刑罰法禁を設け、威力を以て天下を治めんとするが故に、民は益之を信せず、或は親み、或は畏れ、甚だしきに至りては之を侮り蔑にするに至る。之を要するに、人君の誠信足らざるが故に、民は之を信仰せざる也。論語顔にも民無信不立とあり、并せて考ふべき也。禮記下禮弓に般人作誓、民始畔、周人作會、民始疑とあるも、畢竟誠信の足らざるに由りて誓を爲し、又は會合して約束を爲す也。

猶兮其貴言。功成事遂、百姓皆曰我自然。

○猶兮其貴言、猶、彌本、作悠、陸希聲、無兮字、奕本、言下有哉字、○皆曰彌本、曰作謂。

【譯讀】 猶兮として其れ言を貴ぶ。功成り事遂げ、百姓皆我が自然と曰ふ。

【字義】 ○猶兮 猶豫の義、ためらひて容易に言を發せざる貌。 ○貴言 貴は寶重する也、其の言を寶重して輕易に口より出ださざる也。

【直解】 第三節、最上の人君の不言の教化を説く。さて最上の人君は虚無自然の道を以て天下を治めたまふが故に、無爲の事を行ひ、不言の教を施

し、常に言を發することを貴び重んじ、ためらひて容易に號令を出すことなけれども、民は自然に其の徳化を被り、士農工商各其の職に安んじ、其の業を樂み、家家給し、人人足り、至治の功成り事遂げて後も、民は人君の御蔭に由ることを知らず。帝力我に於て何か有らんや、皆我が自治に由りて此の如くなるを得たる也と思はしむるは、真に太平の極致といふべき也。論語公衛靈に子曰、無爲而治者、其舜與、また易繫辭に黃帝堯舜垂衣裳、而天下治とあるも、其の歸する所は同じき也。この無爲不言の化が行はれざるやうになりては、屢、教令を降したり、故らに惠政を施したりして、民を懐けんとすれども、民の私知私欲は次第に増長して、世は益、澆滓となるのみ也。殊に輔弼の臣、其の人を得ざる王者の惠政は、天の萬物を覆轉フオホして外なきが如く、一視同仁なること能はず、譬へば茲に地震、洪水等の天災ありて、其の慘害目も當てられぬ程なりとせんに、王者が忽ち惻隱の心を動かし、親しく現場を巡視して、民の疾苦を慰問せらるるは、誠に難有ことなれども、かかる天災は、何時も輦轂の下、若くは其の附近に限りて起る者にあらざれば、王跡の及ばざる邊土の被害者は、

之に對して如何の感を抱くならんか。昔鄭國の宰相の子産が漆洧といふ川の邊を過ぎし時、寒中に川を徒渉する人あるを見て、不惑に思ひ、自分の乗れる車に乗せて對岸へ渡してやれり。孟子之を評して何故に橋を架けて萬民を渡してやらざるぞ。子産の如きは惠而不知爲政、それ政を爲す者は、人毎に之を悦ばしめんとすれば、日も亦足らず。孟子離婁下

【辨正】太上下知有之の句、吳澄本に下を不に作り、不知有之と爲し、無爲に相忘れ、民其上あるを知らずと解し、焦弱侯亦之に従ふ。然れども戰國以來、皆下に作ることに今本と同じ。吳本妄意不に作るは非なり。

○河上公、以此爲俗薄章。

○河上、王弼廢下、出下、並有焉字。
○智慧、河上作智惠、弼作知慧、知與智同、惠與慧通。
○孝慈、永樂大典、作孝子、忠臣、奕本忠作貞。

大道廢章第十八 二十六言

【章旨】此章は前章を承けて大道の行はるる無爲の世には、仁義忠孝などの名目はなき也。仁義などの名目の生じたるは、世の降り道の廢れたる結果なれば、かかる名目のなかりし至治の世こそ慕はしけれといふ意を述べ。

大道廢有仁義。智慧出有大偽。六親不和。有孝慈。國家昏亂有忠臣。

【譯讀】大道廢して仁義あり。智慧出でて大偽あり。六親和せずして孝慈あり。國家昏亂して忠臣あり。

【字義】○大道 天地自然の虛無の道をいふ。○六親 父子兄弟夫婦なり。一説に呂覽の六戚に同じく父母兄弟妻子をいふ。○孝慈 孝子と慈父となり。一説に慈は慈孫なり。

【直解】前章に述べたるが如く、太古最上至徳の君が上に在りて、無爲の政

を行ひ、不言の教を施したる時代は、虚無自然の大道が隆んに世に行はれたれば、民の風俗も純朴敦厚にして、人人無私無欲にして、自然の分に安んじられたれば、仁を以て恵むべき窮民もなく、義を以て正すべき悪人もなかりき。されば仁義などといふ名目を唱へて、喧しく言ふことも絶えて無かりしが、世降り俗衰へ、虚無の大道漸く廢れて、人人無爲自然に安んずること能はず、純朴敦厚の風俗も、次第に薄らぎ行くに及びては、人手前勝手を爲すやうになり、随つて窮民も漸く多くなり、悪人も亦少からず、是に於てか始めて仁義などの名目を立てて民を教へ導き、それを以て天下を治むるやうに至れり。されば仁義の名目の出来たるは、世が降り風俗が澆淳となりし結果にして、實は已むことを得ざるに出でたる也。澤庵禪師の解に「譬へばズント中好き夫婦の中にて云はば、何ともなく、何ともせずして日を暮らし、年を過す、是れが上なり。閒には何ぞイタハリ事を云ひ、イタイケなる事を云ふは仁なり。夫れは早や其の次なり。又其の次は始末をよくせよ、不作法などするとただは置かぬぞなど」と義を以て導くは是れ下なり。彼のズント好きと云ふは、左様の事は

何も無く日月を暮らすなり、恰も其のやうな心なり」といへるは能く近く譬を取りて面白し。なほ此一句は第三十八章に、失道而後徳、失徳而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者忠信之薄、而亂之首也とあると、并せて考ふべき也。日出でて働き、日入りて息ひ、渴して飲み、饑ゑて食ひ、寒くして衣を重ね、熱かにして脱ぐ。此の如く自然のままに任せて、安らかに世を渡る、太古無爲の時代に在りては、人人皆生得のままにて、無私無欲なれば、小さがしき智慧を働かす必用もなく、随つて虚言偽といふことも無かりし也。然るに世降りて純朴の風、漸く薄らぐに及びてや、上たる者、無爲の大道に由りて民を化すること能はず、是に於てか色色の智慧術數を出して下を治めんとし、種種の法令などを設けて、取締を嚴にするやうになり、民も亦之に習ひて小智小慧を弄びて、法令に觸れざるやうにつとめ、遂には大いなる詐偽の行を爲すに至る也。例へば未だ文字のなかりし太古は、結繩の政として、繩を結びて大小の符信とせしが、文字の出来てより、證券といふ者起り、其の後、人智益、開け、詐偽の行愈多くなるに及びて、證券の書式も益、複雑嚴密となり、今日にては、やれ擔保、やれ保

證人、やれ印紙、やれ印鑑證明、やれ登記、やれ公正證書などと、殆ど其の煩に耐へざるが如き手数を要すれども、詐偽の行は年年に増加すと聞く、小智小慧の恃むに足らざるを知るべき也。一家六親能く和睦し、絶えて波風の起ることなければ、孝子慈父ありと雖も、孝慈の名は見はれざる也。古より舜を大孝といふは、其の父母が殘忍酷薄の惡人なりしに由りて、善く之に事へたる舜の孝道が目立ちて世間に知られたる也。又孔門にて、閔子騫の孝を稱するも、彼が繼母の虐待に遇ひたれば也。又無頼の惡子ありて、始めて之を感化善導せんが爲めに、百方苦心する父の慈も見はるる也。之を要するに六親が和らぐすして始めて孝慈の名ある也。更に之を大きく言へば、國家が善く治まりて太平無事なれば、忠臣なきにあらざれども、いづれを忠臣と見分くべきなし。然るに國家が昏く亂れ、或は逆賊の反を謀るあり、或は姦臣の權を専らにするに及び、身を挺んでて國家の爲めに盡さんとする忠臣が見はれ出る也。例へば夏の桀王を諫めて殺されたる龍逢や、殷の紂王を諫めて殺されたる比干を忠臣と稱するは、桀紂の如き暴君を戴ける昏亂の世に生れ逢ひたれば也。

○論語「子罕」子曰、歲寒然後知松栢之後凋也。唐書「蕭瑀傳」疾風知勁草、板蕩識誠臣。

若し唐の天寶の亂なくば、張巡、許遠の忠節も見はれず、我が元弘の亂なくば、楠正成も金剛山下の一農夫として終りしならん。之を要するに仁義忠孝の如き名教の立つ所以は、無爲自然の大道の廢れたるに由るなれば、名教の立たざる以前の至治の世に復りたしといふが、老子の理想とする所なり。

○河上公、以此爲還淳章。
○沈曰、此章貴反質。

○棄智、奕本、智作知、通。
○以爲文而不足、河上、彌、竝無而字、奕本、作以爲文而未足也、李約作以爲文未足。
○樸、或作朴、同。

絶聖棄智章第十九 四十六言

【章旨】 此章、前章の意を承けて世の文治愈勝れて、世道愈薄らぐ、故に人爲の道を棄てて淳樸なる無爲自然の大道に復るべきことを説く。

絶^チ聖^ヲ棄^フ智^ヲ、民利百倍。絶^チ仁^ヲ棄^フ義^ヲ、民復^ニ孝慈^ニ。絶^チ巧^ヲ棄^フ利^ヲ、盜賊無^シ。有^ル此三者、以爲^ヘ文^ニ而不足^ト。故^ニ令^ニ有^ル所屬^{スル}見^{ハシ}素^ヲ抱^キ樸^ヲ、少^ク私寡^ク欲^ク。

【譯讀】 聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍す。仁を絶ち義を棄つれば、民孝慈に復る。巧を絶ち利を棄つれば、盜賊有ることなし。此の三者は以爲へらく文にして足らずと。故に屬する所ありて素を見はし樸を抱き私少く欲寡からしむ。

【字義】 ○聖 もと全徳の名なれども、ここにては當時謂ふ所の聖にて、ただ智の至りてさとして慧黠なる者を斥す、智も亦私智にて眞の智に

あらず。 ○仁 善仁の仁にあらず、義も亦當時謂ふ所に就きていふ。

○復 もとの天性にかへる義。 ○巧 巧技なり。 ○利 貨利なり。得

難きの財貨などをいふ。 ○三者 聖智仁義巧利の三なり。 ○文 質

の反對、文飾なり。 ○屬 附著せしむる義なり。

【直解】 無爲自然の大道が行はるる世は、民の心も無私無欲にして、安らかに世を渡ることを得たれども、世の開け行くに随つて、所謂慧黠の私智に富める聖人智者などといふ者が現れ出でて、己の私智小巧を弄びて、これまで無かりし人爲的制度を定め、世の中は益多事多端となり、衣食住其の他の器物に至るまで、次第に奢侈に趨き、國用も嵩み、租税も重くなりて、民はそれが爲めに益困窮するに至り、遂に自暴自棄となりて、己が生業を怠り、種種の不善を爲し、訟を好み産を破り罪を犯すに至る。其の弊一數ふべからず。されば國を治むる者、其の弊の由來する所を察し、速に聖を絶ち智を棄てて、無爲自然の化の行はれし古に復さしめば、民の風俗も純朴となり、欲すべき物を羨み見て心を動かすこともなければ、煩苛なる制度の束縛を受くることもなく、只管各自の生業を勵み、

○莊子〔胠篋〕聖人生而大盜起、聖人不死、大盜不止。
○第三章、不尙賢、使民不爭。次章、絶學無憂。

心も安く身も穩かなることを得て、民の利益は百倍するに至るべし。又當時の所謂仁は、人の爲めに力を盡し、人を恵み愛するといふを名として、其の實は名を沽り世を欺きて、己の利を謀る者多き也。又義といふも、それと同じく、表面は正義を飾り立てて、其の實は私を營む者多き也。されば當時の所謂仁義は己の誠心誠意より出でたる眞の仁、眞の義にはあらず、只其の表面を飾り立て、仁義の美名を藉りて私利を謀るに過ぎざるのみ。彼の齊の桓公、晋の文公の如きも、皆仁義を藉りて天下の民心を服せしむるの具に供し、以て己の霸業を成就するを得たるのみ。かかる虚偽の仁義の行はるる世の中には、眞の孝慈の行はるる筈なき也。即ち彼は孝子なりといふ譽を得んが爲めに、表面を飾り立てて、己の父母を大切にするに過ぎず。又彼は慈父なりとの美名を得んが爲めに、己の子を慈愛するに過ぎずして、誠心誠意より出でたる眞の孝慈にはあらず。それ父子の愛は自然の天性に出で、固より學修を待ちて後に知りたるにあらず。故に虚偽の仁を絶ち、虚偽の義を棄て、太古の純朴の風俗に復し、而る後に人人誠心誠意より其の父母に孝養し、又は其の子を慈

○第五十七章
民多技巧奇物
滋起法令滋彰
盜賊多有

○第三十七章
無名之樸亦將
不欲不欲以靜
天下將自正

愛して、眞の孝慈が自然に行はるるを得る也。又巧なる技術を好むやうになれば、人人技巧を競ふやうになり、衣食住其の他一切の細工物は、益々精巧となり、奢侈の風漸く長じ、欲すべき贅澤品などが多くなれば、民はそれを得んとして、心が動き亂れ、又容易に得難き貨利即ち金銀珠玉などを上たる者が貴びて、民に見せびらかす時は、民は之を得んと欲して無理なる才覺をなし、困窮の極、遂には盜を爲すに至る。されば上たる者が、巧技貨利の二者を絶ち棄てて、貴ぶことを爲さず、太古の純朴の風に復し、無知無欲にして、少しも巧利の念を起さしめざれば、世に盜賊といふ者の出づることは有らざる也。以上の聖智仁義巧利の三つの者は、思ふに表面の文飾華美に見ゆるものなれども、國を治むる實用向には足らざる所ある也。故に此三つの者を絶ち棄つるに如かず、かくして民の心をして大道に附著して離れざる所あらしむるを要す。それは如何にするかといふに、民をして素とて未だ染めざる絲の如き生得の儘にて、少しも飾を加へざる無爲自然の天性を見はさしめ、樸とて山より伐り出したる儘にて、未だ細工を加へざるあら木の如き質朴の徳を抱き

守りて失はざらしめ、又人は如何ならうとも、己さへ都合よければそれにて宜しといふ手前勝手の私心を去り、外物の爲めに誘惑せられて、動き亂さるる欲心を少くするに在る也。此の如くすれば太古無爲の治に復りて、民の心も純朴敦厚となり、虚偽争訟盜賊などの生ずる患もなく、眞の太平は期して待つべき也。此寡欲といふことは孟子盡心にも養心ハハ莫善於寡欲スルコトヲとあるが如く、天より稟けたる良心を養ふには、己の私欲を省きて寡くするより善きことはなき也。

○河上公、以此爲異俗章。

○善奕本作美、何若聚珍板弼本作若何古逸本同。

絶學無憂章第二十 一百三十五言

【章旨】 此章、聖人世俗の末學を絶ち、自然の道に従ひて作爲する所なく、以て大道の本に復歸することを貴ぶ所以を説く。

絶學無憂、唯之與阿相去幾何、善之與惡相去何若。

【譯讀】 學を絶てば憂なし。唯と阿と相去ること幾何ぞ。善と惡と相去ること何若。

【字義】 ○學 世俗の末學をいふ。莊子山に絶學捐書ツまた永嘉大師の證道歌に君不見、絶學無爲、問道人とあるは是れ也。老子の意は主として禮を斥していふ。○唯阿 同じく應答の辭なれども、唯は恭しく丁寧なり、禮記曲に父召無諾、先生召無諾、唯而起とある是れなり、阿は慢應の辭、阿と通ず、應答の聲の大いにして不恭なる也。

【直解】 第一節、世俗の末學を絶つべきことを説く。さて世人は學問を爲して智慧を研くことを勉むれども、智慧の増し進むに従つて、世の中の事

○第六十四章
學不學復衆人
之所過

はすべて複雑華美となり、随つて人人の私欲も多くなり、其の私欲を満
足せしめんとして、意の如くならざる時は、心に憂の絶ゆることなし。殊
に智慧の開くるに従つて、三千三百條ともいふ煩瑣なる禮法を制定し
て、それが爲めに自ら心身の自由を束縛せられ、學問を爲せば爲す程、愈
無爲自然の大道に遠ざかり、人間の本性を失ふに至ることは、實に愚の
至といふべき也。さればかかる世俗の末學を絶ちて、私知私欲の由りて
生ずる源を塞ぎ、繁文縟禮などに束縛せらるる事もなくして、本然の大
道に復れば、心は常に恬淡無爲にして、絶えて憂患の生ずることなき也。
此句は四十八章に爲學日益、爲道日損と其の意相同じ。また俗學の漸く
に大道に遠ざかりて、枝葉末節に流れ、無益有害にして、爲すに足らざる
ことを、姑く言葉遣の禮法に就きて言へば、唯も阿も同じく應答の辭な
れども、唯は聲小にして恭しく、阿は聲大にして慢るの差異あり、故に
禮法にては、唯を恭とし善とし、阿を不恭とし不善とすれども、唯と答へ
たればとて、果して内心の誠敬より發せしものなるか、或はただ俗にい
ふ交際上手の輕薄子が心にもなき御世辭なるか、未だ知るべからず、又

阿と答へたればとて、田舎者の純朴にして言葉遣を知らざるまでにて、
其の内心の敬意は、却つて唯と答へし料理屋の主婦や、呉服屋の番頭な
どよりは、勝りて厚き者なしとも限らず。されば禮の根本たる先方を敬
する誠心誠意の上より論ずれば、唯といふも、阿といふも、果して何程の
差異ありや、其の心を尋ねれば、唯も阿も其の相去ること幾何もなく、殆
ど同じやうなる者となる也。之を要するに禮法は、免角表面を飾り立て
て、虚偽に陥り易き者なり、故に表面は謙讓の風を装へども、内心は不遜
なる者あり、又表面は粗野に見ゆれども、内心は却つて篤實なる者あり、
禮の尊ぶに足らざる此の如し、又世人は善と惡とは甚だしき逕庭ある
者と思へども、世の中にていふ善人とは、多くは表面を偽り飾りて、能く
人の氣に入るやうに逢迎を巧にし、只管汚濁せる流俗に阿り媚びて、誰
にも惡まれざるやうにする所謂郷原論語即ち沈香も焚かず、屁も放ら
ざる的の律義者を斥していふと雖も、孔夫子の如き聖人より見れば、徳
の賊なりと深く戒めたまひたるが如く、矢張善を街ふ所の、一種の狡猾
なる惡人たるを免れざる也。最も眞面目なるべき教育者に此種の人物

の少からざるは、眞に慨歎すべく、教育の功果の擧らざる所以も、亦此に存する也。されば世俗にて善といひ悪といふも、絶對的虚無自然の大道より見れば、殆ど同一にして、其の相去ることは幾何もなき也。第二章に天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已とあると意は同じ。

人之所畏、不可不畏。荒兮其未央哉。

【譯讀】人の畏るる所は、畏れざるべからず。荒兮として其れ未だ央きざるかな。

【字義】○人之所畏 人の畏れて慎み敬ふべき所の事にて、禮法刑政などをいふ。○荒 荒漠の義にて、廣く遠きを謂ふ。○央 盡なり。未央は未盡に同じ。詩經、小雅燎に夜如何其夜未央とあるは是れ也。

【直解】第二節、和光同塵の方便を説く。さて前に述べたるが如く、世人は徒に禮法に拘泥し、擾擾として唯の恭にして阿の慢なる、善の貴ぶべくして悪の憎むべきことを喋喋として論じ争へども、其の實は表面を飾り立つるの巧なると否との異同に過ぎずして、其の相去ることは幾何の

○不可不畏、淮南子、畏下、有也。字未央、奕本無哉字。

差もなき也。然れども世の中の風俗は、免に角禮法を重んずるが故に、禮法は實際守るに足らざる者なるにもせよ、此の世に住する以上は、世人が一般に畏れて慎む所のもの即ち禮法刑政などは、己も亦畏れて慎むべき也。然るに己獨り崖異の行を爲し、俗に違ひて禮法を蔑視し、世人の譴怒を被るが如きは、處世の道を知らざる者なり。されば莊子も平生禮法は守るに足らずと爲せども、其の人間世篇に於て、擊跽曲拳、人臣之禮也、人皆爲之、吾敢不爲邪、爲人之所爲者、人亦無疵焉、是之謂與人爲徒といへり。即ち世に處し人に接するには、和光同塵の教に従ひ、世俗の所謂禮法に率由すべきことをいへる也。また論語郷黨に郷人、讎、朝服而立於阼階とあるも、讎は俗にいふ厄拂やくはらひにて、もと古の禮なれども、殆ど兒戲に近きものなり。然れども孔子は郷人の讎禮を行ふ時には、必ず大夫の朝服を着けて阼階即ち主人の位に立ちたまふとあるも、亦此意に外ならず。只禮法の上にて衆人の畏るる所は、己も亦之を畏れ慎むのみならず、この虚無自然の大道は、天地開闢以前より存在して、極めて廣く大いにして何處までにて盡くるといふ限りのなき者なれば、この道を身に體

することは、實に容易の事にあらざれども、己は衆人と異にして、必ずこの大道に従ひて行かざるべからざる也。

衆人熙熙、如享太牢、如春登臺。我獨泊兮其未兆。如嬰兒之未孩。乘乘兮若無所歸。衆人皆有餘而我獨若遺。我愚人之心也哉。沌沌兮俗人昭昭。我獨若昏。俗人察察。我獨悶悶。澹兮其若海。颺兮似無所止。

【譯讀】衆人は熙熙として太牢を享くるが如く、春臺に登るが如し、我は獨泊兮として其れ未だ兆さず、嬰兒の未だ孩せざるが如し、乘乘兮として歸する所なきが若し、衆人は皆餘あり、我獨遺るるが若し、我は愚人の心なるかな、沌沌兮たり、俗人は昭昭たり、我は獨昏きが若し、俗人は察察たり、我は獨悶悶たり、澹兮として其れ海の若く、颺兮として止まる所なきに似たり。

【字義】○熙熙 悦び樂む貌、熙は嬉と通ず、荀子、效、儼に熙熙兮其樂人之誠也

○如春登臺、與第十五章若冬涉川、同一句法、河上本、明皇本、並作如登春臺、非。
○泊兮、奕本、泊作魄、通、河上乃作伯、說文解字、伯無爲也、是作怕亦通。
○未孩、孩、奕本作咳、古字同。
○乘乘兮、若無所歸、彌本、乘乘作儻儻、奕本作儻儻兮其不足、以無所歸。
○而我獨若遺、奕本無而字。
○沌沌、一本作渾渾。
○俗人昭昭、奕本人下、有皆字。

河上、俗作衆。
○我獨若昏、奕本作我獨若昏悶。
○俗人察察、奕本作俗人皆昏。
○澹兮其若海、奕本澹作淡、通、河上、作忽兮若海、嚴遵作忽兮若海、釋名、海、晦也。
○颺兮似無所止、颺、河上作淵、奕本作飄、彌本、似作若、無所字。

とあり。○享 享饗と三字古相通用す。○太牢 古、羊豕を以て小牢と爲し、牛羊豕の三牲を具ふるを以て太牢と爲す。○泊兮 泊は莫の假借字にて定の字の義、其の靜定を謂ふ。○兆 朕兆の義にて、木の芽を發する貌をいふ。○孩 小兒の初めて笑ふなり、笑へば情動く、未孩は情の未だ動かざる也。○乘乘兮 ぶらりとして、據なき貌。○若遺 遺は忘なり、遺忘して智の足らざるが如き也。○沌沌 無知の貌、莊子在に渾渾沌沌、終身不離とあり。○察察 耳目の聰明なる貌。○悶悶 悶は昏と通ず、暗き貌。○澹兮 澹は定なり、心の靜定なる義、賈誼の服賦に澹淳若深淵之靚、また淮南子、澹兮其若深淵の註に、澹ハ定マリテ動かザル貌とあり。澹は一本に愔に作る、古相通ず、淮南子、眞、訓に蜂蠶螫指而神不能愔の註に、愔ハ定ナリとあるは是れ也。○颺風の地上を行く聲なり。

【直解】第三節、三段に分ち、反復して聖人の衆人と異なる所あるを對舉して説く、さて衆人は外物即ち富貴利達などを慕ふ心盛んにして、之を得ることを悦び樂むことは、猶ほ太牢即ち牛羊豕の三牲を具へたる此上も

なき盛饌の饗應に與りし時の如く、心の底より嬉しがり、或は春の長閑なる日に高き樓臺に登りて四方を眺望して心が浮き立ちて樂むが如く也。衆人は實に此の如く、常に外物の欲に耽著して、其の心がざわざわとして躁がしく、少しも靜かなることとはなき也。然るに我は衆人とは反對にして、獨り泊然として心が靜かに定まり、少しも外物の欲の爲めに誘はれて、動き亂さることなき也。而して其の私心私欲の毫も萌し現はれざる有様は、猶ほ赤坊の未だ笑ふことを解せずして、好惡の情の未だ動かざるが如くなる也。衆人は皆富貴利達に心醉して、それに歸止せんとし、熙熙として悦び樂みて之に趨けども、我は獨り無爲自然の道に従ひて居るが故に、少しもかかる外物を慕ふ念なく、漠然として心に係著する所なく、ぶらりとして據なく、無私無欲にして、自己の歸著する所もなきが如しと也。論語述而不義、而富且貴、於我如浮雲、と孔子のたまひしも亦此意なり。王陽明が寡欲一分、即近聖人一分といひしが如く、苟も道に志す者は、先づこの外物の欲を除き去るを以て第一緊要の事と爲すべき也。衆人は博く古今の書を読み、色色の事を知りて、智

慧が餘りあるやうに見ゆ。然れども我はそれと反對にして、一向智慧がなく、空空として遺忘したるが如くなり。故に我は愚人の智慧なき心の如くなるかな、即ち沌沌として何も知ることなき也と。實は其の無知にして迂闊として居るが故に、外物の欲の爲めに、心を動かさることなく、無爲恬淡なるを得る也。又世俗の人は己の才徳又は功名などを昭かに輝して、世間に示さんとすれども、我は全くそれと反對にして、深く自ら韜晦ラツツミクして昏きが如くし、己の才徳功名などを世に顯すことを爲さざる也。是れ君子有盛徳、容貌如愚といへると同意なり。又世の俗人は耳目聰明にして、瑣細の事物までも深く穿鑿して苛察に流るれども、我は全く之と反對にして、心は常に悶悶として暗く、不聰不明にして何も知ることなきが如くなる也。又心が澹然として靜かに定まれることは、大海原の深遠にして津涯も無く平かなるが如く、一點の私欲妄念の起ることもなく、又物に應じて變化し、少しも拘泥執著する所なきは、風が地上を行きて止まる所なきが如くなる也。其の心の有様は、宛も海闊委魚躍、天空任鳥飛の意なる也。

古今詩話の意なる也。

衆人皆有以而我獨頑且鄙我獨異於人而貴求食於母。

○而我獨頑且鄙、突本無而字、彌本且作似、○異於人、突本、異上有欲字、○而貴求食於、母、突本、作而貴、食、母。

【譯讀】衆人は皆以てすることあり、而して我は獨頑にして且つ鄙なり、我は獨人に異にして而して食を母に求むることを貴ぶ。

【字義】○有以 以は用ふる義、己の才能を用ひて何か仕事を爲したしと思ふをいふ。○頑 かたくな、堅く道を守り、世の風潮に連れて動かざる義。○鄙 いやし、田舎者の如く質朴にして飾り立てざる義。○母 道を斥す。首章に有名、萬物之母とあり、第五十二章に天下有始、以爲天下母とある母に同じ。上文の嬰兒に應ず。○食 養なり、乳のことをもいふ。禮記則に大夫之子、有食母とあり、食母は後世にいふ乳母なり。莊子符の適見、純子食於其死母者、の郭象註に「食ハ乳ナリ」とあり。食は上文の太牢に應ず。

【直解】第四節、本章の主意たる俗學を絶ちて大道に復る旨に歸宿して結ぶ。さて世の衆人は己が才智を用ひて何か仕事を爲し、己が功名を見は

さんと競へども、我は獨り前節にもいひしが如く、沌沌として愚かに、悶悶として昏く、頑固鄙陋にして、衆人とは全く相異れり、それ衆人は博く學を爲し徒に末に趨り、己が才智を研きて富貴榮華を求むるに腐心し、無爲自然の道を知る者なし、而るに我は獨り衆人と異にして無爲の道を大宗として、道の兒童と爲り、乳養を天地の母ともいふべき大道に求むるを貴ぶの外に餘念なく、富貴利達の如き外物の欲の爲めに、心を動かさるることは寸毫もなき也。

の本體は有るが如く無きが如く、目に視るべからず、耳に聴くべからず、又手に捉るべからず、實に恍惚としてそれかあらぬか分曉せざる者なり、其の分曉せざる中よりして一元の氣を生じ、萬物の象を具ふるに至る也。實に日月星辰の光より、千紫萬紅の花の色に至るまで、一としてこの虚無の道より出でざるは無き也。又其の恍惚として有るが如く無きが如き中よりして萬物の形を具ふるに至る也。即ち天地の大より草木蟲魚の微に至るまで、一としてこの道より生ぜざるは無き也。されば窈冥即ち幽かに昏き虚無の中に、必ず精即ち純粹無雜なる者(道)の存在するありて、其の自然の働によりて、萬物を生成し、其の萬物にそれぞれ性を賦與し、柳は何時も緑に、花は何時も紅に、蓼は辛く、茶は苦く、鶴の脛は長く、鳧の脛は短く、各其のまじり氣なき性を具へしむることは、皆この道の妙用にあらざるは無き也。以上同じやうなる事を韻を換へて繰り返し、無爲自然の大道の微妙なることを賛歎せし也。

其精甚眞。其中有信。自古及今、其名不去。以閱衆甫。吾

○吾何以知衆甫之然哉。突本、

何以知衆甫之然哉。以此。

何作突弱本、然作狀李約無哉字。

【譯讀】 其の精甚だ眞なり。其の中信あり。古より今に及びて、其の名去らず。以て衆甫を閱ぶ。吾何を以てか衆甫の然ることを知らんや。此を以てすればなり。

【字義】 ○眞 偽の反對、道の精粹は、古今に互りて變せず、眞實無妄なるをいふ。 ○信 言に従ひ人に従ふ、己の言を必ず期して履行する義、寒暑の往來、晝夜の循環など、すべてこの道の功用は萬古に互りて差ふことなく、終始一貫して少しも偽り欺くことなきをいふ。 ○其名 道は形なければ名づくべきやうもなし、やがて其の無名を以て道の名とする也。 ○不去 消え失せざる義。 ○衆甫 甫は始なり、宇宙萬物の始本をいふ。一説、甫は猶ほ父の如し、衆甫は萬物の父なりと、亦通ず。 ○閱 總なり。列子仲尼に閱弟子四十人、同行、また淮南子道應に萬物之總皆閱、一孔、百事之根、皆出一門とあるは是れ也。 ○以此 此とは虚無の道を斥す。

【直解】第二節道の精眞萬物の始をすべをさめることを説くすべて天下の象形あるものは皆不純不粹なれども唯虚無自然の道は絶対的一元の氣なるが故に實に純粹無雜なる所の精なり而して其の精たる甚だ眞實無妄にして一點の偽なく古今に互りて變ることなし又其の道の妙用は終始一貫して少しも誤ることなき信ありて柳の緑花の紅寒暑の往來晝夜の錯行千古萬古に互りて變ることなしこれ首章にいふ所の常道たる所以なりさてこの道は天地の主宰にして萬物生成の母たれどももと形なければ名のつけやうもなく假に無名を以て道の名とし其の無名といふ名のみは古より今に及ぶまで消え去ることなし是れ首章にいふ所の常名たる所以なりかくして能く萬物生成の始を總べ治むる也是れ首章にいふ所の衆妙之門といふに同じ吾即ち聖人は何を以てかく萬物がこの虚無の道より出づることを知るかといふに自ら其の身に深遠なる道德を具へて己と道と一つとなりて相離るることなく我が心は即ち道と同じければ也それを以て宇宙の理法を觀察するが故に萬物の悉くこの虚無の道より出づることを知り得る也

曲則全章第二十二 七十八言

【章旨】此章聖人道を體して而も自ら韜晦し巧智を用ひて物と争ふことを爲さず以て其の本性を全うする所以を説く

曲則全。枉則直。窪則盈。敝則新。少則得。多則惑。

○河上公以此爲益謙章。
○沈曰此章表無能之能。

○直突本作正。
○窪河上作窞。
○顧歎作滂說文解字曰窪窞也。
○敝彌作蔽河上作弊。

【譯讀】曲なれば則ち全し。枉なれば則ち直し。窪なれば則ち盈つ。敝るれば則ち新なり。少ければ則ち得。多ければ則ち惑ふ。

【字義】○曲 直の反、曲れる木に喩ふ。曲木は不材の木なれば斧斤の害を免れ、天年を終ふることを得る也。○枉則直 枉は屈なり、直は伸なり、屈すれば則ち伸ぶ。易下繫辭に尺蠖之屈以求信也。龍蛇之蟄以存身也。とあると同じ意なり。○窪則盈 くぼき也。汚下の地は水潦悉く之に歸す。故に盈つる也。謙下卑弱を以て居れば衆人の歸する所たるに喩ふ。○敝則新 敝は物のやぶれて古くなりしをいふ。草木の枯葉の如し、枯葉落つるが故に新葉が生ずる也。○少則得 少は思慮作爲の少き也。

道は純一不雜にして多岐雜多の者にあらず、故に少といふ。得とは天性を全うするを得る也。

【直解】第一節、先づ古語を掲げて、聖人が世に處するに、柔を守りて争はず、以て其の生を全うすることを證す。さて聖人は常に其の柔を守り強を避けて、物と争はず、故に禍害を免れて天命の自然を全うするを得る也。例へば松の如き強き木は、曲らぬ故に大風雪などに遇ひて折るることあれども、柳の如き柔かなる木には雪折なきが如し。又聖人は己の身を無益無用の者と爲し、つまらぬ世間の功名などを求むる心なきが故に、禍害を免れて、天壽を全うすることを得る也。例へば曲れる木は無用の材なるが故に、斧斤の災を免れて、其の天年を終ふることを得るが如し。莊子天下に人皆求福、己獨曲全とあるは、此意に同じ。また枉は屈なり、直は伸なり、屈すれば則ち能く伸ぶることを得るは、尺蠖しゃくわくの伸びんことを求むる時は、先づ其の身を屈するにても知るべき也。彼の韓信も侮辱を忍びて屠中の惡少年の胯間に屈したればこそ、他日大いに天下に伸ぶることを得たるなれ。また張子房が圯上に於て老父の無禮を忍び履を

○第四十五章、大直若屈。

○易(謙卦象傳) 天道虧盈而益謙、人道惡盈而好謙。

取りたるに由りて、他日帝王の師となることを得たりしも、亦屈して而る後に伸びたる也。されば聖人は常に自ら屈して己の智慧を韜晦し、一見愚なるが如くなるが故に、却つて大いに己を伸ばして、道と其の體を一にし、立派なる人格を具へて、衆人の推戴する所となる也。くぼみて低き所は、自然に衆くの水が之に歸して集まりて盈つるなり。第六十六章に江海所以能爲百谷王者、以其善下之故。善爲百谷王とあるは是れ也。されば聖人は虛無自然の道に従ひ、無私無欲にして、人に先だつことを爲さず、常に謙下卑弱の地に居るが故に、却つて衆人の歸服する所となる也。また物がやぶれて古くなれば必ず更に新鮮なる美しくしき物を得るなり。例へば草木の葉も枯れて落つれば更に新らしき葉の生ずるが如し。人も貧賤又は不幸のどん底に沈みて後、發憤して再び浮びあがり、富貴ともなり、幸福の身ともなるを得る也。されば聖人は其の智を晦まし、衆人の忌み嫌ふ汚下の地に居り、己を虚うして無爲自然の道を樂むが故に、衆善之に歸して、何時までも日新の徳を得と也。それ道は無心無爲に在り、故に思慮作爲を少くする時は、其の自然の天性を全うすること

を得る也。第二十八章の絶學無憂とあるも亦此の意なり。之に反して博く學を爲して、才智を研き、徒に思慮作爲を多くする時は、或は惑ひて他の岐路に入り、其の天性を失ふに至る也。彼の多岐亡羊列子の喻も畢竟此の理に外ならず、彼の洋行歸りの新進學者が、無暗に己の博識を衒ひ、カント曰く何ソクラテス曰く何と、引例澤山の論説を草すれども、自家の定見とては空空寂寂たる者の如きも、亦この多則惑の好適例と爲すべき也。第四十八章に爲學日益、爲道日損、損之又損、以至於無爲とあり、爲學日益はここの多則惑の意をいひ、爲道日損、損之又損、以至於無爲は少則得の意に同じき也。老子が丁寧反復して世俗末學の弊を説くこと深切なりと謂ふべし。

是以聖人抱一爲天下式。不自見。故明。不自是。故彰。不自伐。故有功。不自矜。故長。夫唯不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂。曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸之。

○是以聖人、奕本無是以二字。

○夫唯不爭、河上爭作矜、非。

○虛言哉、奕本、言下有也字。

【譯讀】是を以て聖人一を抱きて天下の式と爲る。自ら見はさず。故に明かなり。自ら是とせず。故に彰はる。自ら伐らず。故に功あり。自ら矜らず。故に長し。夫れ唯争はず。故に天下能く之と争ふことなし。古の謂ふ所、曲なれば則ち全しとは、豈虚言ならんや。誠に全うして而して之を歸す。

【字義】○抱一 抱は保ち守る也。一とは虚無自然の道をいふ。韓非子揚に

道無雙。故曰一とあり。聖人はこの道を體し得て徳とするが故に、抱一とは清静無爲の理に合する。冲和の徳を守る義と解するも亦通ず。○式

楮式即ち手本なり。○伐 其の功にほこる也。○矜 其の能にほこる也。○全而歸之 天より受けたる壽命竝に本性を全うして天に歸すことを得る義。禮記祭に父母全而生之。子全而歸之とあり。蓋し主宰

は萬物の大父母たるが故にかくは言へる也。

【直解】第二節、聖人の行爲を述べて、前節の古語の義を實にす。前節に少則得多則惑とあるを承けて、是の故に聖人は多岐に涉らず、少の極たる一つの道を保ち守りて、純一にして無私無欲なる本性を全うしたまふが故に、天下萬民の矜式して模範とする所となるを得る也。夫れ聖人は一

○第十章、載營魄抱一、能無離乎。

○第三十九章、王侯得一以爲天下貞。

○第二十四章、自是者不彰。

を抱くと雖も、自ら其の美くしき徳性を見はし示すに心なくして、深く之を包みたまふ故に却つて自ら其の美德が世に明かになる也。又自ら其の行爲を是なりとして誇りたまはず、故に却つて自ら其の善行が世に彰はるるなり。又自ら其の功に伐らず、謙遜したまふ故に却つて其の功が長く全きことを得る也。又自ら其の才能にほこりたまはず、故に却つて其の才能を長く保ちて失ふことなき也。之を要するに聖人は天下萬民の矜式する所となり、天下の主となりても、少しも驕傲の念なし。故に不自見、不自是、不自伐、不自矜、と雖も、而かも萬民之を推し戴きて、其の徳行は愈明かに愈彰はれ、能く其の功を全うし、長く其の才能を保つことを得、其の然る所以の者は他なし。聖人は無爲自然の道に従ひ、其の柔を守り、其の鋭を挫き、少きに安んじて外慕する所なきが故に、少しも人と相争ふの念なきを以てなり。故に之を總括して夫唯不爭、故天下莫能與之争と曰ふ也。衆人は免角驕慢自負の心ありて、己が功名を銜はんとするが故に、反つて他の競争を受けて、或は嫉妬せられ、或は中傷せられ、或は排斥せられて、其の地位に安んじ居ること能はざるに至る。聖人は

則ち然らず、第二章にも爲而不恃、功成而不居とあるが如く、少しも己の功德に誇りて人と相争ふことなし。それ唯争ふことなし。故に天下何人も之と争ふ者なしと也。書經大禹に汝惟不矜、天下莫與汝争、能、汝惟不伐、天下莫與汝争、功とあるも亦同じ意なり。以上説く所の如くなるが故に、古言に所謂曲則全、一句を擧げて他を略したる也といふは、決して虚言にあらざる也。能く斯の如くなれば、誠に以て天下の式と爲るに足りて、天より受け得たる壽命も天性も之を全うして、もとの天に歸すことを得べき也。

○河上公、以此爲虛無章。
○沈曰此章論自然。

○希、奕本作穆、通。
○兩終字、奕本並作崇、通。
○孰爲此者、天地、奕本地下、有也字。

希言自然章第二十三 八十七言

【章旨】此章物物自然の道あり、其の自然の道に従はざれば、長久なること能はざるを説く。

希言自然。故飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地尚不能久。而況於人乎。

【譯讀】希言は自然なり。故に飄風は朝を終へず。驟雨は日を終へず。孰れか此を爲す者ぞ。天地なり。天地すら尚ほ久しきこと能はず。而るを況や人に於てをや。

【字義】○希言 不言の義、第十四章に聽之不聞名曰希、また第四十一章に大音、希聲の希に同じ、論語進先に鼓瑟希とある希も同義にて、寂然として聲の絶えて無き貌。○飄風 疾風なり。○驟雨 暴雨なり。○不終朝 早旦より朝飯の時までを終朝といふ。○不終日 早旦より日暮までを終日といふ。

○次章、鼓者不立、跨者不行。

○第五章、多言數窮。

【直解】第一節、自然を失ふ者は久しきを持する能はざること説く。それ天は何も言はざれども、四時行はれ百物生ず、されば希言即ち言はずして成し、言はずして信せらるるは、自然の道に合ふ者なり。この希言自然の理法は、獨り人間の上に行はるるのみならず、全知全能の力を備へたる天地と雖も、此の理法に違ふこと能はず。故に彼の俄に起る疾風は、早旦から吹き始めて朝飯の時を終ふるまで吹き通しに吹くこと能はず。忽ちに止む也。驟雨即ち夕立の如き俄雨も、早旦から日暮まで降り續けに降ること能はず。忽ちに歇む也。この飄風、驟雨の二者は、誰が之を起すか。言ふまでもなく天地の爲す所にして、聲の最も大いにして人を震驚せしむる勢ある者なれども、其の突如として暴疾に起るは、天地の自然を失ふ者なり。人間よりも勝れたる天地すら、自然の理を失ふ者は、長く保ち難し。而るを況や人に於てをや。されば人が嘖嘖として言語を煩しく費すことは、自ら全うするの道にあらず。又長久の術にもあらず。故に多言を以て世を教化せんとするは、實に無益なる事なり。故に聖人は希言自然の理法に従ひ、第二章に處無爲之事、行不言、之教とあるが如く、言

語を用ひずして世を治め民を化することを爲す也。

故從事於道者道者同於道德者同於德失者同於失
同於道者道亦樂得之同於德者德亦樂得之同於失
者失亦樂得之信不足有不信焉

○德者同於德
奕本作從事於
得者得者同於
得得德古字通
○奕本失者上
有從事於失者
五字
○同於道者道
亦樂得之奕本
無同樂二字
○同於德者德
亦樂得之奕本
作於得者得亦
得之
○同於失者失
亦樂得之奕本
作於失者失亦
得之河上作同
於失者失亦樂
失之
○信不足有不信
焉字
○奕本信下無
焉字

【譯讀】故に事に道に従ふ者は道ある者は道に同うし徳ある者は徳に同うし失ある者は失に同うす道に同うする者は道も亦之を得ることを樂む徳に同うする者は徳も亦之を得ることを樂む失に同うする者は失も亦之を得ることを樂む信足らざれば信せざることあり。

【字義】○道德 道は虚無自然の道にして無形無象なり徳は其の道を身に體得せしものにて無形有象なりされば徳は道より一等下るもの也。傳奕の校定本徳を得に作る古得徳二字通用す。

【直解】第二節聖人は物物自然の道と體を同うす故に能く長久なる所以を説く。前述の如くなるが故に道に従ふ人即ち聖人は常に第四章に和

其光同其塵とある道を守り物我の隔を爲さず天下の人を擧げて我が廣き度量の中に包容す故に道者即ち有道の人に遇へば己の道を以て彼の道に同うして敢て相違ふことなく自他同様となり徳者即ち有徳の人に遇へば己の徳を以て彼の徳に同うして敢て相違ふことなくそれと同化する也又失即ち道を失ひ徳を失へる人に遇ひても敢て之を拒みて遽に其の不道不徳を攻むることなく姑く其の塵に同うして交を絶たず徐に之を感化して道德の方へ導くやうにする也聖人の宏量にして道徳失三等の人を并せ容ること此の如し故に有道者に對しては己も其の道に同うするが故に有道者は我を得て友とするを樂み又徳者に對しては己も其の徳に同うするが故に有徳者は我を得て友とするを樂み又道德を失へる者に對しても之を包容して徐に之を善導するを以て彼等も亦我を得て交ることを樂む也此の如くにして天下の人人皆悦びて歸服するに至るこれ聖人が物物自然の道に従ひ人に接し世に處する方にして言辭の得て致す所にあらずこれ即ち希言自然の妙術なりとす論語子に信而後諫未信則以爲謗己也とあり

其の意は己が人を愛する誠意の感孚して人に信用せられて而る後其の人に過惡の事あれば諫むべき也若し未だ人に信せられずして之を諫むる時は人は必ず之を以て己を謗ると爲す也との義なりそれと同じく徒に言辭を多くして人を導かんとすとも畢竟己の信實が足らざれば人は之を信せざるなりこれ希言自然の道に背ける者也

【辨正】淮南子道應に此章を引きて從事於道者同於道に作り同の字の上に道者の二字なし愈樾もこの二字を以て衍文と爲す然れども反復して之を考ふるに道者の二字なければ文理通せず淮南子に引く所は非なり従ふべからず

跂者不立章第二十四 四十七言

○河上公以此爲苦恩章。
○沈曰此章即有其德喪其德之意。

○跂、奕本作企同。
○在道、河上、在作於。
○不處、奕本、處下有也字。

跂者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也。曰餘食贅行。物或惡之。故有道者不處。

【章旨】此章前章を承けて不自然を惡み、人の躁進と驕滿とを戒むる也。

【譯讀】跂つまたつ者は立たたず跨またる者は行ゆかず自みづから見みはす者は明あきかならず自みづから是ぜとする者は彰あはれず自みづから伐ほる者は功こうなし自みづから矜ほる者は長ながからず其れ道みちに在ありてや、餘食よじく贅行ぜいけいと曰いふ物もの或あるは之これを惡にくむ故ゆゑに有道者いどうしやは處をらず

【字義】○跂 踵かかを舉かげてつまたつ義、身を高くせんが爲めにする也。○跨 兩足を張りて闊ひらくまたがる也。○自見自是 自伐自矜 この四つの自の句は、二十二章の不爭の徳たる不自見、不自是、不自伐、不自矜の反對にて、皆不自然の事をする也。○贅行 贅は疣贅こぶなり、莊子駢に附

贅贅疣出乎形哉、而侈于性、とあるは是れ也、行は形と古字相通す、列子問
の太形、王屋二山、方七百里、高萬仞の張湛註に「形當ニ行ニ作ルベシ」とあ
り、以て證とすべし、五行の行も形の義なり。○物 道即ち主宰をいふ。
次章の有物混成の物に同じ。

【直解】踵を擧げて地に著けず、爪先ばかりにて立つ者は、己の身の高を増
さんとするが爲めなれども、却つて疲れて久しく立つこと出来ず。また
左右の兩足を張りて大股に跨る者は、己の行歩の闊を増して速かに行
かんが爲めなれども、反つて進行を妨げて遠きに達すること能はず。こ
れ皆自然の道に背き強ひて人爲的に爲さんとするを以てなり。故に己
の才徳を恃みて人に驕り高ぶる者は、猶ほ跛つ者の久しく立つことの
出来ざるが如く、己の藝能を恃みて一足飛びに躁進せんとする者は、猶
ほ跨る者の遠きに行くこと能はざるが如き也。それと同じく自ら己の
才徳の美を衒ひて人に示す者は、其の美却つて世に顯はれず。自ら己の
行事を是とする者は、其の是却つて世に彰はれず。自ら己の功績にはこ
る者は、其の功績却つて消え失せ、自ら己の能にはこる者は、其の能却つ

て長く保たれず。これ皆無爲自然の道に背きて自ら心ありて爲すが故
なり。それ此の如きは無爲自然の道に於ては、無用の長物とすること、こ
れを物に譬ふれば、食ひ餘りの物、又疣贅の如き餘計なる物の如しとい
ふ也。如何なる旨き食物も、食ひ餘りは穢はし、形體全しと雖も、無用なる
疣贅や六ツ指の如き者あれば醜し、其の人如何に徳あり、功あり、才能あ
りとも、自らそれを誇りて世に衒ふ時は、其の餘は觀るに足らざる也。さ
れば自見自是、自伐、自矜は、皆に自然に背く無用の長物たるのみならず、
物即ち道は或は之を忌み惡む也。故に有道者はかかる驕滿躁進等すべ
て不自然なる行爲に遠ざかりて身を其の處に處かざるやうにする也。
それ有道者は深を以て根と爲し、約を以て本と爲し、退を以て進と爲し、
辱を以て榮と爲し、深く藏して虚しきが如く、盛徳あれども愚なるが如
く、功成り名遂げて天の理に循ひ、忘れざる所なく、而して衆美之に歸す
る也。第二章の生而不有、爲而不恃、功成而不居、夫惟不居、是以不去の一節
と并せ考へて、無爲自然の道の貴ぶべき所以を悟るべき也。

○河上公、以此爲象元章。
○沈曰、此章、形容道體。

○寥、奕本作窈、獨立而不改、彌本無而字。

有物混成章第二十五 八十六言

【章旨】此章、自然の道の至大なることを説く。

○有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母。

【譯讀】物あり混成す、天地に先ちて生ず。寂兮たり寥兮たり、獨立して而して改めず。周行して而して殆からず。以て天下の母たるべし。

【字義】○物 主宰即ち道を指していふ、道を以て具體的の一物と爲すにあらざれども、道は實在するものなれば、姑く假に物と名づくる也。○混成 混は渾に通ず、渾然として成り、形體などの視聽分別すべきなきをいふ。羅什曰はく、妙理常存、故曰有物、萬道不能分、故曰混成と。○寂兮寥兮 其の聲なく形なきをいふ。○不改 變易せざる也。○周行 あまねく宇宙に充塞するを謂ふ。○殆 危きなり。

【直解】第一節、名稱なき自然の道を形容す。物とは假に道を指していふ。さ

○第四章、吾不知誰之子、象帝之先。第二十一章、道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象云。○第十四章、視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微。

○第五十二章、天下有始、以爲天下母。

てここに物あり、其の物たるや、形體なく混混沌沌として視聽すべからず、分別すべからず、而して其の物は天地よりも先に生じて、其の始を知るべからず、聲あるかと聽けば寂かにして聲なく、形あるかと見れば寥かにして形なし。凡そ天下の萬物は皆相對的にして陽の對には陰あり、天の對には地あり、日の對には月あり、夫の對には婦あり、其の他禽獸草木魚介の類に至るまで、對偶なき者とは一物もあることなく、また其の萬物の相は皆變改すれども、唯この一物即ち道のみは對偶なく、絶對的に獨立して、萬古に互りて常に變改する所なし、而して其の物たる、六合に彌り、如何なる隅隅にても周く流行して在らざる所なく、其の能く宇宙間の萬物を生生化化して已むことなき功用は、始終循環り環りて少しも滞ることなく、しかも絶えて危き害に逢ふことなきなり。かく萬物はこの物即ち道より生ずるが故に、以て天下萬物の母たりとはいふなり。第一章に無名、天地之始、有名、萬物之母とあると同じ意なり。また傅大士の偈に、有物先天地、無形本寂寥、能爲萬象主、不逐四時凋とあるも、亦此章の意に本づく也。

○字之曰道、奕本、字上、有故、強二字、強爲之名、奕本、強作強、通、○反、奕本作返、同。

○吾不知其名、字之曰道、強爲之名、曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反。

【譯讀】吾其の名を知らず、之を字して道と曰ふ。強ひて之が名を爲して大と曰ひ、大を逝と曰ひ、逝を遠と曰ひ、遠を反と曰ふ。

【字義】○名字 名は自ら命ずる也。字は人の呼ぶ所にして名の副なり。

○道 老子の所謂道は絶対的にして、名字を附すべからず、且つ道と名づくれば、儒教などにていふ道と混同する虞あれども、他に適當の名稱なければ、強ひて字して道といふ也。○逝 往くなり、前節の周行に應ず。○反 本に歸る義、第十六章の夫物芸芸各歸其根と同じ。

【直解】第二節、強ひて道に名稱をつけて説く。名は形象によりて命づくるもの也。四角なれば方と名づけ、丸ければ圓と名づく、而るにこの不可思議なる一物は、絶対的にして形なければ、吾は其の名を何といふべきかを知らず。然れども前節に於て述べたるが如く、天下の萬物は、皆この物の力に由りて生育するが故に、始く之に字して道といふ。されども只道

○第三十四章、萬物歸焉而不爲主、可名爲大。

といひたるのみにては、未だ其の廣大無邊なる狀を盡すこと能はず、故に強ひて之に名づけて大といふ也。大と名づけたるのみにては、未だこの道の周く流行して滯る所なき狀を言ひ表はすに足らず、故に大と名づけたる上に、又強ひて名づけて逝といふ。されども逝と名づけたるのみにては、この道の如何なる處にも、至り届かざる所なく、所謂之を放てば六合に彌る中庸章句小序の妙を言ひ表はすに足らず、故に逝と名づけたる上に、又強ひて名づけて遠といふ。されども遠と名づけたるのみにては、この道が古今に互りて變改することなく、能く萬物を生生し、萬物復其の本根に歸り、循環して窮らず、易辭繫に所謂退いて密に藏るる妙用を言ひ表すに足らず、故に遠と名づけたる上に、又強ひて名づけて反といふ也。それ唯一つの道なり、強ひて名づけて大といひ、逝といひ、遠といひ、反といふも、皆これ己むことを得ざるの名にして、其の實は則ち言語道斷得て之を稱すべき無き也。

○故道大、奕本無故字。

○故道大、天大地大、王亦大、域中有四大、而王居其一焉。

○而王居其一
焉河上無而字
奕本作而王處
其一尊

人法地地法天天法道道法自然

【譯讀】故に道は大なり。天も大なり。地も大なり。王も亦大なり。域中に四大有り。而して王其の内に居る。人は地に法れば地なり。天に法れば天なり。道に法れば道なり。自然に法る。

【字義】○亦も亦なり。道天地の三者にくらべて、人は小なる者なるが故に、王亦大といへる也。王者の大は衆民の歸往するによりて能く其の大を成す也。○域中 宇宙の域内をいふ。人の思量の及ぶ所までの大なる界の義。

【直解】第三節、宇宙間の四つの大いなる者を列挙して虚無自然の理に歸入す。さて前に述べたるが如くなるが故に、道は一番に大いなる者なり。次は天が大いなり。次は地が大いなり。次に王も亦大いなる者なり。この大いなる宇宙間の域内に、この四つの大いなる者ありて、王は萬民の主たるが故に、其の内に居る也。中庸に、致中和、天地位焉、萬物育焉、また可以贊天地之化育、則可以與天地參矣とあるは是れ也。そこで人が地に法れ

ば、地の私載なきが如く其の働を同うし、天に法れば、地の私覆なきが如く其の量を同うし、道に法れば、道即ち主宰の私心なくして萬物を生成し、所として在らざるなきが如くなるを得、故に人の身は眇たる滄海の一粟の如き者なれども、天地道の三つの者と同一なることを得る也。かく三つの大いなる者と同一にならんことを欲すれば、無心無私にして自然の理に法るべき也。

【辨正】先儒多くは人法地、地法天、天法道、道法自然と句讀を施すと雖も、それにては五大となるのみならず、豈王者只地に法るを得るのみにして、天に法り、道に法ることを得ざらんや、天地はもと心なし、而かも亦轉じて相法るべけんや、又況や地法天、天法道、道法自然にては、是れ道は天地の父にして、自然の子たる也。支離決裂、意義通せず、故に今李約の説に従ひて解す。

○河上公、以此爲重德章。
○沈曰此章、論躁之失。

○靜、突本作靖、通古無躁字、應作越。

○第十六章、歸根曰靜、第三十七章、不欲以靜、天下將自定。

重爲輕根章第二十六 四十七言

【章旨】重靜の根本たることを言ひて、人君の當に輕躁の舉動あるべからざるを戒む。

重爲輕根、靜爲躁君。

【訓讀】重は輕の根爲り、靜は躁の君爲り。

【字義】○根 本なり。○躁 さわがしき也、動くことの甚だしくして煩擾クワヅラハシなる義。○君 主なり。

【直解】第一節、主意を説く、さて心が重重しく落ち著きたる者は、能く輕輕しき者を動かし使ふ、之を草木に譬ふれば、根柢は重く、枝葉は輕し、枝葉は風に靡けども、根柢は動くことなし、故に重は輕の根本たる也、又靜かに凝として其の位を離れざる者は、多くの躁しき者を役使す、人君其の位に靜坐し、百官其の命令を奉じて奔走するが如し、故に靜は躁の主君たりといふ也、此の如く萬事すべて重と靜とを以て本とする也、老子億

に曰く、天下ノ至重ハ、地ニ若クハ莫シ、而シテ萬物皆地ニ出ヅ、是レ重爲輕根ナリ、天下ノ至靜ハ、地ニ若クハ莫シ、而シテ羣動皆地ニ歸ス、是レ靜爲躁君ナリと。

是以君子終日行不離輻重、雖有榮觀、燕處超然。

【譯讀】是を以て君子は、終日行けども輻重を離れず、榮觀ありと雖も、燕處して超然たり。

【字義】○輻重 輻車は前後に蔽あり、平常無事の時、又は軍事ある時、所用の衣食器具等を載せ、常に行く者の後に在り、其の累重なるを以て輻重と稱す。○榮觀 紛華の觀をいふ、盛んなる花見物見などをいふ、公羊傳に「常事、視トイヒ、非常、觀トイフ」と。○燕處 猶ほ燕居といふが如し、燕は安なり、閒暇無事にして安んじて居る義。○超然 高く遠ざかりて懷に繁著せざる貌。

【直解】第二節、君子の行を引きて前節に説きたる重靜の貴ぶべき證とす、前述の如くなるが故に、君子は朝から晩まで、即ち一日中旅行する(輕に

○君子、河上、弱本、竝作、聖人、突本、離下有、其字、○燕處、突本、燕作、宴、通。

喻ふ)にも輻重といふ衣食器具などを積む車(重に喻ふ)を身に離すこと
なく、必ず後に隨へて行くなり、故に輕からず、以て重は輕の本たるを知
るべき也。又紛華にして賑かなる物見遊山(躁に喻ふ)などの事ありとも、
己は内に安んじ居て超然として高くかまへて、かかる馬鹿氣たる躁の
仲間入を爲すことなし(靜に喻ふ)故に躁しからず、以て靜は躁の主たる
を知るべき也。

如何萬乘之主而以身輕天下、輕則失臣、躁則失君。

○如何、河上、彌
竝作、奈何、奕本
作、如、之、何、
○輕、則、失、臣、彌
本、奕、本、竝、臣、作
本、永、樂、大、典、臣
作、根、愈、懣、曰、當
從、之、

【譯讀】如何ぞ萬乘の主にして而して身を以て天下に輕くせん。輕ければ
則ち臣を失ふ。躁ければ則ち君を失ふ。

【字義】○萬乘之主 兵車萬乘を出す大國の主、即ち天子をいふ。

【直解】第三節、反面より説く。重くして且つ靜かなることを貴ぶ所以は、前
述の如くなるに、之を如何ぞ萬乘の大國の君主にして、其の身を以て天
下に輕輕しくして人に先だたんとするや、餘りに輕輕しき時は、臣下の
望を失ふに至るべし。又餘りに躁しければ、君たる道を失ひて天下の民

を御すること能はざるべし。論語而に子曰、君子不重則不威といひ、大學
に靜而后能安、安而后能慮とあり、重靜の貴ぶべきことを知るべき也。
趙充國、諸葛孔明の兵を用ふる、李沆の相たる、皆此重靜の道を用ふ。王莽
は躁にして多事、安石は有爲を喜む、宜なり其の保全を得ざるや、慎戒す
べき也。

【辨正】王輔嗣本、末の二句を輕則失根、躁則失君に作り、焦弱侯、俞曲園等も
之に従ひ、起首の二句に應ずと爲す。李宏甫註に「輻重アレバ、則ち終日行
クト雖モ、而カモ輕ト爲サズ、何ゾヤ、重之ガ根タルヲ以テ也、常ニ燕處ス
レバ、則チ榮觀アリト雖モ、而カモ躁ト爲サズ、何ゾヤ、靜之ガ君タルヲ以
テ也、故ニ輕ケレバ則チ重根ヲ失ヒ、躁ケレバ則チ靜君ヲ失フ」とあり、こ
れにても通せざるにあらざれども、今は河上公本に輕則失臣とあるに
従ひて解釋す。

○河上公、以此爲巧用章。

○善行無轍迹、奕本、行下有者、字、下四句、故同、轍、奕本作徹、案、古無轍字、故借、用、○善計不用籌、策、河上、計下有、者、字、弱作善、數、無籌策、陳象古、作善計無籌算、○兩而不可、陳、象古作、故不可、淮南子、開解下、並有也字。

善行無轍迹章第二十七 九十一言

【章旨】此章、聖人が虚無自然の道を體して、人物の自然に任せて之を治むる妙諦を説く。

善行無轍迹、善言無瑕譎、善計不用籌策、善閉無關鍵、而不可開、善結無繩約、而不可解。

【譯讀】善く行くものは轍迹なく、善く言ふものは瑕譎なし、善く計るものは籌策を用ひず、善く閉づるものは關鍵なければ、而かも開くべからず、善く結ぶものは繩約なければ、而かも解くべからず。

【字義】○善 天然自然に順ふをいふ。○轍迹 轍は車の輪の輶る所の迹なり、迹は足あと也、無轍迹とは迹の目立つことなきをいふ。○瑕譎 瑕は玉の玷なり、譎は責なり。○籌策 「カズトリ」數を計る者の用ふる算なり、竹を以て之を爲る、形箸の如し。○關鍵 關はくわんぬき(門)木を以て横に門戸を持するもの、鍵はもと鍵に作る、門牡なり、横にさす

を關といひ、豎にさすを鍵といふ、二者皆門戸を固むる所以の木。○繩約 繩は索なり、約も亦索なり。

【直解】第一節、虚無自然の妙を汎論す、善く道を行く者は車のわだちや、足跡を地に印することなし、それと同じく聖人の行爲は、すべて虚無自然の道に従ひ、第二章に處、無爲之事、行、不言之教、とあるが如くするを以て、其の行ひし事の形迹が、目立ちて人に知れざること、恰も鳶などの飛び去りたる迹が、空中に遺らざるが如くなる也、又善く言ふ者は、當に言ふべき時に當りて、然る後に言ひ、法にあらざれば言はず、すべて自然に任せ、是を是とし、非を非として、聊も曲りたることを言はず、故に決して瑕即ち語病なく、譎め責めらるる如き失言なき也、善く自然に従ひて數を計る者は、籌策即ち「カズトリ」などを用ひずして、其の數が判る、これ聖人無私無欲にして、己の利益の爲めに、六ヶ敷き計算などを爲さざるに由る也、又善く自然に閉ざされたる者は、人の作りし横に挿す門の門や、豎に挿す戸の「サン」などを用ひざるも、決して開くことは出来ざる也、花の蕾、貝の合ひたる、容易に開くことの出来ざるにても知るべし、又我が國

の人民が外國へ逃げ出すことを防止するが爲めに、嚴重なる關所(即ち
 關鍵)などを設けて固めたりとも、人民が其の君に服せざれば、到底之を
 防止すること能はざる也。之に反して若し國君が虚無自然の道を以て
 關鍵に代へ、それに因りて人民を治むれば、人民は自然に其の德に懐き、
 心から悦服するに至り、決して外國へ逃亡するが如きことはあらざる
 也。これを善閉無關鍵而不可開とはいふ也。又善結の一句も同じ事を言
 ひたるにて、自然に善く結べる者は繩を以て束ぬることなけれども、解
 くこと出來ず。藤蔓の樹石に絡へるは容易に解くことの出來ざるにて
 も知るべし。又君臣の閒柄にても同じ道理にて、一旦君の仁德を以て固
 く民の心を結ばば、別に條約を結ぶの憲法を定むるのといふことを用
 ひずして、民は心から君に懐きて悦び服すること、猶ほ赤子の慈母を慕
 ふが如くなる也。かくなりたる上は、國家は誠に安泰にして、如何なる外
 敵が來り伺ふとも、決して患ふるに足らざる也。吳澄云ふ善く結ぶ者ハ、
 結バザルヲ以テ結ト爲ス、故ニ繩約ナクシテ其ノ結、自ラ解クベカラズ、
 と。第五十四章に善建者不拔、善抱者不脱とあると并せて考ふべき也。

是以聖人常善救人。故無棄人。常善救物。故無棄物。是謂襲明。

○故無棄人、突本、
 本故下有入字、
 故無棄物、突本、
 故下有物字。

【譯讀】是を以て聖人は常に善く人を救ふ。故に棄人なし。常に善く物を救ふ。故に棄物なし。是を襲明と謂ふ。

【字義】○救 拯なり。○襲明 襲は藏なり。聖人内に明德あれども包み藏して見はさざる也。和光同塵と同じ義なり。

【直解】第二節、聖人は、人また物の自然に任せて之を治むることを説く。さて世の中に虚無自然の道ほど尊き者はなし。されば自然に任せて民を治むれば、世は太平無事に治まる也。而るに免角自分流義を出すが故に、却つて亂るるに至る也。是を以て聖人は常に自然の道に従ひ、善く仁德を以て人を救ふが故に、天下に棄つべき人としては無き也。例へば盲人を以て樂人と爲す類なり。盲人は目の見えざる廢人なれども、却つて心專一なるが故に、記憶力も強く、耳も聴く、藝事に精を出せば也。又馬鹿正直にして融通の利かざる男は、倉番などに用ふれば、間違の生ずること無

き也。徳川家康の語に「藪草といふ草は、臭も悪しく食ふべからざるものなれども、これを乾して薬に用ふれば、十薬と云ひて功能多し、人を用ふるも用ひ方にて用立つ者なり」と、これ無棄人の譬とすべし。又人の性は本善なれば、如何なる悪人にも、之を包み容れて棄つることなければ、知らず識らず、虚無自然の徳に感じ、化して善人となるに至るべき也。孟子が「人皆以テ堯舜タルベシ」下告子といひしは是れ也。管に人のみならず、聖人は常に自然の道に従ひて、善く禽獸草木等の萬物を救ふが故に、萬物皆それぞれの用に立ちて、天下に棄つる物とは無き也。例へば馬は重荷を負ひて遠きに行き、牛は田を耕し、雞は晨を司り、犬は夜を守り、大木は棟梁と爲し、小木は垂木と爲し、牛溲(牛尿)馬勃(馬糞)敗鼓の皮に至るまで並び蓄へ、并せ用ひて遺す所なく、所謂適材を適所に用ふるが故に、善きも悪しきも何一つとして棄つる物とは無き也。右の如く聖人の天下の人と物とに於けるや、善惡兼ね容れ、清濁并せ吞み、一物として棄つることなく、善く自然の道によりて之を救ひ、而して救ふ者も、救はるる者も、互に無爲の間に相忘れ、其の功績も目立ちて彰はれず、これを襲

○第四十一章、明道若昧。

明即ち心の光明を包み藏して外に見はさすといふ也。所謂和光同塵の徳あるが故に、すべての人と物とを棄つることなく、之と一つとなりて、己の徳に同化せしむる也。

故善人者、不善人之師。不善人者、善人之資。

【譯讀】 故に善人は不善人の師、不善人は善人の資なり。

【字義】 ○善人 前節の聖人を斥す。 ○資 助なり。

【直解】 第三節、聖人は、善人、不善人を并せ取りて人を治むる用と爲すことを説く。前節に聖人常善救人とあるが如く、善人は實に不善人の師表なれば、不善人は善人の善行を見習ひて、己の不善の行爲を改むるを得る也。例へば人は己の私欲を満足せしむる爲めに、金錢に窮し、或は詐欺を爲し、或は盜賊を爲し、それが爲めに身を滅ぼすに至る者少からず。かかる不善人も、其の性はもと善なれば、久しく無欲にして誠實なる善人と共に居れば、知らず識らず、其の徳に感化せられて、己の私欲にうち克ちて善人となることを得る也。家語本六に「與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞

○陸希聲、無兩者字。

其香、即與之化矣とあるは是れ也。又不善人は喜んで善人を害せんとする者なり、善人乃ち其の摩厲する所となりて、以て其の善を増益す、是れ人の不善が我が善行を助くる也。詩經小雅鳴鶴に他山之石、可以攻玉とあるは是れ也。加之不善人の善からざる行爲を見て、自ら戒と爲すも、亦我が徳を進むるの助となる也。論語仁に子曰、見賢思齊焉とあるは、この章の善人者、不善人之師と同じ意なり。また見不賢、而内自省也とあるは、不善人者、善人之資と同じ意なり。

不貴其師、不愛其資、雖知大迷、是謂要妙。

【譯讀】其の師を貴ばず、其の資を愛せずんば、知なりと雖も大に迷ふ、是を要妙と謂ふ。

【字義】○要妙 肝要なる妙道の義。

【直解】第四節、善人、不善人の相離るべからざる所以を言ひて、此章の收束と爲す。さて前述の如くなれば、不善人は我が師たる所の善人を貴んで、つとめてそれに接近し、自然と其の徳に化せらるるやうに爲すべく、又

善人は我が進徳の助たる不善人を能く愛して、我が徳を以て彼の不善人を救ふやうに爲すべし。然るに之に反して、不善人は我が師たる善人を貴ばずして疎略にし、又善人は我が助となる所の不善人を愛することなく、疾み嫌ふが如きことあらば、縦令自ら以て知ありといふと雖も、實は大いに迷ひ惑ふ所ありて、未だ眞の知者といふに足らず。この善人、不善人の相離るべからざる所以を知りて、其の師を貴び、其の資を愛す、これを肝要にして微妙なる自然の道と謂ふ也。

○河上公、以此爲反樸章。
○沈曰、此章貴守樸。

知其雄章第二十八 八十六言

【章旨】此章、聖人虛無の道を體し、能く亂世に處して身を全うすることを説く。

知其雄、守其雌、爲天下谿、爲天下谿、常德不離、復歸於
嬰兒、知其白、守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不忒、復
歸於無極、知其榮、守其辱、爲天下谷、爲天下谷、常德乃
足、復歸於樸。

【譯讀】其の雄を知りて、其の雌を守れば、天下の谿たり。天下の谿たれば、常徳離れず。嬰兒に復歸す。其の白を知りて、其の黒を守れば、天下の式たり。天下の式たれば、常徳忒はず。無極に復歸す。其の榮を知りて、其の辱を守れば、天下の谷たり。天下の谷たれば、常徳乃ち足りて、樸に復歸す。

【字義】○雄 剛強なり、陽なり、動なり。○雌 柔弱なり、陰なり、靜なり。守

雌とは第十六章の守靜篇の守靜に同じ。○爲天下谿 天下の民の歸往する所たるに喩ふ。谿は低下にして衆くの水の注ぐ所なれば也。○常徳 いつも易らざる眞常の徳をいふ。○嬰兒 無知無欲の至に喩ふ。○白 智慧の明白なる也。○黒 闇黒の義にて、愚を謂ふ。○式 楷式なり、物の正を取る所なり、民の之に則るをいふ。第二十二章にも聖人抱一爲天下式とあり。○不忒 不爽なり、式は物の正を取る所、故にたがはずと曰ふ。○無極 易經にていふ太極といふ物もなき其の以前即ち何も無き處をいふ。第十四章に復歸於無物とあり、無極は即ち無物の始を斥す。○榮 樹木の花の咲く義より、轉じて人の高位高官に昇りて、はれがましく立派なることにいふ。即ち富貴顯榮の類なり。○辱 榮の反對なり、榮は富貴にして驕矜の意あり、辱は卑賤謙下の義。○谷 山と山との間の空虚なる處を謂ふ、空虚なるが故に、すべて高き處より落ち來る物は、善惡の別なく、如何なる汚物にても皆受け容る、聖人謙遜して人に下る、故に天下皆之に歸往するに喩ふ。○樸 山より伐り出したる儘の「アラキ」にて、未だ細工を加へざるもの、以て生得の

○第十章、天門開闢、能爲雌乎。

○第十章、專氣致柔、能如嬰兒乎。第十五章、含德之厚、比於赤子。

ままの天性又は虚無自然の道に喩ふ。

【直解】第一節、同じやうなる事を三疊して、聖人虚無の道を體して世に在ることを説く。先づ動物を見るに雄雌の別あり、雄は唱へて雌は和す、雄は先だちて雌は随ふ、雄は剛強にして、雌は柔弱なり。そこで聖人は其の雄の剛強なる徳をば、十分に心得て知り居れども、それを出し用ひず、却つて其の雌の徳たる柔弱にして、静かなる所を守りて失ふことなれば、即ち老子の所謂三寶の一たる不敢爲天下先第七十といふ訓と同じく、何事も人より我が方へ受くるやうにし、我より人に先だつことなく、驕り充ぶりて人と争ふこともなければ、自然に天下の人が我が徳を慕ひて歸服し來ることは、宛も衆くの水が低下にして虚しき谿に聚り會するが如くなる也。すでに天下の谿となり、低下の地に安んじ、無私無欲にして物と争ふことなければ、常德即ち何時も易ることなき虚無の徳を保ち得て、須臾も其の身を離るることなく、無知無欲にして自然の儘なる赤坊あかんぼうに復歸することを得る也。又人は私欲多き時は、心が昏くなるものなるが、聖人は無欲なるが故に、其の智が明か即ち自なる也。而るに

四達能無爲乎。第四十一章、太白若皤。

其の明かなる智慧を用ふべき道を十分に知りて居ながら、其の智慧を出し用ふることなく、黙黙として獨り昏くして愚か即ち黒なる所を守りて居る、即ち和光同塵の徳あるが故に、天下の人の楷式てほんとなり、四方より歸服し來り、就いて正を取るやうになり、一世を太古醇樸の域に挽回することをも出来るなり。すでに天下の楷式となる程なれば、眞常の徳は其の身に備はりて爽ふことなく、太極の本たる無極即ち何物もなき本始の虚無の處へ立ち歸ることを得る也。荀子宥に孔子の語を引きて、聰明聖智、守之以愚とあるは、この知其白、守其黒の語と同じ意なり。又聖人は榮即ち富貴顯榮となるべき道を知りて、其の地位に在れども、常に無心なるが故に、之を以て人に驕り充ぶることなく、謙遜にして人下り、辱即ち貧賤に安んじ、それを守りて居るが故に、衆人皆其の徳を慕ひて之に歸服し、天下の谷となる也。谷は空虚にして低下の地に在り、すべて高き處より落ち來る物は、善き物も汚き物も、一切擇ぶことなく受け容るるが故に、喩へて言へる也。すでに天下の谷となれば、眞常の徳は、我が身に裕ゆたかに足りて虧かくることなく、彼の少しも細工を加へざる山

○第三十七章、無名之樸。第三十章、道常無名、樸雖小、天下不敢臣。

○故大制不割、奕本作大制無割。

出しの儘の材木(即ち樸)に喩ふべき生得の天性に復ることを得る也。以上嬰兒といひ、無極といひ、樸といふも、韻を押む爲めに其の稱を異にしたるまでにて、つまり虚無自然の道に喩へて言へる也。

樸散則爲器。聖人用之則爲官長。故大制不割。

【譯讀】樸散すれば則ち器と爲る。聖人之を用ふれば則ち官長たり。故に大制は割かず。

【字義】○樸散 散は分散なり、未だ細工を加へざる「アラキ」が人工によりて色色に分るる也。即ち一本の「アラキ」が之を割り或は截ちて種種の器物にもなり、棟にも柱にも板にもなるが如し。○器 それぞれの用に立つもの也。百官衆有司に喩ふ。○用之 之は樸を斥す。○官長 君主を斥していふ。○大制 制は仕立てる也。割断する義、大制は割断して器と爲さず、無爲自然の道に従ひて其の天性を全うする也。論語政に子曰、君子不器とあるに同じ。

【直解】さて山出しのままなる樸は、一見無調法の如くに見ゆるもの也、然

天下、浪人
汝ノ子也
ラカリハ
ルカリハ

○莊子(馬蹄)殘樸以爲器、工匠之罪也。

るに技巧を好むは人情の常なれば、之に色色の細工を加へ、或は斲りて柱と爲し、板と爲し、更に其の上に彫刻又は彩色を施し、其の他種種の器物を造り出す也。之を樸散則爲器とはいふ也。それと同じく聖人は無私無欲なるが故に、この樸、即ち虚無自然の道を保ち守りて失はざれども、衆人は知欲多ければ、この樸素を守ること能はず、樸が色色に分れ散りて聰明智巧の器となり、一技一藝の士となり、例へば文筆を善くする者は編修官となり、計算を善くする者は財務官となり、外國語を善くする者は通譯官となり、戦術に長ずる者は參謀官となるが如く、それぞれ其の長ずる所の器能に従ひて、百官衆有司として之を任用する也。即ち聖人は百官衆有司を以て器と爲して之を用ひ、備はることを一人に求めざる也。論語路に君子…及其使人也、器之とあるは是れ也。然るに聖人は之に異り、未だ嘗て其の身の器たることを欲せず、終始この樸の道を保ち守り、この道を用ひて百官の長即ち君主となり、百官を總統し、天下の民を率ゐて復樸即ち虚無の道に歸らしむるやうにする也。論語政に君子不器また禮記學に大徳不官、大道不器とあるは是れ也。第六十七章に

○第五十七章
我無爲而民自
化我無欲而民
自樸。

不敢爲天下先故能成器長とある成器長は即ちこの章の官長に同じ器
は則ち官にして官は則ち器なる所以を知るべき也。上述の如くなるが
故に大制即ち大いなる自然の仕立方は樸即ち無爲の天性の儘に任せ
置きて愁に人工を加へて断ち割くことを爲さざる也。彼の樸を断ち割
くこと工人の爲の如きは小制にして所謂樸散して器となり一技一藝
の官吏たるに過ぎず。聖人は終始この樸の大道を全うして其の身に體
す故に無爲にして断ち割くことを爲さざる也。之を要するに古の聖人
は剛に居らずして柔に居り智に居らずして愚に居り榮に居らずして
辱に處り其の樸を亡はず。断ち割くを貴ばず其の無爲自然に任せて其の天
眞を全うするを言ふ也。莊子の山木馬蹄等の篇にも此意を敷衍す并せ
て考ふべき也。

將欲取天下章第二十九 五十八言

○河上公以此
爲無爲章。
○沈曰此章貴
無爲。

【章旨】 此章萬物各自然の天性あり作爲して之を害すべからざることを
説き無爲の貴ぶべきを言ふ。

將欲取天下而爲之吾見其不得已。天下神器不可爲
也。爲者敗之執者失之。

【譯讀】 天下を取りて而して之を爲さんと將欲するは吾其の得ざるを見
る已。天下は神器なり爲す可からざるなり爲す者は之を敗り執る者は
之を失ふ。

【字義】 ○將欲 二字連讀するは古書に例多し願ひ欲する義なり。 ○取
天下 取の字は左傳 襄公三 年に取我田疇而伍之また史記 汲黯 に何乃取
高帝約束紛更 之爲の取の如く軽く見るを可とす即ち天下の民心を
得るをいふ。 ○爲之 爲は作爲する所あるなり一解に爲を解して治
と爲す亦通ず。 ○神器 器の神靈なる者の義即ち器用を以て天下に

○爲之突本之
下有者字。
○突本天下上
有夫字。